

家久公  
寬永十年

後  
編  
舊  
記  
雜  
錄  
卷八十六

594 「家久公御譜中」

家久自寬永九壬申年迄于今茲癸酉正月在于江府、奉謁  
大樹公賀年首之儀式、依舊矣、同年同月二日、家久贈使  
者及太刀・馬代・方物於中山王・賀今年自太明皇帝賜位  
冠之勅使渡楫、詳備于書矣、

595 「正文在琉球國司文庫」

因往古之例自大明 皇帝爲被進寶位、當年 勅使之船可  
有渡楫之由、珍重多幸、爲此等之祝儀太刀一腰・馬一疋  
白銀五百兩、此外方物錄于別楮、猶使者讓演說不能詳也、  
恐惶不宣、

「朱力幸」  
「寬永十年」正月二日

謹上 中山王

中納言家久〔御判〕

596 「正文在琉球國司文庫」

改年之御慶千喜万悦不可有盡期候、仍我等于今致在江戶  
候、定當春夏之間可令歸國候、然者就御昇位、從唐官船  
被差渡之由、尤以目出度候、於在國者別而可致馳走処、  
右如申當地江依滞留、疎意之牀令迷惑候、將亦太刀一腰  
・馬一疋・宇治茶一壺進之候、猶嘉喜重疊可申加候、恐  
惶謹言、

「朱力幸」  
「寬永十年」正月二日

進獻 中山王

中納言家久〔御判〕

597

「全御譜中」

「正文在清水土中村字右衛門」

年始之慶賀万喜々々、猶更不可有盡期候、此等之爲祝儀  
太刀一腰・馬一疋懇勸之至候、猶永日中慶事可申加候、

謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年」 正月三日

家久○(花押)「御判」

式部大輔殿

598

「家久公御譜中」

「正文在島津市之助忠祝」

猶くかちきよりの文とも手もし申候間、をくり候  
へく候、女はう衆いづれもくつ、かなくふうくう  
のよし、いよく申度候、しろへも見まいのよし、  
さやうに候てこそたかいのなくさミたるへく候、や  
かてく下向申候て申候へく候、かしく、  
わさとせうそこ、ことに小袖・はかまをくり給候、心さ  
しのほどうれしく思ひまいらせ候、此はうふしの事にて

候、こゝろやすく思ひ候へく候、やがて御いとまいて候

よし申候まゝ、ちうしん申候へく候、この白ちうつるの  
羽をくりしんし候、ゆゑんとりそへ申候、くハしき事此  
使申候へく候、めて度く、かしく、

「朱カキ」  
「寛永十年」 正月廿三日

長もし  
まいる  
いゑ久  
より

申給へ

599

「家久公御譜中」

同年同月二十四日 台徳院殿御佛殿落成、御一門及大小  
名獻金石之燈籠各随分、時家久獻石燈籠一基於 尊前、  
且獻金燈籠一基於御佛殿唐門外右方、

600

「○△申」  
「△正文在本田助之丞」  
壹匁五分出銀請取

高百五十四石九斗六舛

一眞米八石五斗九舛二合八才、但老石廿六匁五分直成、

一鳥目老貫九百文者、但廿五匁之直成、

右銀ニ、

貳百三拾貳匁四分四り者皆濟、

寛永拾年二月十日

時任右京亮

○〔印〕

猿渡城之介

○〔印〕

本田少八郎殿

601 「家久公御譜中」

覚

一鏈千八百本

一鉄炮三千丁

一弓千貳百丁

右者惣高六拾万石三人運役之賦、  
〔本マ、レ〕

一乘馬六百七十四騎

一鉄炮千八百六丁

一弓六百四十七丁

一鏈七百五十本

一乘馬五百騎

一鉄炮千五百丁

一弓五百丁

一鏈七百本

寛十年二月十日

602 「全御譜中」

同年二月十一日、島津久元・伊勢貞昌從家久在于江府、

贈書於在國之同職喜入忠續・川上久國、而言接待九州廻

國 上使小出對馬守・城織部佐・能勢小十郎之事、如左

矣、

603 「御文庫拾八番箱廿六卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶以餘ニ不入儀ニ御造作有之可然候、今度之 上使

御法度たて候へく候間、中く御振舞など可有御請

躰ニテ無之候、又先書ニ如申候、鎌雲州之儀早々被  
上候様ニ可被仰渡候、以上、

急度令啓候、然者池田覺左衛門昨晚爰元へ來着候而、  
御狀共具令披見候、就其今度國⑤〔追〕之御衆六与ニ被爲  
分、九州之儀者先書ニ如申候、小出對馬守殿・城織部  
佐殿・能勢小十郎殿ニテ候、

一今度從其元之御書中ニ、急ニ其地へ御着候はんやうに  
相聞得候而、殊外御ふためき之躰与相見得申候、先日  
新納勘解由殿ニ而委申越候間、定可相達候得共、其元  
之躰無心元存、以早打申候、右三人之内小出殿・能勢  
殿ハ上方へ知行御持候ニ付、今月十日・十一日ニ御打  
立候、城織部殿ハ爰元へ知行候付而、廿日過候而可爲  
被打立ニ相定候、如此候時者、上方へ織部殿ハ來月五  
六日之比可有御着候、左様ニ候て中旬比ニも御出船候  
はん哉、三月中ニ小倉へ御着候ハ、豊前國を四月中  
ニ被成御覽、筑前より寺澤志摩守殿、御知行所迄を御  
覽候而、壹岐・對馬へ被成御渡・其より五嶋へ御渡候

而、平戸へ可有御渡由候、就其此方へ御尋之様子者、  
種子嶋・屋久之嶋・飯之嶋をも可被爲見候由、御註  
候間、此三嶋へ可有御渡時分ハ、内々被爲聞候ハ、冬  
ニ成候而よりハ、種子・屋久之渡海自由ニ不成由候間、  
平戸より大村・天草を御覽候而、それより右三嶋へ冬  
ニならさる内ニ可有御渡由候間、我々申入候ハ、如仰  
冬ニ成候而よりハ北風ニ而屋久・種子ニ御渡ニ而、如  
地之御歸帆之順風有かね申候由候、乍去壹岐・對馬・  
五嶋・平戸・大村・天草御覽候てより、薩摩へ御越ハ  
自然ニ冬ニ可罷成候間、先平戸より鍋嶋殿知行筑後・  
肥後被成御覽、其より薩摩へ御越候て、大隅・日向・  
豊後被成御覽御登尤候、肥前・筑後・肥後を御殘し候  
て⑥薩摩へ御越候ハ、又跡ニ御越候はん間、とても屋  
久・種子へ御越之時分冬ニ成候ハ、右三ヶ國を被成  
御仕廻候てより、薩摩へ御越可然候はん由申入候へハ、  
平戸邊へ御渡之時分秋冬ニも成候ハ、我々如申候、  
先肥前・筑後・肥後御覽候而、薩摩へハ可有御越由候、

右ニ如申候、爰元御打立之躰、又豊前・筑前志摩守殿御知行所、老岐・對馬・五嶋・平戸迄御覽被廻候ハ、大略秋之末冬ニ可罷成候欵と存候間、其御心得候而、其元之御調彼是御分別尤ニ候、

一豊前へ御着候而、筑前寺澤志广守殿御知行御覽之様子、國々ニ而馳走小荷駄日用以下入候様子、いかにも能念を入候而見候ハ人、兩三人程も被仰付尤候、此方より之御使など、なきやうニ、旅人など、うちまきれ候て被見候様ニ可被仰付候、不可有御由断候、

一鹿兒嶋へ御着之時、於御屋形御振舞などの儀、七五三之用意被仰付之由候、中々左様之様子入申間敷候、七五三之儀ハ置候而、一汁一菜之御振舞をも御請有間敷之由候条、振舞などの御心遣不入事ニ候、黄門様御暇も定今月來月之間ニハ出可申候間、上使御國へ可被爲着時分者、可爲御在國候条、御会尺等之儀も被爲得御意候て可相究候間、可有其御心得候、内々黄門様御意ニも、御屋形ニて御數奇などを被遊候者、可

有御出候ハん哉など、出合申候得共、とても御屋形へ者御出有間敷躰と相聞得候、鹿兒嶋へも一日欵二日かの御逗留ニ而候ハん、自然御着候ハん晩者、御宿ニ而かろくと御振舞を可被仰付候哉、とても御合點有間敷様子ニ候間、御落着之ふるまひも入間敷候得共、中途へ人を御出候而可有御聞候、

一泊々ニ而、八木・馬之大豆・味噌・しほ・くつ・わらち之類、可被爲買程有之やうに可被仰付候が、御馳走之由候、酒肴などの類泊々ニて御首信候共、中々御請取有間敷候躰ニ御座候得共、先其所ニて亭主より出候様ニ被成、左様ニ候ハ、又治定其祝儀を可被成躰ニ候間、かやう之儀も入間敷ニ可相究と存候、乍去右ニ如申候、豊前・筑前寺澤殿知行の様子、よく御ミせ候て御分別尤ニ候、

一御國中御廻之時、御案内者儀、必くさふらひかましき衆御出し候儀、可爲無用之由、かたく被仰候、所々百姓共致案内者尤之由被仰候、自然そこくの道筋百姓

共ニて案内者など不罷成候ハ、鉄炮衆之様成衆をも御付候ハん哉と、達而被仰候間、御宿之見廻入間敷候、乍去地頭有之所者、下と不致狼藉様ニ可有之候、無地頭所へハ下と法度可被申付衆可被遣候哉、左様之儀も内と爲御心得候、先日申越候歴と之案内者ハ入間敷候間、其御心得尤候、

一 嶋くへ御渡候時、船之御用意肝要ニ候、陸路之御馳走者ちりはを一も御請有間敷候由候間、其元不入事ニ御用意かましき事御無用ニ候、舟之儀者いかにも丈夫ニ加子船頭可被御念入候、嶋へ御渡之時者、人衆をも如何ニもかろくと可有御列由候へ共、いか程御殘候儀も不被相知候間、先十端・七端・八端・十二三端程之舟十艘余可有御用意候、定當時者其元へせき舟有之間敷候、萬一御暇遅出申候ハ、関舟者大坂より可有御下候、

一 種子嶋殿へ早く被仰渡、三人之御宿掃除等可被仰付候、新敷家など被立候事者無用ニ候、供衆之宿ハ町ニて候

ハん哉、種子殿へ御内談尤候、八木・みそ・しほ等御買候ハんやうに可被仰付候、順風無之候ハ、種子・屋久へハ可有御逗留候ハん間、其内之賣米・味噌・塩等ふべんに無之様ニ可被仰付候、

一 泊と之御宿余雜作共入候ハん様ニ可被仰渡候、食被調候所・御休候所さへ候ハ、其余者入間敷候、定朝夕之調なども、此方よりハ被成間敷候間、なべ・すりはち・桶などの類被仰付、御宿へ可被遣置候、一日ニ五里六里程充可有御座候由候、自然食被調候家ハ其所へ御座候ハ、御休候所之家三間程之くす屋を可被相立候哉、板敷などハ無之候共、竹のすのこたるへく候、雪隠も新敷さへ候ハ、竹すのこたるへく候、自然其所へ寺など御座候ハ、御宿可被仰事尤候、

一 其所ニて乗馬小荷駄可入候、かやう之儀も豊前・筑前志摩守殿御知行所ニて之御様子御ミせ候而、内と其御用意有へく候、小出對馬守殿ハ乗馬二三疋御ひかせ可有由候、其外御兩人ハ御ひかせ有間敷由御座候間、

左様ニ御座候ハ、乗馬も余多可出候、小荷駄有之間

敷所へハ、方よりひきよせ候やうに御談合尤候、

一先書ニ被仰越候亂舞衆之儀、右之躰ニ御座候間、中々

入間敷欵と存候得共、遊行之時之様ニ被成度候ハ、

左も候はん哉、大笑とと、

一今度参候文ニ、御兩所共ニ無御判状御座候、筆者ハ高

野勘左欵と各被申候、猶相替儀候ハ、追々可申入候、

恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十年二月十一日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌〔判〕

下野守

久元◎〔花押〕  
〔判〕

川上左近將監殿

喜入攝津守殿

人々御中

〔家久公御譜中〕

〔正文在種子島藏人久時〕

以上

一書申候、仍北郷佐渡守内儀遠行之由、其間得候、笑止

千万絶言語候、愁腸迷惑之段令推察候、謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十年二月十五日  
家久◎〔花押〕  
〔御判〕

種子嶋左近大夫殿

〔家久公御譜中〕

光久

男女廿二人

女子

寛永十年三月十二日○誕  
生、不日夭亡、母貞昭一生、  
△

〔忠將一流系圖〕「本文ノ如ク兩譜異同アリ、参照アルヘシ」

右馬頭忠興ノ子

久雄

字萬壽丸 右馬頭

寛永十年癸酉三月四日誕生、母丹生新三郎女也、五歳六

〔寛永〕

十四年<sup>上</sup> 月喪父、經三月、同八月 將軍家光公使大老亡父遺領

無所泄可安堵之達 台命、因茲同年十二月廿七日詣江戸

城、拜謁 將軍家謝禮繼目安堵、獻以寶刀治工國光已下、而

後在江戸矣、

607 忠興一流系圖如左、

久雄

堯仁房 萬壽丸 從五位下 右馬頭 但馬守

寛永十年癸酉三月二十一日於日州佐土原誕生、母丹生新

三郎信房女、

同十四年丁丑萬壽丸時五歲 忝奉 將軍家光公之高命、相續

父忠興之遺跡、父忠興及久雄共早雖喪父而孤弱、相續當

家、誠 將軍家之恩德山高海深、豈無所謝者乎哉、

608 「右馬頭忠興譜中」

寛永十年癸酉之春參勤于東武時、忠興奉高命築 玉城外

郭之石垣、

609

「家久公御譜中」

「正文在肝付主殿久兼」

「家久公御筆」

返くはん生のよろこひとして使をこし申候、文共

つかハし候へく候、く、かしく、

たねしまよりはん生のよしきこえ、めて度候、このほと  
心もとなく候つるに、まんそく申候、よそのうへにても、

新さう事おもひいてつきせぬもの候て、老のなミたくち

せぬ袖のうへとうらミ、やうく花のさかりに成ゆき申、

あハれ人の身ほとしられさるこその花申てハ、詠め候つ

る今ハしての山と、花も月もいらぬうきよやありし世の

事ともおもひいつるはかり也、やかて我か身のうへとよ

そならず候、又く、かしく、

「朱カキ」三月十日 中納言

ひかし いゑ久

むよし まいる



「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓候、

一昨日<sup>◎</sup> 御城へ諸大名御出仕候処、何も 御前へ被召出、

黒田右衛門佐殿之儀御直ニ御承候趣者、去年於筑前家

中之者と私取合之儀ニ付謀叛企之由、横目衆被申上候

間、此中細々被遂御穿鑿之處、其證據共無之候間、連

々無行儀うつけ人にて候へとも、此節之儀者、國をも

無吳儀被遣置之由被仰出候、就其筑前表へ之御心遣不

入儀候間、其元へ米四五千石被殘置之由候を、上使

之時可入程被召置、其餘者早々御上せ尤候、殊外銀子

之入事候間、不可有御油断候、其元米之直成能候ハ、

路次之御造作彼是被成算用、其元ニ而も御うらせ候ハ

ん哉、御談合次第ニ候事、

一此中黒田殿儀ニ付、御暇も出かね候様ニ取沙汰御座候

つる間、定近日御暇之儀可被仰出との儀ニ候間、御暇

出候ハ、早々御左右可申候事、

一其表へ御越之 上使三人之内、城織部殿者此地を二月

廿八日ニ打立被爲上候条、今月十日時分ニこそ京都へ

可有上着候、左様ニ候て、京都にて用意共被成出船候

ハ、漸今月中ニ欵來月初ニ欵豊前迄可爲御着候、先

書ニ如申候、種子嶋を夏中ニ可有御覽由、被仰候つれ

とも、豊前・筑前・杵岐・對馬・五嶋先御廻候て、夏

中ニ薩厂へ御越者、中々罷成ましく候間、五嶋より平

戸へ御渡候ハ、先肥前・筑後・肥後御覽候而薩厂へ

御越、それより日向・豊後御覽候而、御勝手能候ハ

由申入候へハ、屋久・種子へ薩摩よりの海路冬舟にて

ハ、自用ニ難成由御聞及候条、先夏中ニ種子嶋へ可有

御渡由候、御分別候て御覽候へ、豊前・筑前を御覽候

ニも、いかにはやく相濟候とも、四月・五月ニこそ御

見廻可有之候、左様候而杵岐・對馬・五嶋などへ御渡

候ハん事、遠渡之儀候間、舟之往還自用ニ罷成ましく

候条、平戸迄可有御座候間ニ、大略八月ニ移候ハん欵

と存候、最前<sup>◎</sup>御船元へ新納右衛門佐殿・町田勘解

由殿爲 御使可被相越由候つれとも、其儀者相留候而、  
いかにもかろき衆を被差遣、御使と無之國との馳走之  
様、彼是御見せ候様ニと申越候、弥其御心得尤候、於  
様子者新納勘解由殿にて委申達候間、不能細書候、恐  
惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年」  
三月十六日

伊勢兵部少輔（花押）  
貞昌（判）  
下野守  
久元（判）（花押）

川上將監様

喜入攝津守様

人々御中

「末紙ニ」  
喜入攝津守様

久元

川上將監様

まいる

下野守

伊勢兵部少輔

西三月十六日ノ狀四月四日ニ御道具衆持下候、但黒田殿之儀御前相濟

候間、米仕者可申由候事

611

「家久公御譜中」  
「正文在琉球國司」

覚

一 去々年新納加賀守殿・最上土佐守殿を以申定候、唐へ  
御物銀過分ニ可被召渡儀、向後無相違可有談合事、  
一 琉球出物之儀、去年より自今已後高壹石ニ付壹匁五分  
たるへし、但唐之冠船渡海年、一年分可爲五分出銀事、  
一 自然御出陳可有之時ハ、從琉球も銀子御合力可被爲申  
候、江戸より被 仰下候間、今度申渡候  
一 唐ニて糸直成高直ニ罷成候、左様ニ無之様ニ可被仰渡  
候、并糸次第ニ惡罷成由、上方之藏衆を被申下候間、  
念を入よき糸を買取候様ニ、才府官舎可被仰渡事、付  
掛へり過分ニ御座候事、付算用狀遣候、  
一 仕上物其時々ニ無油断可被上せ事、  
一 南蛮人都之嶋之者共、致許容之儀曲事ニ候間、向後無

其儀樣ニ堅可被申付事、

寛永十年三月廿日

▽○  
在日付之下

河上左近將監○(花押)判

喜入攝津守○(花押)判

琉球

三司官

參

下野守

「吳本ニ左ノ右書有之  
右之條書町田勘解由次官殿御持下被成候間、七月廿四日ニ受取被成候」

612

「全御譜中」

去年四月、家久嫡子光久生男子後號  
綱久、中山王聞知之、則

使久米具志川王子進獻御太刀・御馬於家久、而奉賀嫡孫

降誕之事、因家久報謝如左矣、

613

「正文在琉球國國司」

去歲八月二日之芳墨到來、令披閱候、然者薩摩守繁昌之  
爲祝儀、久米具志川王子渡楫、殊御太刀一腰・御馬一疋

御慰懃之段、欣然々々、猶王子讓演說不能審候、恐惶謹

言、

「朱カキ」  
「寛永十年」季春廿一日  
中納言家久○(花押)御判

進獻 中山王

614

「光久公御譜中」

所示之花緘披閱、珍重多幸、然者就小兒誕生之儀、以久

米具志川王子御祝詞、殊御太刀一腰・御馬一疋到遠境御

懃懃不識所謝候、猶重而從是御禮可申伸候間、不能詳候、

誠惶敬白、

「朱カキ」  
「寛永十年」三月廿六日

薩摩守光久○(花押)御判

進上 中山王

615

「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々在江戸之御馬屋之見廻、二階堂源左衛門尉被仕  
候、久々相煩御用ニ不立候間、爲此替海老原甚兵衛

尉可被指上せ由、去年申下候、于今不罷上候、無心元候、早くと可被差上せ候、以上、急度令啓候、

一 高崎伊豆守殿・伊東二右衛門尉殿、今月廿四日爰元へ參着候而、御檢地之様子具ニ被申上候事、

一 最前從此方檢地頭之衆殊之外被入御念、先年之檢地ニ惡敷被仕候衆なと被相除、其御書立◎關字上覽候而被仰遣候処、歴々衆檢地ニ不被罷出、此方より被仰下衆ニ相替たる衆共、被指遣候由、相聞得候、何としたる儀ニ而候哉、千万無心元存候、伊豆守殿・二右衛門尉殿其元へ被罷下候而、此方より御書立之衆被召置、別之衆を御指替候ハ、後日◎關字御意如何候ハ、んとの由被申候而、次第ニ少くと最前之御書立之衆爲被罷出由候、其元にて被仰付候衆、何れ茂若輩之衆ニ而候つる由、相聞得候間、檢地も定テ大形ニ可有之候、今度之御檢地ハ殊之外御念入候而、黃門様御肝煎不大形候、其元より度々御申候つるハ、御檢地一段能揃申之由候て、御満足

がりにて候處、若檢地衆無案内にて惡敷所も候ハ、被聞召付、移曲事之旨、可被仰付候条、内々にて被成御穿鑿、無心元と申所候ハ、最前竿被打候衆ニ慥成衆を被相加、再檢被成候而、後日惡敷沙汰無之様ニ被念入置尤候事、

一 知行之出候所、引入候処ニ能くと可有御沙汰候、餘過分ニ出候ても、其所之爲ニ成間敷候、又引入過候ても、早竟御國之爲ニ不罷成事ニ候、本高之帳ニ被引合、此中之領主くニ其年々之納之沙汰御尋候而、肝要ニ候事、

一 先書ニも申候かと存候、前々と相替殊之外細ニ物を聞召候而、諸事被仰出候間、御檢地之様子なども事細ニ可被聞召候条、其元大形之躰ニ而候ハ、各へ治定稠可被仰出と存候間、左様成通爲可申入、此飛脚態申付候、御檢地惣奉行衆と被成御談合、御檢地過候て後之御沙汰可被入御念候事、  
一 被成 御歸國候ハ、追付御配當可被仰付候間、可

被成配當様子、御歸國以前ニ於此方可致談合由、被仰出候条、各被罷出、此五日談合共御座候於様子者、御歸國之時分可被仰出候、猶期後首之時候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔寛永十年〕三月廿七日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌〔判〕

下野守

久元〔判〕  
◎〔花押〕

川上左近將監様

喜入攝津守様

人と御中

616

『飯野白鳥權現棟札』

奉再興白鳥六所大權現宝殿一字云々、  
大施主藤原朝臣家久大願主右同、

寛永十年 癸酉 三月吉日

當座主權大僧都法印光盛  
惣奉行伊集院遠江守久族

617

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

同 黒木播厂守  
木屋奉行福崎助兵衛尉  
惣大工山上小左衛門尉  
鍛冶岩下但馬介

返々上方にて替事候ハ、可申候、ちとむつかしき  
共候するかと存候く、已上、火中々、

又々申候、替儀なく候、爰元しつかなる事候、

一其方はいたう色ととりきた申候、其心得尤候、

一ケ條之事、とかく後々の分別はかりかたく候、此度

めつらしき秘説共けいこ申候、これハおもしろき事に

て候間、下向之時分相談可申候事、

一氣色も一段よく御座候由候、承候事、

一今度御上洛候ハ、いかさま御しをき共候するかと申

候間、無心元事にて候、國かへ共御さ候するやおも

ひ候事、

一貴所事付此方より申候事を、其方にていろくいひかすめふりにて、兩人より書狀にて申こされ候、むつかしくおもひ、如此被申候哉、すいりやう申候、これよりと申候事を、兩人としていひかへられ候返事、さてくと、かざる事にて候、近日御いとま出候する間、

上かたより可申候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十年〕 卯月四日

〔家久〕  
〔花押〕

彈正大 弼殿

家久

618

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

やかてちうしん申候へく候、おふくろ・いもし◎くも

こゝろへ申度候く、かしく、

たん正とのしあハせよく、さうくひこより歸り候て、

めて度候、我く御いとまの事もきこえ不申、めいわく

にて候、いかさま此せつく過候ハ、いて候するかと申事候、こゝ元かハる事御入候ハす候、たうねんもはやなつもくれは、とりかきりある露のいのおしき世中候てやかてくたり申候て、なくさき可申候、しやみせんもこゝ元にてあつらへ申候、くたし可申候、其元火のゆたん〔本マ、〕ゆたん有ましく候く、又く、かしく、

〔朱カキ〕  
〔寛永十年〕 卯月廿一日

より

たん正との

むもし

いゑ久

まいる

〔包紙ニ在リ〕  
たん正との

むもし

いゑ久

まいる

619

〔御文庫拾八番箱廿六卷中〕〔御譜中ニナシ〕

尊書忝拜見仕候、今日 公方様御参内之被成御供、 當

今様 親王様御礼被仰上之由、尤以珍重奉存候、就其御

太刀二振一度ニ御持參可然之由、傳奏之御衆被仰候哉、

一圓不存御事候、定傳奏之御衆も、可爲御無案内与存候、

但於 禁中之御仕合ニ在之儀をハ不存儀候、先々御急用

ニ付、直如伏見被成御通之由候、何様參上仕可申上之旨

可預御取合候、恐々謹言、

卯月廿八日

伊勢兵部少輔殿

友枕齋

如玄〔花押〕

620

「正文在文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

爲音信沈香五斤被贈之、欣悅候、猶酒井備後守・青山伯

耆守可申候、恐々謹言、

「朱力キ」(元和七年カ)  
「寛永十年」五月廿三日

家光〔花押〕

薩摩

宰相殿

621

「家久公御譜中」

寛永十年癸酉六月七日、長崎奉行曾我又左衛門吉祐・今

村傅四郎正文如與家久家老喜入忠續・川上久國書中、勸

導耶蘇宗旨、有九郎兵衛者、已出奔崎陽而在于薩州白波

町、故可捕之遣於崎陽云云矣、

622

「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

態以使札申入候、

一 今程唐船入津之時分候間、御穿鑿候而若伴天連并日本

人乘來候者、先籠舎被仰付、急度可預御左右候事、

一 其地へ着岸之唐船荷物商賣之儀、當所入津之舟系之祢

段相究候以後、長崎祢段之こく可被仰付候、定而從

江戸仰渡可有之候得共、爲御心得申入候事、

一 貴理師且す、めを仕候九郎兵衛と申者、當所方欠落仕、

其元ニ罷在候付而、此地之宿尋罷越、先月白波町与兵

衛と申者ニ預ケ置候由申候間、御穿鑿候而、此者可有

「家久公御譜中」

御渡候、則右与兵衛ニ預置候當所之者進之候事、猶口上申合候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十年

會我又左衛門尉

六月七日

今村傳四郎

◎〔花押〕  
正長〔判〕

喜入攝津守殿

川上左近將監殿

人々御中

喜入攝津守殿

今村傳四郎

川上左近將監殿

會我又左衛門尉

酉六月七日之狀

一唐船ニ伴天連并日本人乗候ハ、籠者候事

一糸之直成長崎ニ相定候以後ニ此方可被成事

一貴理師且すゝめ候九郎兵衛事、白波町与兵衛入口事

同年六月十一日、伊勢貞昌贈書於島津霜臺、其赴日、晴

蓑所領高如書記達 高聽、雖然今如舊領那答院者、島津

久元領之、繇焉爲其代賜東郷、心中如所欲、是先奉内窺

旨達 貴聽、則如願先於東郷賜三千石地、與今所領合可

爲一萬石、而公領亦須相交旨新所命也、委三使可伸言、

就中細囑伊東氏、可聞知云云、後與島津久元同以連名之

書、亦傳此事矣、

624

猶以爲御心得先く申入候、三人之衆より不被聞召内

〇者  
〔ハ〕、御他見被成間敷候、内く爲御心得如此候、以

上、

一書令啓上候、然者去春之比者御使御進上候、御口狀之

趣具承置候ニ付、先年 晴蓑様御知行之高如御書付、内

ニ而致披露候、那答院之儀者、當時野州御給之儀ニ候

間、難御申候条、東郷を御給有度候旨、御内意之通申上、

左様ニ相濟候、就其先御知行之高壹万九百石餘ニ而、

御座候哉、其御書立 上覽候處先今度三千石被成御給、



合壹方〇石ニ而、東郷御領〇文候様ニ而被〇關子仰出候、先以目

出度〇奉存候、御支配之様子近所中途遠方与相分候へ共、

一所衆之儀者、何も一所御持切之所を、近所中途ニ被成、

其餘者菱刈・真崎庄内之間へ可被爲持之由相定候、其段

〔八〕今度御使三人之衆可被申達候間、不詳候、委者伊東

二右衛門尉殿へ申候間、可被聞召達候、恐惶敬白、

〔朱カキ〕「正文十八日トモミエル也」

伊勢兵部少輔

貞昌〔花押〕

六月十一日

霜臺様

参人と御中

「家久公御譜中正文在島津左衛門久道トアリ」

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返くたんもしへもころへ候へく候、三日中人し

て可申候、かしく、

よすかのま、申候、御いとまの事今ほとはいて申ましく候〇候よ、冬のはしめかたにても、御入候するかとの事〔にて

候って其元ゆふの事共おハし候ま、二三人くたし申候、其

おりふしくハしく申候へく候、そもしちきやうの事も十

三ところに御入候、たんくすこしの事をさへかやうに

御入候て、こ、かしこに御入候てハならぬ事にて候、其

外かやうに御入候事候、此たひあらたまり申候間、一と

ころに御座候やうにと申候、たんもしちきやうの事もく

ハしく申候事候、かやうの事も、くたり申候ハ、たん

かう申度候へとも、無其儀候ま、たれより申こし候事

候、やかて二ゑもんにて可申候、又く、かしく、

〔朱カキ〕「寛永十年」六月十一日 より

たん正との

むもし

まいる

いゑ久

「御文庫三番箱五巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

〔家久〕

〔花押〕

定

一惣配當衆不粹鼠負偏頗之旨、少も私かましき儀無之、

「御文庫三番箱五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」  
(家久)  
(花押)

- 向後御國御爲ニ罷成候様可入精由、深々敷誓紙可仕事、
- 一今度配當之儀、此方より申遣候趣、會不可相易候、自然自此方申遣候儀、相直候而可然儀候ハ、以談合早々此方へ於注進申者、被聞召合、如何やうとも可被仰出事、
- 一御支配所御屋形内假ニ被相立、惣配當一所ニ而可仕事、
- 一惣配當衆其手々之仕様、毎日打合致談合、相揃候様ニ可仕事、
- 一朝者日出ニ罷出、晩者日入候而可罷歸事、
- 一朝食・晝食者從公儀可給事、
- 一配當所へ有[ ]而出入堅可爲停止事、
- 右條々堅相守、不可有緩疎、若有違犯之輩者、縱經後年、其聞得於有之者、可處嚴科者也、
- 寛永十年六月十八日

御支配ニ付御定之條々

惣高六拾萬五千石

一高千石より上者、百石ニ付近所廿石ツ、可被賦事、

一高千石より下七拾五石迄者、百石ニ付三拾石ツ、可被

賦事、

一高七拾五石より下三拾石迄者、近所中途ニ半分ツ、可

被賦事、

一高三拾石より下者、惣別近所へ可被賦事、

一御兄弟衆并一所衆之儀者、其所を近所中途ニ被成、其

外者遠方ニ而可爲賦付候間、不可及鬪取事、

一北郷殿・種子嶋殿事者、鹿兒島より之遠方ニ候間、惣

別其所ニ而可被遣之事、

一本々一所衆ニ而有之衆、當時者其所無格護、在鹿兒島

之衆者、惣様並ニ可爲鬪取事、

一鹿兒嶋衆高百石之下三拾石迄者、中途近所へ半分ツ、

三拾石より下者、皆近所へ可被遣事、

一遠方衆者不依高之多少、皆其所へ知行可被遣事、

「押札」  
「鬪取」

一 諸地頭衆之知行、地頭所へ高五拾石ツ、可被賦候、西

東通道之地頭所へハ、高百石ツ、可被相賦事、

一 寺社之知行者、此中之知行可被相付候、但或知行之高  
増或引入候ハ、増之分者被召上、不足所者可被相加  
事、

一 寺地之儀、其所之祈願所・菩提所、其外無余儀寺之儀

者、竿被相迎、よしなき寺ハ役儀可被相懸事、

一 寺領之上地ニ者不可有返地事、

一 三分二被召上候衆、今度四分一並ニ可爲御支配候間、

先年之衆中帳ニ而可有其沙汰事、

一 三分一被給候衆、もはやうりはたし、其人無之衆いか

程も御座候はん間、可被相記事、

一 四分一之衆知行をうり、今ハ三分一衆並〔并〕ニ罷成候衆

に、たし地被遣間敷候、四分一・三分二之上地帳ニ而

可有沙汰事、

一 三分二之上地被返下、高四万四千貳百石餘有之、此返

地御藏入より貳万石、此外者四分一之上地衆より出合、

惣國より可被相調事、

一 三分二之上地衆、もと高ニ而算用被究、返地可被遣時、

斗舛より下者可被引除事、

一 諸外城衆中七拾五石より上者、其所中途遠方之賦たる  
へく候、七拾五石より三拾石迄者其所中途、三拾石よ

り下者惣別其所ニ而可被遣事、

一 或先忠ニ付拜領之御書物、或寺社家より御侘并御約束

之證文之御侘等、不可有汰沙事、

一 藝者衆之知行も、近所中途遠方鬪取之賦、何も可爲同

前事、

一 飯野・加久藤・小林此三ヶ所へ爲御藏入、知行三百石

ツ、可被定置事、

一 境目へ可被召移衆ニハ、當高之内其所へ半分可被遣候、

但真幸・菱刈へ可被召移衆者、其所へ惣別被下度之由

於被申者、望次第たるへく候事、

一 菱刈表へ御藏入五百石可被定置事、

一 當年中御支配相濟候とも、納方者先知行より可被請取候、就其百姓へ無理非道之儀申懸、百姓つふれ候へ、曲事之御沙汰稠可被仰出候、若又領主相替候と存、百姓當取納致無沙汰候へ、從公儀其御沙汰可有之候間、領主よりも當年之所務勝例年申付候へ、是も曲事可被仰付候、ケ様之儀及沙汰候へ、隣名之衆召奇、明鏡之御沙汰はおよひ、領主・百姓之間、非分之族於有之〔者〕<sup>◎</sup>、其科可被仰付事、

一 當知行之竹木伐採ましき事、

一 御支配相濟候而より帳箱之蓋被封置、重而知行沙汰有之間敷候間、知行之入組不被申出様ニ能く配當ニ可被入念事、

一 荒地被買取候衆ニハ、銀子を可被返下由被仰出、若荒地ニ而返地可被下之由於被申者、左様ニ可被仰付哉之事、

一 高ニ付名定之事、

一 此節之御支配ニ、御加増之沙汰、曾以有之間敷候、其

子細者、先年知行三分二被召上候衆へ、今度返地被遣候ニ、高五万石餘入候、御藏入、過分ニ不足ニ罷成候間、御借銀之御返弁可難成候、然時者、却而諸士之氣遣ニ罷成事候間、いかやうの佗言有之人候共、取次被申間敷由被仰出候事、

右條と聊不可有違變候、若緩之儀於有之者、稠其御沙汰可有之候也、仍所被 仰出如件、

寛永十年六月十八日

兵部少輔〔判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

下野守〔判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

628

〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

定 御袖判

一 或先忠ニ付拝領之御書物、或寺社家より御佗并御約束之證文等不可沙汰事、

一 此節之御支配ニ御加増之沙汰、曾以有之間敷候、其子

細者先年三分二被召上候衆へ、今度返地被遣候ニ、高  
五万石餘入候、御藏入過分ニ不足ニ罷成候間、御借銀  
之御返弁可難成候、然時者却而諸士之氣遣ニ被成事候  
間、いかやう之侘言人候共取次被申間敷由、被 仰出  
候事、

右條々聊不可有違変、若緩之儀於有之者、稠其御沙  
汰可有之候也、仍所被 仰出如件、

寛永十年六月十八日

以上

一書申入候、然者先年 晴蓑公御知行那答院之儀、無吳  
儀返可被進之由、從 龍伯様堅被仰出候ニ付、度々雖御  
侘候押移候、今度東郷被進之由被 仰出候、先以目出度  
候、老中衆より可被申達候<sup>間</sup>付、早々御領地尤候、御意  
之趣、委細高崎伊豆守可被申達候条、不能詳候、恐惶謹  
言、

「朱カキ」  
「寛永十年」

六月十八日

伊勢兵部少輔  
貞昌(花押)

下野守

久元(花押)

彈正様

人々御中

「右包紙」  
彈正様

参

久元

下野守

伊勢兵部少輔

「家久公御譜中正文在嶋津左衛門久道トアリ」

「雜抄」

覚

一頃日辻番油断に相見得候、端々にて人をも切候之間、  
辻番之儀念入急度可被申付候、已來者御歩行目付衆毎  
月まハシ、悪所候ハ、可致言上之旨候間、晝夜無油断  
可申付事、

「寛永十也」

酉六月十九日

631 「家久公御譜中」

同年六月二十五日 將軍家光徵東西之侯伯於 營中、

看覽猿樂工之能且賜饗宴、各及沈醉、家久亦關之、是因

近日可賜告也、家久下 營後奉拜謝如恒例矣、

632 「家久公御譜中」

「正文在花舜軒」

返く、やかてくたりの御さう申候へく候く、か  
しく、

筆をそめとりむかい候、此廿五日御のふにて御ふるまい  
くたされ候、ことくしき大さけにて候、御まへちかく  
めしよせられ、大ミたれたる御しゆにて候、いづれも  
くかたしけなかりし事候、かきりなく候、此御のふか  
御いとまのよし申候、おくかたの衆ハ、廿八日かた御い  
とまのよし候、さいこく衆もやかて出候よし候、まつ此  
よし申候するためにて候、たん正とのへも此よし申候へ  
く候、やかてくたりのちうしん申候へく候、又々、かし

く、

「朱カキ」  
「寛永十年」六月廿八日 中納言

たん正との  
むもし  
まいる  
いゑ久

633 「家久公御譜中」

同年七月十日、崎陽奉行神尾内記元勝、榊原飛彈守當家  
久家老贈一簡曰、福州之商船一艘出台灣、六月朔日來著  
崎、五月二十六日、此船明人兩人卸置薩阿久根、此事及  
推問、則船主白之旨、彼兩人早可遣之、且去年曾我吉祐・  
今村正文所預置明人五人、其同類亦十人有在于薩之聞、  
都合十五人是亦可遣云云矣、

634 「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度申入候、仍大明國之内福州之船老艘、是者多加佐  
古之内たいわんより參由候て、六月朔日ニ至長崎入津

仕候、然者此船方、五月廿六日ニ薩國阿久根へ唐人  
式人上ケ申由承、爰元ニ而穿鑿仕候へ者、右之船主有  
之儘ニ申出候間、於其元御穿鑿候て、早と此方へ御越  
可有候、其外も被入御念穿鑿尤候、

一去年曾我又左衛門・今村傳四郎所方其地へ人を添預ケ  
被申候、唐人五人右之同類其元ニ拾人御座候由、都合  
拾五人爰許江可被下候、相尋申儀御座候間、如此候、  
一吳國船商賣之儀、長崎之ね段立候てより可被仰付候、  
一伴天連之儀、從 公儀之御法度弥堅被 仰出候間、御  
領分嶋々迄御穿鑿被成、伴天連乘渡り申候ハ、御捕  
御注進尤存候、右兩条於京都 上意之趣、大隅守殿へ  
直ニ申入候、爲御心得如此候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年」  
七月十日

神尾内記 「判ナシ」  
元勝  
榊原飛彈守

松平大隅殿  
老中

635 「家久公御譜中」

同年同月十二日、家久書花押證書授島津又五郎久近母堂、  
義弘之末女  
也、稱御下、是先年母堂質于江都、爲其賞所賜之高三千石、  
萬雜公事免除之證文如左、

636 先年、ゑとへしちとして數年とうりう候、まことに女子

のうへにて、遠國へかやうのたぐい、前代なき事にて候  
ゆへ、ほうひとして知行三千石參らせをき候、彼知行之  
事ハ、他にかハリたる事にて候ま、一代之事ハ諸やく  
きゆるし申候、爲其如此候、かしく

寛永十年七月十二日 いゑ久(花押)  
又五郎殿

「家久公御譜中、正文在島津勘解由久當トアリ」

ふくろ

637 「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書令啓候、然者來年御城之御殿皆々新敷被成御立候ニ付、從諸大名思々之御進物共御座候、御年寄衆よりハ、御國へ可有之物を何ニても御進上候へ、態御求候てハ御無用之由、被仰出候へ共、四國などの御衆ハ材木を御進上候、其外者御國へ御用ニ立物無之候故、何ニても御もとめ候て御進上候、御國へも鉄者可有之候得共、是も俄ニ可難調候由皆々被申候間、唐紙二万枚・漆二百貫目可有御進上由、目錄ニて被仰上候、唐紙御座候ハ、いかにもよく候ハんを、貳万枚御調候て、早々大坂迄可有御上せ候、唐紙者御藏下々へも無之候ハ、二万枚之内いかけ程ニても有次第、大坂へ御上せ候て、何程上方ニて被買續、早々江戸へ可被指下之由、可被仰上せ候、此方よりも其段兩奉行衆へ可申達候、漆者爰元にて買申候、將又上使之御衆へ御狀被進候、早々可有御渡候、今度小出對州内衆、此方へ被參候、案内者仕候而參候、道具衆ニ而之御狀ニ、山川へ十三日程御逗留候へ共、順風無之ニ付、先々國中御廻候由御注進候旨、具申上候、其段對馬守殿

留守居へ御内談候而、從 黃門様御年寄衆へ被仰入候、左様之儀以御狀三人へ被仰達候、定此比方々可爲御廻候、諸所ニて御機嫌之様子、又種子へ御渡海之様子、無御由断可被仰上候、其元御氣遣之様子、日夜自是存事候、猶期後音候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔寛永十年〕  
七月廿日  
伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌(判)

川上左近將監様

喜入攝州様

人々御中

638

「家久公御譜中」  
「正文在琉球國國司」

覚

一今度從上方御借銀百貫目下候、跡より式百貫目余可被指下由候、彼是取合、秋中ニ四百貫目程可相下と、肝煎申候事、  
一江川久右衛門尉、御買物爲談合指下申候、千太夫・弥



右衛門尉など、細々吟味御させ候て、御爲能候する

唐物買取、急度可被召上事、

一當年上り候系ハ、余掛へり無之候、才符官舎へも其段可被仰聞事、

一去年上り候系者、以之外かけへり御座候、就中秋定之系然とも無之候つる由御取衆被申候、自今已後左様ニ無之様ニ堅可被仰渡事、

一糸之内ニなまり入たるかな御座候を、京ニて糸買候衆見出候而、琉球口之系之中ニ者、なまり過分ニ入候、

色々手くらふ有之由、事々敷申ふらし、直成をさけ可申と仕候故、右近殿・城介殿迷惑させられ候由被申下候、曾左様ニ無之様ニ、糸買衆へ稠可被仰渡事、

一唐ニての日用賃・買物、口銭などの銀遣、糸之直成ニ不相混、別紙ニ可拂出由、堅可被仰付事、

一冠船之買物并唐にての買物、高直ニ無之様ニ可被仰渡候、其儀ハ從江戸も稠可被仰下候、題目上方糸之賣口下直ニ候由聞得候間、隨分直成之儀可入談合候事、

一今度從上方運上銀指下候衆へハ、手傳人下之儀可有御

免由、自江戸被仰下候故、急度京衆手傳可下由申候、

其元ニ而ぬけ買など不仕、其外何ぞ御買物之さわりに不罷成様ニと、堅可申渡候、乍去ケ様之衆者無心元候間、其地ニ而も右之理幾度も可被仰渡事、

一柳屋市左衛門尉此地へ參候而琉球へ御下候へと被申候、自身下向ハ可爲無用由申候、乍去運上銀四百貫目

可持下由申候、此運上も四十貫目程ニ而、一廉御爲ニて候条、可被召下哉共出合候、相依次第可申越事、

一平田盛右衛門尉殿・荒武覺右衛門尉殿庄物之儀(本マ)ニ存、御借銀返弁可被肝煎由、從江戸被仰付候間、糸其外唐物之送狀彼衆ニ可被遣候、米并嶋のものハ如前々、琉球奉行へ送狀可被遣事、

一諸士・町衆・他國衆などの買物、別紙送狀書分可被召

上候、是も平盛右衛門尉殿・荒覺右衛門尉殿送狀可被遣候、勿論御物之送狀ニ相混間敷事、  
一唐ニ而御買物仕候衆之内、律儀成仕方も可有之候、左

様之衆ハ被聞召通、從此方も王位よりも御手を被付、

御申立候而可被召仕候、仕方悪衆ハ及御沙汰、身上も

夫程ニ可被召仕事、付於犯科人者、勿論可應其様子事、

一冠船積荷之内ニ、禁中并 公方様御進上物ニ可成物共

參候ハ、脇ニ不散様ニ入念可被爲買取候、自然脇ニ

散候ハ、各不念ニ可罷成候事、付珍敷唐紙なども參

候ハ、可被爲買取事、

一琉球諸嶋繪圖并道のり高付之事、付鷹之巢見立可被申

上事、

一冠船ニ數寄道具ニ可成物參候ハ、平嶋久右衛門尉目

聞ニて、御物ニ可被爲買取候事、

一當年之出銀前ニ如定置候、高巻石ニ付五分充たるへき

事、

一毎年唐へ糸買ニ參船、自今以後者當國へ直ニ可乗届由、

新納加賀守・最上土佐守を以申越候、弥如其可有首尾

事、但式艘之内一艘、

以上

寛永十年 癸酉 八月十日

左近將監

攝津守判 〇(花押)

下野守判 〇(花押)

三司官

町田勘解由次官殿

川上又左衛門尉殿

參

639

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

矢野かせ者のこりなくかの宗にて候、書重有事此方

にてせんなく可申候事、

二右衛門尉參候哉、書面之とをり承候、

一なんはん宗之事、此度申出候、大持之たての半會・同

新八郎内いつこほとにかやうニ候哉、さんく無心元

候、人にこそよれたての事、又三郎おはの事にて候、

誰か御入候する、申ても申つくしかたく候、乍去御家

國之爲、ことに江戸之御法度候、申のかれさる事にて候間、きひしく申いたし候事候、十左衛門尉口から聞せられ候へく候、めいわくかきりなく候事、

一東肥事、たひく申候つる、二右衛門<sup>○尉</sup>にて申候、肥前

へも被尋候哉、定而存分共可申承候様、當世ハ誰もくかたきあしく候、東肥事ハ、さりとてハ左様有間敷とハおもひ候、さりながら、たしかにふしんなる事共御入候ときハ、如何心中難計候、せいし共可申候、き、と、け候てこそ、何之みちにも可申候事、

一念比之ふり無心元候、人之ふしんかり候も、のかれさる事にて候、これハをくねにて候、あまりあく心ハ有ましく候事、

一なんはんはやり候事、いつそ實所物語候つる覚え申候、其外一人も申いてたる人無之事共にて候、兵部なども少もかやうに可有之候事とハ不知と申候事候、今分にてハ中く法度之儀なるましく候間、せめてなりならず申出候すると申候事候、半會あまりくゆたん申事

なく候、天下に二人とハ有ましく候、貴所あいたの事にて候、せうしなる事候、此上にてハ役人など、ハいはれ間敷事候、世上に見をうしなひ候事候、おくかたの女はう衆などなさせられ候哉、無心元候間、此たひ申越候事候、日記にハ御座なく候、き、合候て尤候、とかく又やかて可申候、一向宗之儀もこれより可申候、これも實所物語今にしゆひ申候事候、彼吉利など下野守か、へられ候事、さたのかきりにて候、かやうに御座候故、ものことにかるくしく候、法度ならぬ事にて候、

一今度承候くじの事、此方之衆申候とをり、一とに申下候、たくミ事もさた申候て、きひしく申下候、いつれも其元より申こされ候儀、少もきこえさるよし、いつれもく申候事候、なにとてかやうに被申候哉、無心元事候、此方より申候條書之旨、くハしく聞かれ候て尤候事候、

一御いとまの事、此せつく前後に聞え可申候間、やかて

自是可申候、こひの時分思やる事候く、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十年〕八月廿四日  
〔家久〕  
〔花押〕

芝より

たん正との  
まいる

家久

640

〔家久公御譜中〕

同年八月二十六日、家久復中山王書曰、使國頭渡于薩府  
遙當年之壽捧方物、且告冠船、足下之怡悦察焉、殊有大  
船聞、是須達要用、明球順熟最所覩也、吾今在于江都、  
未賜告、不知何日歸國乎、故先使國頭歸帆云云、委備書  
矣、

641

〔正文在琉球國司〕

爲當年之御祝詞國頭渡楫之由、於江戸令承知候、從春以  
來雖歸國之催候、御暇之儀未被 仰出無何共躰候間、國

頭之儀先と歸帆可然之旨申遣候、到遠境早と御使、殊種

と御進物贈給、御慰勲之至祝着申候、將又自唐之使船來  
着之由御注進候、御満足察入候、一段大船之由、其間得  
候間、用之儀共申付差渡候、定可相達候、唐与弥順熟候  
様可被仰談儀、此時ニ候、少人之衆、樂稽古候様被 仰  
付尤候、猶期後喜候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十年〕

八月廿六日

中納言  
家久

中山王

貴酬

642

〔家久公御譜中〕

自今年寛永十年癸酉八月二十日、廻國之 上使欲渡屋久  
・種子兩島、維乘船於山川灣多日矣、

643

〔御文庫拾八番箱廿六卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

覚

一上使屋久嶋・種子嶋御渡海順風無之候て、去月廿日よ

り于今山川へ御滞留候事、

右被 聞召達候事、

一 硫黄之嶋被成御覽事不罷成事、

右被 聞召達候事、

一 下野守罷下刻、御条書之通具ニ承達候、御返事別紙を

以申上候事、

右別紙之趣被 聞召達候事、

一 御檢地不相揃ニ付再檢被仰付候、今月中ニ可致首尾由

候、高不相究候へ者、御支配不罷成事、

右御配當之儀、再檢遲相濟候而、來年三月時分過御配當ニ被仕懸候

ハ、七月時分鬮取可有之候、御意候とて、向後御國之爲ニ不成儀

共へ者不可然候間、能々可被入念由 御意候事、

○ 一又八郎殿可有御座一所定之事、

右加治木ニ相究候事、

○ 一又八郎殿へ被相付小給人知之知行、從公儀出可申候哉、

又八郎殿御自分之御知行より出可申哉之事、

右又八郎殿御知行より出可申候事、

○ 一 松齡様致御供候人數へ御心付可有之由、前廉被 仰

下候、今度可致首尾哉之事并人數之日記其許へ可有

之候間、可被御覽合事、

右本高を以今度可有御支配由被<sup>○(關字)</sup>仰出候事、  
△<sup>○(印)</sup>

一 五代勝左衛門尉殿へ被 仰渡儀并子息仲兵衛尉殿地

頭職之儀、少左衛門尉殿屋久より歸帆次第可申渡事、  
△

右加治木へ可被召置儀被差置候事、

○ 一 此中海邊かちに知行格護之衆、御沙汰之事、

右海邊之返地可被遺候、最前之所ニ被引合似合之在所可被賦候事、

一 又八郎殿・式部太輔殿、八朔之御太刀御進上之時、御

馬相副候を、御庭にて御兩所御馬一時ニ相渡ニ付、

入組之事、

右如先例 惟新様と典厩など、御太刀、馬之如爲參可有御沙汰由

候事、

一 諸人申達ニ付、或寺領或遠嶋被仰付後被召直候てよ

り、知行三部一・三部二被給候衆共御座候、其衆此

節本地可給由被申出候事、

右或被致寺領、知行屋敷等迄被召上候而被召置、又知行之本高被返下候衆、或其科依重罪、知行被召上、遠嶋被仰付候衆、被召直候而、知行本高之内三部二、三部一○共被遣置たる衆、右寺領爲被仕衆ニ者可相替由 御意候間、先今度、○通以此趣可有御支配候、けに○可可有御沙汰、子細於有之者、御配當候て之可爲御沙汰事、

一兼城之事但去年之四月罷上候、

右御國へしかと可被召置由候事、

一當所へ有之求广假屋之事、

右可有御談合由候事、

一村田九郎右衛門尉殿移佐へ移、加増沙汰之事、

○一伊地知四郎兵衛尉殿申分之事、

右今百石知行被遣、合貳百石之移加増たるへき事、

一八月廿一日、吉田にて喧嘩仕出候者、衆中永岩長介・

せいらい源太郎・彼兄太郎介、右三人者相果候、又

市來半右殿倅者一人、是者手負但長介しうとにて候、

右其元にて可有御沙汰事、

一武三右衛門尉殿下女を前○(甲)と男差ころし申候、いまた

穿鑿不究事、

右被 聞召置候事、

一伊作衆中鎌田權兵衛尉と申人、當所へ被召移度由、

彈正大弼殿より御申之事、

右鹿兒嶋へ被召移候やうにと被 仰出候事、

一材木師宮本傳左衛門尉、香具屋之清左衛門尉姪子一

昨日罷下候事、

右被 聞召置候事、

一唐船奉行之事、付運上無之事、

右被 聞召置候事、

一從去春此かた、當所にて喧嘩仕出候衆、前廉以日記

申上候、一途之御返事承度候、如此之儀不事濟候へ

者、諸御法度も難成見及申候事、

右巨細其元にて被致沙汰、追而其様子可被仰上由候事、

○一建昌・帖佐十日町・松原、右三ヶ所、前と帖佐之内

にて候、于今者加治木へ相付候、此度何方へ可相付

哉之由、豊後守殿より御申候事、

右建昌・帖佐十日町・松原、此三ヶ所者如前と帖佐へ可相付候事、

一江戸へ自長崎罷越、破帆之沙汰申唐人、此方へ御下

シ候、口柄承候事、

右追而此方より可被仰遣候事、

一大口と求广山境之事、

右相良殿へ被仰返事之様子、追而可被仰候事、

○一鹿屋・下大隅・新城之事、

右何も一所衆並之可爲御賦事、

一祁答院大村地頭之事、

右地頭者數根殿へ可被仰渡候事、

一本田藏人殿へ返地被下沙汰之事、

右算用次第たるへく候事、

○一又八郎殿御内衆知行方高之事、

右前廉如相濟候、此中之知行其まゝにて、又八郎殿へ被成御付

候事、

○一同御臺所納屋付所之事并御内衆可被召置所割之事、

右納屋者加治木、小濱たるへく候、御内衆之儀者、當時之屋敷之

まゝにて、可被召置候事、

○一御差付之外諸神領、此中格護所鬪取ニ罷成候へ者、

可致相違事、

右何も鬪取ニ難成所者、差付之可爲御賦候、猶於其元可有御談合

候事、

○一諸地頭所へ御給之知行、其所之衆中と鬪取之掛合難

成事、

右不可及鬪取候事、

○一一所持之内津浦相違之所者、返地可被遣事、

右如前と御賦可有之候事、

一先年荒地買取候衆申分之事、

右追而可被仰遣候事、

一當年之出物如例年之壹匁五分、小身之衆者五分、并

千石より上之衆者爲示段銀五里充申渡候事、

右被聞召置候事、

一琉球之出銀者官船來着之年者、可爲五分由申渡候事、

右被聞召置候事、

寛永十年九月三日

仁禮藏人殿を以得御意候条書

喜入攝津守判花押

下野守判花押

644 其地江早く御參着之由、相聞得、目出度存事候、御懷様

江茂此由御傳頼存候、然者野州老御下着候而、其元之様  
子委敷承、満足仕候、次者阿多内膳正殿儀拙者与力にて

候、御侘申上候、野州老者此方江御下ニ而不被聞召候

間、於爰元申達候へハ、兵少老江御狀今度被進、我等申

分之通被仰付、伊兵少老へ態く被成申達、相調候様ニ頼

存候、今度仁藏人殿へも、其元御出合頼入候由申達候、

彼是被聞召合尤候、兼又御孫殿出來候、殊男子ニ而御座

候事、御満足推量申候、猶期後音之時候、恐く謹言、

寛永十癸酉

九月四日

喜入攝津守

忠政花押

鎌田出雲守殿

参御宿所

645 「家久公御譜中」

同年九月中旬、家久俄頃身心酷惱亂、而月末雖戰栗、漸  
止體氣大疲倦矣、

同年九月十九日、就矢野主膳之家臣等南蠻宗、且赤石掃

部助之男赤石小三郎之事、伊勢貞昌奉家久之命、竊贈書於

在國之家老島津久元・喜入忠續・川上久國、采見于書中矣、

646 「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以彼者とらへさせられ候ハ、又左衛門可致氣遣

候間、分別尤候、雖不及申候小三郎打果共候ハ、

御家之ためあしかるべく候間、よくく可被入御念

候、右ニ如申候、少も人の出入候はぬ所へをしこめ

て被召置、はしめをハリ御問付候て、早く可被仰上

候、何たる故かと世上可存候間、右ニ如申候、南蛮

ひろめ候者にて候由、被聞召通候て、如此候、ひそ

かに宗躰之衆を御尋にて候由、世上ニハ申渡候やう

ニ可被成、可然候由御意にて候、此狀夜中ニ老眼に



て書申候、無正躰候ま、よめかね可申候、くれく  
主膳事右之趣ニ候間、人のはなし候はぬやうに可被  
成候、少も御父子身上、當時ニ相易事無之候ハ、  
吳儀有之ましく候、以上、

急度令啓達候、然者矢野主膳事内之者共、皆く南蛮宗ニ  
て候つる処、多年不致披露召置候、於其元彼宗御あらた  
め出候付、檢者を申請宗を替さえ候よし被申候、曲事ニ  
思召候、從其元參候日記ニ、主膳父子之儀ハ相はつれ、  
内之者皆南蛮宗へ名を書載候、主膳事ハ日記ニ無之上ハ、  
先年從長崎歸參候時、彼宗ころひ申候由申候、無相違か  
と思召候間、少も別儀無之候、然共内之者共皆彼宗ニ  
候を、終不申出多年罷居、御國之御法度天下之御法度き  
ひしく候を乍存、をしつけ有在候儀不然候、かやうの儀  
を無御沙汰候へハ、諸人之寛ニ罷成候間、先く致歸國  
寺家など仕候而、可然候はんとの御事にて、其段被仰出  
候而、近日此方被罷立候、然者主膳此比我等迄内意ニ被  
申候者、御國へ赤石掃部「本マ、」(掃部頭守意)助子罷居候由承候、これハ大坂

にてはせ廻候て、殊外其時分御沙汰候つる人にて候間、  
御國之御爲いか、候はん哉と被申候間、不思議成事と存、  
それよりとりつめて問ニ付、いかにもおんミつにて被申  
候、町ニ罷居候しゆあん又左衛門尉所へ筆者仕候而罷居  
候小三郎、と申者にて候よしニ御座候、彼者ハ我等先年  
罷上候時分、物之本共か、せ申候、はや書にて候間頼申  
候つる、年比も一段わか候つる間、めしつれ候てこ、  
もとへ可參候、致奉公候へかしと色く申候つれ共、奉公  
ハ難成よし申候故、不及是非と申候つる、其者之由候、  
これハ其元にて其かくれ有ましく候間、早く御とらへさ  
せ候て、人のより付候ハぬ様、よく番を被付置尤候、先  
くあかし掃部子にて候よしハ、少も人の不存様ニ可被成  
候、御とらへさせ候時ハ、南蛮宗をひろめ候者にて候由、  
被聞召及候との御沙汰可然候、左様候て御使衆などの内、  
よくくせいしなど御させ候て、掃部子にて候由相知候  
間、少も不隱申候やうにと被仰聞、さ候て從大坂いつか  
たへ參、又御國へ參候様子共、此中御國へ罷居候つる儀

細く御問付候て、早と此方へ可被成御申候、主膳被申候ハ、有馬より御國へハ参たる由承及候与被申候、主膳ハ長崎にて委承たる様子ニ候へ共、いまたうち出候て申かねられ候、他より公儀へ被聞召付候ハ、御申分いか、可成行候哉、一大事之御事候間、先掃部助子と可有之事をよく御つ、しみ尤候、とかく畢竟ハ可有言上候間、其内世上ニむさと申ちらし候ハぬ様ニ可被成候、今度谷山孫右衛門尉殿被参候而被申候、式部殿御側ニわかき男罷居候て、御ぐしなと結申候、いつかたより参たる人にて候哉、たて野の御引付にて御座候よし被申候、何たる人にて候哉、左様不知人を御やかたの奥などへ被召仕候儀、さりとてハ不聞儀候、左様之者被召仕ましき由、先日大かたニ被仰遣候、もしく左様ニも成立候ハぬ哉、さり共それほとハ立野御ほれ候ハしと存事候、しゆあん又左衛門もたて野の御内者ニて候よし取沙汰候、又彼人も又左衛門か、へ置申候間、不審ニ候との御事候、此方ニても、有川平右衛門尉へ、ふかくときんちやうさせ、

主膳への使仕候外、我等よりほか 黄門様聞召上候、誰へも御しらせなく候ま、左様御心得尤候、就其被成御意候、此状を三人見被申候ハ、則其座より人を遣繩をかけさせられ候へ、もしくほとこのひ候てはしり候ハ、三人、其科可被 仰懸候由、堅 御意候間、構と大形ニ被成候ハ、各御爲可悪候、よくく其御心得候へく候、又主膳儀今度先と罷下、致寺領候やうにと候ニ付、氣遣ニ被存候哉、自然身上いかやうにも被仰付儀候ハ、有様ニきかせ候へ、自長崎歸参仕候時分も、從 惟新様兵部少を頼申候而、身上落着候儀尤候而被仰聞候つる間、今以いかやうに成行候共、我等へまかせ候由被申候間、今度南蛮宗之書立ニも内之者共之名皆く有之時ハ、主膳も宗躰にて候ハ、同前ニ書入へく候処、無其儀候間、其段氣遣有之ましく候、如何様重而被仰出様可有御座候条、先逼塞候て可被罷居候、我等へ被任候やうにと念比ニ申候、身上之氣遣可有之候ま、若走候事もあるへきかと存、右之様子いかにも委申候、自然先ニ人など遣候

て子共よひいたし、直ニいつかたへも可被參事も可有之候間、用心之ためニ候条、近所之衆へ隱密にて細々心付候て被見候様ニと可被仰付候、親其元へ被罷着候ハ、別儀あるましく候、其内之儀可被入御念候、重而若主膳ももとのことく、南蛮宗にて于今も候よし、相究候ハ、其上ニてハ如御法度可被仰付候、又今度之書立のことく、内之者計彼宗にて、主膳ハ重而も其沙汰無之候ハ、尤父子身上之儀ハ別儀有之ましく候、内之者共之儀、終被致披露候ハぬ一筋之御噺にてこそ可有御座候、然処人のそ、なかしなどにて走共候へハ、御外聞あしく候ま、左様候ハぬやう御心得候へく候、寺なども何方を頼可申かと、又子共事ハ閉門にてしかと屋敷へ可召置候哉、と被申候間、尤左様被仕候へと申候、於其儀ハ我等狀を付候へと被申候間、心得候由申渡候、内々其御心得肝要候、猶追々可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年」

九月十九日

伊勢兵部少輔◎(花押)

貞昌「判」

川左將様  
喜攝州様

野州様

人々御中

647

「家久公御譜中」

同年同月二十四日、大樹家光公御不例、從十六日至今日無快然、繇旆在府之侯伯日兩度登城、雖奉窺御氣色、<sup>○家久</sup>以在于病牀、故光久代日日奉候之矣、

648

「正文在小濱澤右衛門」

あきとのよりひきやくのほり候ま、一筆申まいらせ候、やかて御下かうのよしうけ給候、めてたくそんしまいらせ候、此ハきの御さうまちあけまいらせ候、さきにハまつくめてたく候、

しんさうふり申候、此三かきあいあしく御さ候、さりなからいろく御きねんそ□御入ま、よくこ□との申事ニて候、きこしめし御ねんつかいニて候へ

と、そんなしあけまいらせ候、おきくもきけんよく御  
さ候、又とやかて申候へく候、めてたくかしく、

〔朱カキ〕  
寛永十年九月

しん上

中なこんさま

きく

649

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

到遠路被差越使者、殊太刀一腰・馬代銀子拾枚、慇懃之  
至令祝着候、仍去月中旬俄ニ相煩疱病ニ成候而、及難儀  
候、雖然五日以前振氣落候故、逐日可致本復候、多日之  
草臥候間、于今平臥之躰、可有推量候、將又 公方様去  
十五日方御不例之由候条、心遣ニ存候處、早速被成御平  
復頃表へ 御成候而、各御目見得故、目出度儀共候、我  
等茂氣力付候者、可致登 城候間、其節者御暇茂出可申  
候はん哉与存候、長々之留守之儀候条、其元之様子諸事  
被入御念肝要候、猶期後音入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十年 十月五日  
家久 ○〔御九印〕

彈正大弼殿

〔在包紙〕  
彈正大弼殿

家久

650

〔光久公御譜中〕

爲那答院之返地東郷被給、殊加増三千石、從 中納言様  
被遣ニ付、到此方使被差越、太刀一腰・馬一疋令喜悅候、  
猶委細者從伊勢兵部少輔可相達候、謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十年 十月五日

光久 ○〔花押〕  
〔御判〕

彈正大弼殿

651

〔家久公御譜中〕

同年十月八日、堀田正成・阿部忠秋・松平信綱・酒井忠  
勝・土井利勝連署之奉書到來、是因昨日 家光公狩于板  
橋、而所獲之鹿一頭賜家久也矣、

「古御文書世卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

昨日板橋江被爲成御狩之鹿一頭、被遣上候間、持進候、

恐と謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年」

十月八日

堀田加賀守◎(花押)  
正成判

阿部豊後守◎(花押)  
忠秋判

松平伊豆守◎(花押)  
信綱判

酒井讚岐守◎(花押)  
忠勝判

土井大炊頭◎(花押)  
利勝判

薩摩

中納言殿

人々御中

▽  
◎

薩摩  
中納言殿

人々御中

土井大炊頭

酒井讚岐守

△

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門尉久道」

返くやかて人して可申候く、かしく、

「本マ、」

あきの守とのより、よすかのま、とりむかい候、其後ハ其元のたうらいも御入候ハす候、此方一しほしつかに御入候事候、下向の時分もやかてたるへく候、はやたうねんもほとなく候、さためてしろへもおりく見まいたるへく候、又たんもしへもこゝろへ申度候、おふくろへも同前申度候、よろつ又とかしく、

「朱カキ」  
「寛永十年」十月十四日

中納言

たん正との

むもし

まいる

いゑ久

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返くたんもしへもよくく申度候、かハる事候ハ、やかて可申候く、かしく、

おこりこゝちいてあひ候とて、わさとさうく人<sub>レ</sub>を御の  
ほせ、まんそく申候、はさらきねんりうくわんさやうの  
しるしにて、はやくをち申候て、まんそく申候、さて  
うへさま御きしよくあしく、此十六日より御わつらいに  
て候、けふまでもしかくと御さ候ハす候、日に二とつ  
ゝとうしやうにて、御見まい御入候事候、我等ハしか  
くなく候まゝ、さつせうさし出候事候、なにともく  
しうしかり申はかりにて、御いとまの事ハさてをき、と  
しをこし可申ゆふい申候事候、まつ此人くたし申候、又  
と申まいらせ候、かしく、

十月廿四日

右

たん正との  
むもし

まいる

いゑ久

「在右包紙」

返くたん正とのせんとひこへ使に御入候つる、一

たんしあハせよく御さ候よし、ひやうふにいたり越

中守との被仰候、一しほふうひにて候間、いよく

御たしなミ尤候よし申候へく候、かしく、

たん正との  
むもし

まいる

いゑ久

655

「正文在川上八郎左衛門」

此ほとのはつらいに、くわなより日く<sub>レ</sub>の御□いまハ  
小大夫しかとめしをかれ候て、ふうくう申され候事候、  
やかて此方へ御いて候へと可申かくこにて候、ことの外  
御ねん<sub>□</sub>のまハリたる事

「朱カキ」  
「寛永十年」十月廿四日

右

いもし

まいる

いゑ久

656

「新納氏家藏」

尚以五代少左衛門尉加久藤移、諏訪仲左衛門尉小林

移被仰付候へ共、かやうの衆者、世間ニ不知人ニテ

候間、不苦候、貴老御事者拙齋孫ニテ候故、右之御

遠慮候、將又貴老儀ニ付、其元御老中衆江被遣候書

狀之案文、如此候、

一書令啓候、然者貴殿御事、今度大口江被成御移、御加増をも可有御給之由候つれ共、高岡江仁藏人殿御移被成候て、又大口江貴老御移候へ者、堺目江俄歴<sup>「頼原」</sup>と御移候なと、公儀江響御沙汰も如何ニ候間、先今度者被差延候、來年方にて候はん欵、世上之様御覽被合候て、可被仰出との御談合にて候、就其大口江知行七八百石程被殘置候様ニと、野州<sup>「島津久元」喜入忠政</sup>攝州江被仰遣候、内々可有其御心得候、大口江餘無人ニ而候間、爲噯衆有川助兵衛尉・勝目助左衛門尉殿者、兩人共ニ百四拾石ツ、當高有之儀候、今六十石ツ、被成加増、馬一騎乘候様ニと候て、大口江被召移候、定貴老へも御老中より可有御承候間、右兩人へ茂能く御熟談尤候、此外、從鹿兒嶋小給人衆十五人欵廿人欵程、可被召移由被仰遣候間、於其元野州老などへ御内談候て、可被仰渡候、何も少ツ、御加増可有之候、將又求广与大口との山堺之儀ニ付、肥後仲右衛門方<sup>「盛良」</sup>にて被仰上候様子、委被聞召達候、於比方相良殿江被仰理、彼返

事之依様子、御分別可被成由候、此方々如何様と不被仰遣内ニ、求广与きれ替候様成沙汰、大口より少も其色立候ハぬ様ニ、可被仰付候、下々者、少く儀ニ大わさハい仕出候物にて候、子細有之事共候間、書中ニ者不得申候、仁藏人殿口上ニ可相達候、尚期後音候、恐惶謹言、

「寛永十年十月廿四日」  
伊勢兵部少輔<sup>「時在江戸」</sup>（花押）  
貞昌<sup>「新納」</sup>判<sup>「文書」</sup>

新納加賀守様

人々御中

657 「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御支配ニ付、御妹様御知行之儀、於此元相定候つる者、委野州老如御存、御姫様達御知行同前ニ可有之由御座候、然処從、御妹様今度御申被成候者、此知行之儀向後者又五郎殿御軍役可被成候条、餘之奥方之御知行ニ者可相替候、是非共諸人并ニ御鬪取ニ可被成之由、御申にて

候条、其段申上候処、殊外被成御感、爲御女儀如此候儀、

御分別奇特ニ思召候、如御申、惣國中皆々憲法之御沙汰

有之時節ニ候間、無餘儀御親類中左様之御心付候へハ、

諸人之沙汰も可然候ハん間、ケ様之儀者、御國之しまり

ニ可罷成之由 御意候、尤目出度奉存候、此等之段、各

爲御存如此候、尚期後音候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十年〕

十月廿五日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌〔判〕

川上將監様

喜入攝州様

野州様

人々御中

野州様

喜攝州様

貞昌

川將監様

伊勢兵部少輔

ノ

「本ノマ、十月ニテハナシ」

西十一月廿一日ノ狀、十二月一日仁藏人殿被持下候、但御下様御知行  
くじとり可被成由御褒美之事

658

「家久公御譜中」

「正文在島津内藏」

△長刀合

一長刀上段鎌中段、

二長刀、鎌右之あひ下段、かふる所直勝、

三相中段、すこし鎌高シ、打所をまハして勝、

四長刀上段にかふる、うつ所をうへ、まハし勝、

△鎌合

一右之相下段、直鎌上段にあくる、付鎌にて打所を下へ

まハしかつ、

二鎌上段鎌中段、鎌にて打所を上へまハし勝、

三鎌も鎌も右之脇上段、鎌にて打所を下へまハし勝、

四鎌上段鎌下段にかふる、上段になをし打所を下へまハ



し勝、

一 鑓・鎌左之あひ下段、かふり入る所を上より直にかつ、  
 六 鑓・鎌右之相下段、同かふり入を直にかつ、  
 七 相中段、少〔し〕<sup>〇ナシ</sup>鑓たかし、打所を廻してかつ、

## △鑓合

一 相中段 にほひをかけつく所を  
乗てかつ、  
 二 相中段別る所へ付かけてかつ、  
 三 相下段 付かけて廻す所へ乗て  
かつ、  
 四 相上段 下へ廻しつく所をさへ  
てかつ、  
 五 相上段 さぐる所をつれてうつり  
つく所をかつ、

此一巻者、山口外記流鑓合之表略、所記置之也、可秘  
と、

寛永十年

十月吉日

(合点・△印ハ島津家久譜ニヨリ補フ)

中納言家久 ○ 「朱イン」

「御文庫拾八番箱廿六巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

▽◎以上 △

急度令啓候、

一 今度就御支配御姫様達之御知行高□さの御衆者、皆と  
 三步一近所へ被進、其外者可爲御鬪取之由被 仰出候、  
 加治木新造など漸三百石之御衆を不及鬪取、近所へ可  
 有御給由 御意候、御妹様御知行之儀、是非共可被成  
 鬪取之由御申、一段御尤と 思召、御子様達之御知行  
 之儀も、如右被仰出候、誠諸士之知行進疎なきやうに  
 と御沙汰候処、おुकかたなど御自由ニ候へ者、如何敷  
 被思召之由被仰出儀、奇特千萬ニ御座候、御妹様今度  
 之御申様奉感候事、

一 加久藤移之儀、きはく敷無之様ニ、五代勝左殿被居  
 付候様ニ、可被成御談合候、如御存知、此中者真崎表<sup>幸</sup>  
 へ誰も無之、伊集院遠江殿飯野へ被居候へ共、病者ニ  
 而、所中之儀さへ自身見廻者不成躰候、誠<sup>ふつ</sup>みちの山・  
 加久藤・馬関田・吉田・吉松・般若寺邊迄、御打明候  
 て被召置候つる間、下と如何様之心持も相知ましき由  
 候て、餘之事ニ先年弟子丸越後殿を吉田へ被遣候へと

も、無程被相果、彼表國大形成躰ニ、諏方仲右衛門尉殿加久藤へ可被成御移之由、御座候つる、五勝左殿者年比よく候ニ付、野州老如存知 又八郎殿御側へ可被相付之由相定、既ニ地頭所をも御繰易ニ而御座候つれども、境目を新敷俄ニ御かため候様ニ、公儀御沙汰も候へ者、いか、敷候間、本と之地頭、無何と様ニ被罷移候ハ、餘沙汰も有間敷由被仰出、又仲右衛門尉者道山へ可被召移之由候、就其申事候、仲右衛門殿加久藤移ニ相定候時者、惣別知行彼表ニ而可被給ニ相定候間、五代殿も如其御賦尤ニ候、殊今度爲移加増弐百石被遣候間、弥其御心得肝要ニ候、其外伊地知左右衛門尉殿も菱刈へ移之儀被仰付、是も御加増本高惣別彼表ニ而可被給ニ相定候間、御加増被遣候而、真幸・菱刈へ被移候衆者、皆と可爲其分候、子息達を鹿兒嶋へ被召置候て被下候様ニと候衆へ者、其御心付も可有之候哉、伊地知四郎兵衛殿者、今度仁礼藏人殿ニ而、其段◎被〔御〕申候而相究候、大膳亮殿御息之儀者最前左様ニ被

仰候間、定可爲其分候、仲右衛門尉殿・五代殿者、於其元様子可被申候、御加増被給候て、惣別之知行勝手能様ニ被持候ハ、諸人之存分も如何敷御◎坐〔座〕候間、真崎・菱刈へ御加増被給候て被移候衆者、惣別彼表ニ而御支配御賦尤ニ候事、

一上使從種子嶋御歸帆候ハ、一刻も早と可有御注進候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年酉」  
十一月五日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌判

野州様

喜入攝州様

川上將監様

人々御中

「未紙ニ」

野州様

貞昌

喜攝州様

参

伊勢兵部少輔

兵部少輔内衆  
山下新介持下狀  
西十二月二日ニ到來

大口地頭移之儀也

「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶と細川越中殿へ者、今日被成御内談候、彼者いき  
て居申儀幸ニ候、殊外立入て、公儀へも御申肝要之  
由被仰候、掃部事者、其涯日本國御尋被成たるもの  
ニ而候条、以其心得御披露尤候由被仰候間、弥無恙  
様ニ御分別肝要候、將又、上使之御衆、種子嶋より  
御歸帆候て、くしまのことく御越之由、志布志之衆  
中兩人ニ而御注進狀、昨晚此元へ來着候、御三人よ  
り之御書中旨具致披露候、委可申候へ共、此飛脚一  
刻も急可申由候ニ付、如此候、本田帶刀方者、今日  
七ツ時分此方へ被罷着候、以上、  
急度令啓候、然者彼小三郎事被擲取候而、向之嶋へ被遣  
置候由、先書ニ被仰越候へ共、様子兎角無御座ニ付、殊  
外御待かねにて御座候処、本田帶刀方へ御持せ候御狀ニ、  
山民少・伊地知奎右ニ而小三郎へ御尋候へハ、不紛由申  
之由候間、則御年寄衆へ可被得御内談之由候、就其彼者  
無病息災にて罷居候様ニ可被入精由、即可申遣旨、御意

ニ付、如此候、いかにも先御た、し候て、はや久敷事ニ  
而候、其上餘涯と敷可被仰付事にもなく候間、命ニ氣  
遣者有之間敷候間、左様ニ心得候て尤候、縦御成敗候と  
ても無了簡候由、有様ニ能く被仰聞、此方へ欵長崎へ欵  
可被相渡内、彼者身上無恙様ニ御分別專一候、明朝御年  
寄衆へ被得御意候間、此方へ被召寄候欵、又長崎へ參候  
欵、追と注進可有之候、たべ物など餘麁相ニ無之様ニ被  
仰付、時分から寒候間、ひへこ、へいたし、煩など候ハ  
ぬやうに、可被仰付候、自然此方へ參候はん時者、定可  
爲乗物候、其段者重而可申越候、先く右之段一刻も早と  
可申遣由候間、如此ニ候、恐惶謹言、

「末カキ」  
「寛永十年」

霜月十二日

伊勢兵部少輔◎(花押)

貞昌判

野州様

喜攝州様

川將監様

人々御中

661

「御文庫廿三番箱十八卷中式通共」「家久公御譜中ニ在リ」

於薩<sup>（札）</sup>中納言殿領分、明石掃部子被紀出之由候、然者其地へ可被差上候間、請取籠者被申付、其上可蒙仰候、右之通爰元ニテ大隅守殿申談候、恐々謹言、

「朱カキ」

「寛永十年」

霜月十五日

酒井讚岐守 忠勝

土井大炊頭 利勝

酒井雅樂頭 忠世

板倉周防守殿

662

「本文書ハ六六一号文書ト同文ニツキ省略ス」

663

「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以小三郎儀能様ニ被成尤候、右ニ如申、もとく着申たる物共、若けんだんことくにをさへをかれ候ハ、左様之物をも衣裳之類などハ可被遣候、其外

之物者、籠者之躰にて候間、不入儀候、くり事なから曲もなきなど、存候ハ、なき事などをも可申候間、其御用心肝要ニ候、殊此元御年寄衆よりも、不致氣遣やうにと被仰聞候へとの御内意にて候間、可被成其御心得候、以上、

一書令啓候、仍明石掃部子之儀、御年寄衆へ被成御披露候処、則被達、上聞候へハ、御感之由候、就其被者之儀、此方へ不及被召寄候間、板倉周防守殿へ可有御渡由被仰出候、就其御年寄衆被仰候、京迄之間、かご籠之様ニ被仰付、餘くるしミ候ハぬやうニ候て尤候、其元より上方へ被召上候間、定身上之氣遣を可存候条、今更被對彼者何之御遺恨も無之候由、粗御沙汰候様ニ被仰聞、心易存候やうに、其元にて談合候様ニとの御事候、からめ繩之躰にて御引のほせられ候様ニなど、可被仰致と存候処、籠にて上り候やうにと被仰候、然時者侍にて候つる間、ケ様ニ被仰候致と存事候、路次中賄等餘籠相ニ無之様ニ、又きる物なども木綿ぬのにて候共、見くるし

からぬやうに餘多御きせ候て、帯なども持申間敷候間、

被遣へく候、自然此中町にても小袖之類着候て罷居候ハ

、其なりにても可有之候哉、餘御馳走候様ニ相見得候て

も不入事候、又餘窮屈ニもとくよりも見苦敷様ニ候て

者、彼者之心中も如何ニ候間、忝と存候様ニ被成尤候、

相付候て京都迄無吳儀被參候人を、兩人程御付尤候、勿

論分限之衆者入申間敷候、乍去板倉殿へ相渡可申時、餘

田舎めきたる人者如何敷候条、可有其御心得候、木綿に

て成共、よるの物など被仰付、路次ひへ候て煩なといた

し候へハ、咲止ニ候間、先無恙様ニ京都迄罷着候様被仰

付尤候、二度之食迄にて者可難成候間、晝も何そたべ候

やうに可被仰付候、尚委細口上ニ申候間、不詳候、恐惶

謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十年〕

十一月十六日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌〔判〕

川上將監様

喜入攝州様

下野守様

人々御中

664 「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

一書令啓上候、仍板倉周防守殿方仁礼右近將殿へ御承候

者、從御國明石掃部之子罷上候ハ、早くと被成御請取

之由候而、江戸御老衆方板倉殿へ御遣之御狀被成拜見候、

其御狀之写大坂へ被指下科人罷上候ハ、念ヲ入申候而

如京都可指上せ之由申來候、江戸御老衆之御狀之写進上

申候、不及申上候へ共、船中被入御念候て被仰付候へて

ハ、板倉殿方も大坂より可罷上路次、念ヲ入申可召上せ

通爲被仰由候、恐惶謹言、

十一月廿六日

二階堂城介◎〔花押〕  
信行〔判〕

下野守様

喜攝津守様

川左近將監様人々御中

參

「采ニ左ノ如シ」  
進上

下野守様

喜攝津守様

川左近將監様

信行

二階堂城介

封

西ノ十一月廿六日ノ狀、十二月十六日ニ濱田仲左衛門尉被指下候、  
一小右衛門上落之儀也、

665

以上

任幸使用一書候、仍松沢六右衛門尉之便ニ、書狀其外傳  
言之物儘ニ相請取申候、其元御無事之由目出度存候、此  
方上下一段無爲ニ御坐候、御心遣入間敷候、然ハ久志地  
頭之儀、此度野村大学助殿下向ニ付、兵少様へ申上候へ  
ハ、御國元江今度可被仰下由御返事ニ而候、左様ニ候ハ  
、貴老江定而御老中衆より可被承と存候条、左様成刻  
者、彼是山田民部少輔殿へ御尋被申、能様ニ可被成御談  
合候、何れ共貴所鹿兒島へ被指越、野村大学助殿へ被成

參會可被承候、將又出銀之儀少も無油断様可被念入候事、

肝要候、委敷者重而之便ニ可申遣候、恐々謹言、

「當寛永十年」  
十二月五日

伊地知采女正  
重康判

伊地知治拾郎殿  
「重利」

人々御中

666

「北郷忠亮譜中」

寛永十年十一月、爲 太守公質赴江戸、家老北郷仲左衛  
門久永・旅家老北郷藏人久孝從、翌年二月十日於江戸死、  
年二十一、

667

「家久公御譜中」

同年十二月六日、家久降書於島津久慶及島津久元・川上  
久國、使久慶任家老矣、

668

「家久公御譜中」 「正文在嶋津左衛門久道トアリ」

已上

一書令啓候、然者其許家老役之衆無人候之間、其方之義  
下野守同前ニ諸式沙汰尤候、委曲此兩使可相達口上候、  
恐々謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十年 極月六日

家久〔花押〕

彈正大弼殿

669 「家久公御譜中ニ在リ」此御書、四十八番箱中ニ有之

其許家老役之衆無人候之間、年若候へとも彈正大弼へ申  
渡候条、諸式談合尤候、猶委細者兩人可相達口上候、恐  
々謹言、

〔寛永十年〕

極月六日

家久〔花押〕

川上左近將監殿

下野守殿

670 「家久公御譜中」

同年十二月七日、家久降書於家老島津久慶、其趣憂國風  
邪僻而欲歸正道、日夜孜孜不安、賢君盡心、實可尊也矣、

671 「正文在島津左衛門久道」

猶以每事大學助へ内談候て、此方へ可有注進儀於有  
之者、無油断不寄何時早々可被申越候、以上、

國之風躰依邪僻危成行候由、委令承知候、誠 賴朝以來  
相續候家、於吾等家督之時節、存亡之危難不堪悲歎候、  
因茲、今度野村大學助へ申合、指遣候間、被遂熟談、東  
郷肥前守など以密談、其許之様子細々伊東二右衛門尉に  
て可被申越候、將又家老職之儀申遣候間、萬事被相嗜、  
諸人神妙ニ存候様、分別肝要候、不可有緩疎候、恐々謹  
言、

〔朱カキ〕  
寛永十年 十二月七日

家久〔花押〕  
〔御判〕

彈正大弼殿

〔包紙〕  
彈正大弼殿

家久

672 「御文庫三番箱五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」



覚

一 一ヶ條之儀に付内談可有之衆之事、

大膳亮 新納加賀守 山田民部少輔 仁礼藏人 五代勝左衛門尉  
諏方仲右衛門尉 伊地知四郎兵衛尉

一 諸境目いかにもやへらかに他方へ申談、以此上心得共可有之事、

一 仁礼藏人・山田民部少輔、高岡・出水へしかと罷在、

下と諸法度緩無之様可申付候、御用にて不被召時者、

覺嶋へ參府可爲無用之事、

一 志布志・高山移衆、可入候哉之事、

一 南蠻宗之事、

一 立野之事、

一 此跡題目之口事不相濟之由、世上取沙汰之旨、聞及候

之間、能く沙汰候而、以書立可有披露事、

一口事聞衆相定候事、付誓紙前書之案書之事、

一 唐船ニ御國之者飛乗候由、取沙汰候間、日本人にても

唐人にても稠可被糺付候事、

一 赤石掃部子定早と可召上候事、

一 しゆあん又左衛門尉事、

已上

西十二月七日

673

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返く役の事たのミ申候事候間、其よし申候、めて度くかしく、

わさと申候、たん正とのへかはんやくをたのミ申候、よく御いゑのためになり候やうに、すこしもゆたんなく、わたくしの事を思へれす、申まてなく御入候へ共、みちをたしなまれ、ゆく末ちやうきふに御入候てめて度申候事候、此よしたん正とのへもよく申度候、やかてくたり候て春はよろこひ申候へく候、又とかしく、



「宋カキ」  
「寛永十年」十二月七日

より

たん正との

むもし  
まいる

いゑ久

674

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返く役の事御ゆたん有ましく候く、かしく、

一筆申候、たん正とのへかはん役の事たのミ申候、御いゑの御ためすこしも忘候ハぬやうに尤候、よりともよりの御いゑ、廿代にあまり候事候まゝ、まことにくからさる事にて候、ゆく末ちやうきふに御入候やうにめて度候、此よしいもしへも申候、春ハやかてくたり候てよろこひ申候へく候、めて度候、又くかしく、

「宋カキ」  
「寛永十年」十二月七日

より

おふくろ

まいる

いゑ久

675

（本文書ハ「旧記雑録後編四」八八二号文書ト同文ニツキ省略ス）

676

諸國江上使御下向之節御間被成候御返答

覚

寛永十年癸酉諸國江上使被召下候、九州江者小出對馬殿・城織部殿・能勢小十郎殿御下り候、

同六月七日、出水米之津江御着、其晩者麓町江御一宿、八日、御立、紫尾山御越宮之城江御一宿、

蒲生 鹿兒嶋 喜入 指宿 山川 頼娃

鹿籠 坊津 泊 久志 秋目 片浦

加世田 田布施 伊作 伊集院 市來 串木野

飯嶋 向田 山崎 大村 霧田 曾木

大口 高城 横川

七月廿三日、加治木江御着候處、黄門様御意ニ而同廿四日喜入攝津・川上因幡籠越致御案内者、帖佐之建昌之城懸御目ニ候、御三人被仰候者、此城之岸皆足きく

（但シ、年付ハ慶長十六年ナリ）

ニ而候、石垣ヲ可被仰付事、拾年・廿年ニハ調間敷候、其上水不足之間、御住城ニハ可難成由被仰、又加治木江御越、其晚從鹿兒嶋歷々踊二庭・名踊二庭被進候、

一 對馬どの家老宇野角太夫と申人、七月六日舟ニ而國分へ參候、

同廿五日、御上使三人加治木ヲ國分へ御着候、

同廿九日、織部殿・小十郎殿國分御立、如栗野御越候、

右御兩人ハ國分へ五日御滞在ニ而候、

一 對馬殿八月七日ニ國府御立、栗野江御越候、國分江十

六日御滞留、角太夫者三十二日滞留仕、御城江上り爲

見申由候、

一 其已後上井之坊主 被申候者、上使御三人寺ニ而被仰

候者、此城日本ニ四ツ之名城ニ而候、先大坂之城、是

者天下之城ニ而候間、不及沙汰候、甲斐天目山、岩城

ニ而能候へども、山中ニ有之候而、知行を少もかゝへ

す候間、用ニ不立候、豊後之岡、岩城ニ而、四方大河

迫り、一段能城ニ而候へとも、國中ヲ敵取敷候而渡り

を取切候ハ、終ニハ干死し可申候、國分者城勝レ、水もつよく候、其上諸方より之入口嶮岨ニ而、田畑も過分ニかゝ候、此城日本一たるへきと爲被仰由、坊主物語被申候ヲ承候、

八月七日、栗野江御着、翌日加久藤・求广・又加久藤

・小林・野尻江御越候、田野右山之口・都之城、三人

共ニ中之峠御越、飢肥江御着、其より志布志八郎ケ野

ニ八月十五日御着、對馬殿ヲ鎌田源左衛門・川上因幡

へ御振舞被下候、小十郎との・織部殿者松山・福山等

舟ニ而山川へ御越候、對馬どのハ大崎・鹿屋・高洲、

船ニ而山川江御着候、兒ケ水へ御越候、夫方佐多江御

渡、喜入久右衛門・相良全助・川上因幡相附申、九月

九日大泊出船、屋久嶋一湊之湊江御着、同十日永良部

江御三人御渡候而、其日屋久之長田へ御着、同十一日

又如一湊御廻之由被仰候處、川湊を浪砂をあげ、はき(擲)

小サキ候故、御舟出候事をそきとて、陸路を御越候、

地頭五代少左衛門殿其外諸役人衆振舞、道具・幕・屏

風など舟ニ乗せ一湊江被廻候處、俄ニ西風あがり、舟四艘打わり候得とも、濱江打上候故、人ニけがハなく候、道具ハ皆すたり候、上使も、めし候笠之緒など吹切申候、對馬殿ハ馬方川へ吹落候得共、岩之間ニ御落候故、御けがなく候、湊口つきふさき候事不思議成儀候、一湊方陸路宮之浦江御着、數日御滞留、其内對馬どの御宿へ小十郎殿・織部殿御座候、久右衛門・左助・因幡被召寄候而御尋被成条候、

大坂御陣之脇武家江仰出之内、一國ニ一城之外者皆可割捨由、被仰出候ニ付、諸國其分ニ而候、當國ハ何れの城も其儘ニ被立置、殊ニ城本ニ給へ共餘多移居候、自然之時者即時ニ可取構よふニ見得候、如何様之儀ニ而右之跡ニ候哉之被成御尋候、因幡申上候者、給へ共城本ニ居候事ハ、先年義久九州を領候時、過分之人數ニ而候、太閤様御下向之刻、六ヶ國被召上ニ付、其人數ニヶ國半之内ニ引入候、一所ニ者無居所故、そこくニ而知行少ツ、とらせ、又藏入之作職をもさせ申

ニ付、方々ニ賦付候、右郷之屋敷者、皆知行高之内ニ而候ニ付、城本之古屋敷ニ移置候、城を堀崩不申儀ハ、城廻り過半田畑ニ而候、堀崩たる出入候ハ、知行之高過分引入申候、就其不堀崩と、古き家老とも申候を承り候と、申上候得者、御三人ともニ御納得ニ而候、又御尋候者、近年南林寺松原ニ鍛冶ヲ餘多すへ、鉄炮二百挺とやらん、急ニはらせられたるよし候、是者爲何事ニかよふニ、急ニ被調候哉との御尋ニ而候、因幡申上候者、夫ハ細川越中守どの肥後江被成入國候、隣國之儀候間、一廉進物調候へと、大隅守被申付候、家老ども致相談候者、武器・馬具其外何色ニ而も、上方方下申物者、銀子入ニ而候、弥借銀もくわり申候間、國物ニ而可調候、鉄者此地ニ有物ニ而、さのミ高直ニ無之候間、鉄炮をはらせ可申与申候而、二百挺爲張申候而、即越中守殿へ被遣候、別成ル儀ニ而も無御座候と、因幡申上候、

御三人被仰候者、諸境目ニ番屋を作、番衆二三人居候、

諸國ニ無之儀候、如何様成事ニ而候哉と御尋候、因幡申上候者、必隣國之隔心之儀ニ而も無御座候、法度之物とも他國へ出候を、改候而留申候、題目走者又者牛馬者、手形を以出し申候を、下ニかくし候ハ、返し、左よふ成ル改之爲、番を召置候、番屋之改物之品と、板札ニ書掛置候かと、存候通申上候、

御三人被仰候者、比志嶋宮内少家老ニ而候を、於種子嶋切腹させ、其子者當嶋ニ流罪ニ而居候、爲何儀ニ而候哉と御尋候、因幡申上候者、宮内少下地氣任成者ニ而、大隅守殿被申出儀を過半請付不申故、漸々ニ大隅守前悪敷成立候、然ル處飢肥と庄内之境、牛之峠之少シ東平ニ而、飢肥方楠之船楫木被爲割候を、從庄内申來候者、庄内之内ニ而わき候板を、飢肥江相付可申候哉、如何候と申來候、宮内少一人ニ而返事被申候者、板を下し候ハ、多人數差越、必板を留候へ、たとい大破ニ及候共、宮内少可存と被申、其時年寄たる衆三四人被申出候者、當時中納言殿在江戸被成候處、國ニ弓

箭起候ハ、即時ニ國を可被召上候、無勿駢御出合笑止ニ存候由、被申候、宮内少返答ニ、各不入氣遣ニ而候、右ニ付天下の御仕合悪候ハ、某一人罷出可致切腹候、御家ニ御氣遣させ上申間敷と、被申候、其時右之衆被申候者、宮内との拾人被成切腹候とも、御家を切留者成間敷候、又被申候者、飢肥者昔より人數八千計出申候、我々存候と被申置候、宮内少請所江廻文を遣候、從庄内狼烟見へ候ハ、道具を持牛之峠江續キ可申由被申渡候處、正月六日、飢肥山江初狩仕候を見候而、庄内狼烟立候を見、野尻・高原・小林などの人數、高城まで走來候、八木民部左衛門爲使上洛仕候、正月三日鹿兒嶋を立、高城まで參候處、人數を見候而、右之人數早と返し候へ、於江戸ニ委と可申上候、被申候ニ付人數罷歸候、定而江戸江被申候哉、追付使被指下、宮内少種子嶋へ流罪させ、切腹申付、子者當嶋江被流置と申候へ者、於飢肥壱岐將監爲申筋、少も不替候、一本ノマ、何ト、飢肥江人數可出との企、即大隅守殿をたをし可

申儀ニ候、子之命被助置事御慈悲ニ而候と被仰候、

上使從宮之浦種子之赤生木江御渡海被成候處、俄ニ北東之風向御舟ヲ取戻し、宮の浦之湊口塩干候而船入不罷成、沖へ御舟繫てんまを寄せ、上使をおろし可申与仕候處、小舟二三艘打割ニ付、折角成候を色と仕、小舟に乗せ申、磯之岩間ニ下し申候、誠ニあふなき仕合候を、上下けがなく御國之大慶候、九月末種子之嶋間江御渡海候而、陸路を赤生木江御越、無順風故數日御滞留被成、十月十五日佐多之大泊江御着船、其日伊佐敷、十七日小根占陸路御越、國見之城御覽候而、此城無殘所能城ニ候へ共、片はしこ有之故、國をかへす間用ニ立かたきと被仰、十七日高山、十九日志布志、中一日御滞留被成、同廿一日御舟ニて福嶋へ御越候、久右衛門・李助・因幡、夏井之前まで送候而罷歸候、翌年因幡江戸江參り、小十郎どのへ罷出候、國々御咄ニ而候、志布志者因州地頭所と聞候、餘之境目ハつまりたると見得候、志布志ハ他國之方ニ能城・陣城御座

候、能湊も有之、兵糧舟何百艘入候而もつまり間敷、志布志方福山道筋も大川二瀬、大崎方江も大川二瀬有之、自然大雨・洪水などの時者、味方之通路可相絶と對馬・織部も申候と御物語候、

677

『兒玉利昌譜中』

寛永十年癸酉 公在江戸、利昌上郎、十二月拜始良地頭職、給米俸三拾斛、時利昌以納殿役常侍公左右、不能泣而治邑、於是以為、使子利實時年三十一歲、攝職而徙出水兒玉吉兵衛等以視事、則其如指諸掌也、乃會野村大學介元綱・伊勢右京亮貞則奉使還藩、七日利昌煩元綱等、致利實及出水地頭山田民部少輔有榮等書、報事乞之、

678

『兒玉氏家藏』

覺

一御ひた、れ二通

内壹ツ者、六寸はかりの大すち、(綾)たんく・むらさ

『兒玉氏家藏』

き・なたね、いろく候て可然之由候、

御使下着衆

壹ツ者、無文のもへき可爲之由候事、

野村大學介殿  
『元綱』

一御こて二通

伊勢右京進殿  
『貞則』

壹ツ者、から織いろくに、地ハ青色可爲候、も

んハつねのもんたるへく候、

壹ツ者、地しろりんす、十文字を縫物に、色く

縫せ候て可然候、

一弓かけ三具者

一御くつ二足ハ

一御下着の御帷子五ツ

内式ツ者、すり薄いろくにて可然候、

三ツハ、いかにもことくにそめさせ可有之候、

『疑寛永十年』  
二月廿五日

兒玉筑後守  
『利昌』

伊東仁右衛門殿  
『祐昌』

澁谷四郎左衛門殿  
『重將』

参

寛永十年十二月初七日自江戸之書狀、十一年之正月二日  
手落拜見候事、書意之旨筑後守殿始良之地頭拜領之由申  
來、其上毎年八木三拾石被相添之旨書面ニ有り、誠以外  
聞無矣儀處也、今夜式部『北郷』太輔殿御兵法初可有之之由、御  
意候得共相延、仁礼藏人殿於宿所、上下之若衆中兵法初  
有之也、

寛永十年正月三日

藤原氏  
利實

同年正月廿三日之朝、市來八左衛門殿以始良之地頭筑後守拜領之由、  
拙子迄被仰出候也、同廿五日始良之嚙衆兩人被參候、當分爰元老中野  
州老・將監老也、則右之夜市八左老・鈴式双・魚持參申候而、辱之旨  
申入、御老中衆迄も可參哉と申候得共、無用たるへく由候也、

家久公  
光久公  
寛永十一年

後編  
舊記雜錄  
卷八十七

680 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

從細川越中守殿我等於領國之内、隼之巢鷹御所望之由候  
条、可有之所へ引付申候ハ、尤候、可致馳走候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕正月十日  
家久〔花押〕  
〔御判〕

川上左近將監殿

嶋津下野守殿

〔寛永十一年ト張札アリ〕

681 「家久公御譜中」

〔正文在種子嶋藏人久時〕

先月十九日、輒繁昌にて、殊男子之由、大慶不過之候、  
弥逐日可爲成人候間、珍重候、此餘無替義一段静謚候、  
万期歸國之節候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕正月十三日  
家久〔花押〕  
〔御判〕

種子嶋左近將監殿

682 「御文庫拾八番箱廿六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓候、然者旧冬霜月十六日之日付にて、以早打申  
入候、其御返書于今免角無之候、然處ニ仁礼左近殿へ從  
板倉殿被仰之由候而、注進之由被仰越候、明石掃部子之  
儀細々申下候、若其書状其元へ遅參着候哉、無心元存候、

先年 台徳院様御煩之由御左右申候、早打も此元を右馬  
 頭殿早打同日ニ打立候処、十五日遅其元へ參候、其前ニ  
 右馬頭殿御注進ニ爲被聞召由候而、此元へ被仰上驚申候  
 而、相糺候へ者、船中あなたこなた仕、致延引たる由申  
 候条、爲後日之由候而、以御沙汰之上御扶持を放、彼道  
 具衆被追出候、定御失念有ましく候、若如其にて遅、其  
 元へ相達候儀もやと存候て、爲可承如此候、就其右ニ申  
 進候書状之案文写候て持せ申候、可有御覽候、掃部子之  
 儀ニ付、ろそん又左衛門事も逃走不仕様ニ籠者可被仰付  
 之由、度々申入候つる、彼者籠者之儀者はや相究候へと  
 も、掃部子之儀ニ付候而之御返書、于今無之候、委御報  
 可承候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
 正月十三日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
 貞昌〔判〕

野州様

喜攝州様

川將監様

人々御中

683

「家久公御譜中」  
「正文在種子島藏人久時」

新春之嘉祥重疊、尚以不可有盡期候、旧冬者輒繁昌之由、  
 殊男子にて大慶之至候、爲此等之祝儀此使差下候、猶追  
 と万賀可申加候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
 正月十五日

◎(花押)  
 家久〔御判〕

種子嶋左近將監殿

684

「寫本兒玉氏藏」

彈正殿江知行御給之員數之儀、此元ニ而如御承三千石た  
 るへき由候キ、内々彈正殿御任被爲申候様御約束ニ而候  
 へ共、祇答院之儀ハ野州老御座候而、晴養之御知行當時  
 壹万四千斛余之御賦ニ而候、最前之御約束ニハ、本々之  
 ことく御給之由候へ共、左様之儀茂首尾不申候由、連々  
 御申ニ付、今度東郷を祇答院之爲替被進御知行、三千石  
 加増として被仰出候間、三千石之御賦尤ニ候、爰許ニ而  
 も左様社被仰出候、御使者町田駿河守殿・児玉筑後守殿



ニ而御座候、野州老可爲御失念候事、

685 「家久公御譜中」

寛永十一年甲戌二月十二日、中山王尚豊使佐敷王子爲使節發球國而渡覽府、是尚豊去年從大明皇帝以賜王位冠、故爲奉謝其祝禮也、委見三司官豊見城盛良・勝連良繼副簡矣、

686 「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

謹捧愚札候、仍去年從唐勅使被成渡海候而、王位冠頂戴被仕候、左様成御札爲可被申上、佐敷王子被差上候条、萬端可然之様、乍憚被添御心候而可被下候、偏被奉頼上之由、王位被申事候条、雖恐多候愚翰如斯候、御入魂所奉仰候、此旨可得御意候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」  
「寛永十一年」

二月十二日

豊見城 ◎〔花押〕  
盛良〔判〕  
勝連  
良繼〔判〕 ◎〔花押〕

伊勢兵部少輔様

川上左近將監様

喜入攝津守様

嶋津下野守様

▽ ◎  
御老中衆様

良繼

勝連

豊見城



△

687 「入來家臣入來院直記載」

覚

一 浦之名竿之儀、祇答院之内宮之城なをり候におひてハ、

同前ニ御侘可申入事、

一 外記殿へ祝儀ニ付、御一禮之事、

一 御番替ニ付佐渡守殿へ御傳言之事、

一志岐殿就御身体、兵部少輔殿へ得御内證候事、

一彈正殿別而御礼之事、

一配當衆書立之事、

一鹿兒嶋屋敷へ召置候衆、節々暇申事闕無之様可被申付

事、

一鹿兒嶋代官之事、

一金右衛門尉弟之事、

一御屋地様御近所へ新地之屋敷拾ヶ所程ニ可召移人數之

事、

『是れ先切る不知』

『全』

一就配當從四拾石上門一、從三拾石上屋敷一宛之賦ニ可

有配分事、

一此度御配當相改目錄被下候時分、吉兵衛尉・治部左衛

門尉付衆兩人宛同心ニ而、念を入可被請取事、

一配當衆以別紙申下候付、就配當神文可有之候、前書之

案文相添差下候事、

一小林・馬関田・中津河之衆者、其所之御返地被下候所

へ可召移事、

一作人無沙汰之所者、早々代官肝煎前々不荒様ニ可仕付

事、

一連々就奉公方入精緻馳走候衆者、以日記便宜次第可被

申上せ事、付色々致難決、奉公方無用之輩茂、以其改

時々之日記可指登事、

一去々年之出物未進方、知行可召上事、

一去年出物之儀、御支配圖取前ニ可致皆濟事、

一右知行可召上事、公儀之如御法度、壹石ニ付壹匁五分

宛之算用ニ被召上候而、役人衆以分別公儀無未進様ニ

可有校量事、

一借銀返弁之事、

一就配當可爲賦付哉、可爲圖取候哉、各可相任衆儀事、

一新高之代官相定候事但別紙ニ有、

『寛永十一年』

戊二月十三日

## 覚

- 一 御用作之儀、百俵者、浦之名・添田肝煎衆致首尾、銀子
- ニ 可相調之事、但種田弓左衛門尉へ巨細被仰下候事、
- 一 清敷衆中高之内、御買地之納、重永主殿助去毛之儀も存候間、去毛之納も首尾可承由被仰付候事、
- 一 馬関田浮所并伊左衛門尉先地、須目田藤右衛門尉知行前より之浮所、高廿一石之納之作人者、斧淵源八・池田主殿助并長田之百姓ニて候、右之納方請取手田中五郎兵衛尉被致首尾、急度代銀被相調可被指登せ事、
- 一 中津川百姓種子ニ借用申候拾貳表、重永主殿助存ニ而候間、主殿助以分別、成代銀ニ可被指上候事、
- 一 戌之年夫錢之儀、拾八表之約束ニ而相定候条、鬼塚甚兵衛付重永主殿助首尾可被承事、
- 一 茶之納方・柿之納、麻・苧・蜜柑・漆等、爲浮徳納候、去年、當年兩年之分一乘院、久左衛門尉以与、鹿児嶋へ代銀ニ而參候様ニ校量可有候、納分量者毎年相定候

間、然可有沙汰事、

一 鹿之皮貳拾枚之事、但山請去年之冬より當春迄納并狩

之納取合、何とそ行司前より可被指上せ事、

一 鍛冶衆之炭之儀ニ付、山役五貫文、

一 執駒之事、右者星栗毛出子ニて候ハ、可被召置候、

其外者賣可被申事、付御兄弟様御物に母駄可被見分事、

一 松材木之事、

一 唐船帆柱之事、

一 竹之儀、右三ヶ条者他國商買公儀於御免者、御手形申

請可在之事、

一 粟之儀、種田久左衛門尉一乘院首尾可被承事、

一 木之子之儀、右同人可被承事、

一 鮎之事、東郷吉兵衛尉可被承事、

一 切梅之事、鬼塚甚兵衛尉・田原二郎兵衛尉

『是の先切』

最前より

690

「雜抄」

「寛永十一年御竿横川衆中名寄帳奥書」

「正文在地頭飯屋」

右知行今度以御檢地之上、御家中之支配被相改候、知行所之遠近、應衆中銘々高、地頭并噉衆以相談、無親疎可有配當者也、

御支配所<sup>(印之)</sup>□

寛永十一年二月十六日

高崎伊豆守印

山田民部少輔印

新納加賀守印

691

「雜抄」

の野馬場座主支配之時竿次帳写

の野寺 多門坊 福誠坊 金光坊 滿藏坊 志摩之丞

二ノ殿守 正市 二ノ正市 門前中座 栗石 常慶 獅

子舞 門前刑部左衛門 篋頭權祝子 正祝子 三内司

三殿守等也

右寺社屋鋪之事、今度雖被戴御檢地、任先規之例、令免

許早、門前田島者軍役方ニ被相加候間、於向後者諸士并

諸役可相勤者也、

寛永十一年二月十九日

新納加賀守

山田民部少輔

高崎伊豆守

の野寺

692

「寺社方帳留」

松山郷正若宮八幡由緒帳之内

社家屋敷八ヶ所

神主長三郎

右社家屋敷之事、今度雖被戴御檢地帳ニ、任先規之例

令免許早、門前田島等者軍役方ニ被相加候間、猶向後

ニ諸士并ニ諸役可被相勤者也、

御支配所印

寛永十一年二月廿三日

高崎伊豆守印

山田民部少輔印

『清水北辰  
會於郡止上神社ニアリ』

新納加賀守印

屋敷目録

大山

下屋敷 十一間 時七升七合  
十五間 五畝十五歩

谷口安房介

大豆壺儀三升五合

右神社屋敷之事、今度雖被載御檢地帳、任先規例令免  
許早、門前田島等ハ軍役方ニ被相加候間、於向後者諸  
士并諸役可被相勤者也、

御支配所

高崎伊豆守

山田民部少輔

新納加賀守

寛永十一年

二月十九日

北辰神主

「御文庫拾八番箱廿七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

追而申候、仍昨晚伊勢籙殿御懷、御姫様を被成誕生候、  
一段御仕合能目出度候、是又爲御存知候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」

二月廿五日

伊勢兵部少輔○（允押）  
貞昌判

川將監様

喜攝州様

野州様

人々御中

野州様

喜攝州様

貞昌

川將監様

參

伊勢兵部少輔

甲戌二月廿五日之狀三月十七日ニ肝付傳右衛門尉被持下候、  
但芝御姫様御繁昌之儀也、



「家久公御子ニ寛永十一年甲戌二月廿四日誕生御女子、不日御夭亡ト  
ミヘタリ、

但二十四番目ノ御子ナリ」

695

「家久公御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

爲新年之祝義、到遠路使者被差越、殊太刀・馬懸勸之至、欣悦此事候、其許無事之由、令満足候、弥以子息可爲成人と令推察候、此表之儀無相替事候、近日暇給候ハ、

急度令歸國、万事期面談之節候之条、不能詳候、謹言、

「朱力キ」  
「寛永十一年」二月廿八日  
家久◎(花押)〔御判〕

種子嶋左近大夫殿

696

「正文在島津左衛門久道」

年始之爲祝儀、到遠路使者被差越、殊太刀・馬懸勸之至、令祝着候、弥其許無事之由満足候、此度之御暇之義未相知候、來月十日より内ニ暇給候者、餘ニ長旅之儀候条、  
「本マ」  
吉々令歸國、又追付可致上京候覚悟ニ候、公方様御上洛之義も時分未相知候、とかく近日様子可相聞候之条、即可致注進候、將又其地支配之義、此比者何程相調候哉、能く談合候て、無吳儀致首尾候様、各肝煎專一候、尚追

可申越候条、不能細筆候、謹言、

「朱力キ」  
「寛永十一年」二月廿八日  
家久◎(花押)〔御判〕

彈正大弼殿

「在包紙」  
彈正大弼殿  
家久

697

「御文庫拾八番箱廿七卷中」  
「御譜中ニ無之」

覺

一分限多少によらず、於歴々者毎月朔日・十五日・廿八日出仕無懈怠相勤、日記可被付事、付他出之時者年寄衆へ届可承事、  
一諸御物申請無上納人、或押前、或數年之出物未進之衆、於無皆濟者、知行之返地被出間敷事、  
一高三百石迄者常住手鍵可被持せ由、兼日被仰出候、弥可被得其意事、付又小者共機任ニ候、從主人能く可被申付候、於緩者稠可有其沙汰事、  
一仁礼傳五郎事、丸田傳右衛門尉を討果候ニ付、數度及

御礼明、今度切腹被仰付候事、

一丸田同心之衆、岩本平左衛門尉・長崎弓兵衛尉・藤崎

長吉・大脇舍人佑事者飯嶋へ遠流被仰付候事、

一上下之衆、我々合手と申与、連々知音被仕由候、自

今以後堅令停止候、此度丸田同道之衆も常々申くミた

る衆ニ而候由被、聞召通候間、流罪被仰付候事、

一御番無緩可被相勤候、難去私用ニ付、代を被差出由候、

無御目見得人并若輩之衆者被頼ましき事、付夜行并辻

うた可爲停止、若無余儀用所之時者可被參哉、節々者

必可爲無用事、

寛永十一年三月朔日

「家久公御譜中」

「寫正文在琉球國國司」

覺写

一運賃漕之船頭・水手、於其地家を持女房を嫁、いつと

なく致逗留、仕上せ之時分をすらし、大風ニ合候、曲事

之儀候間、家女房持候事堅可爲停止由、稠可被仰渡事、

一他國之者、此地之船頭・水手ニ紛候而、其地へ相下之

由候、節々被相改、他國人可乘來船頭之者罪科可被仰

付事、付横目を被付置可被爲入念事、

一公儀へ無御存知、日本衆琉球へ家を持、永々逗留仕儀、

堅停止之儀候間、早々相記候て可被申上事、

右之條々、節々稠可被仰渡候、左候而、此書物次之

奉行衆へ可被渡置者也、

寛永十一年甲戌三月十七日 川上左近將監印ナシ

下野守

町田勘解由次官殿

699

「眞本兒玉氏藏」

猶々國境之人を我等推量ニ而、内場へ召移候事難申

候間、公儀御下知ならてハ難仕候間、右之様子ニ候、

定而大学殿方可被仰越候間、不能細筆候、

就幸便令啓候、仍大隅守殿御暇之儀未相聞候哉、待久奉

存候、各長と御大儀被成事難申盡候、然者野村大学元綱介殿

歸國之刻預御狀忝候、始良地頭役御當、先以目出度存候、

就其、出水衆中児玉吉兵衛殿、始良へ被召移度由承候、

我等前方領掌候事難申候、左候へハ、又誰人より被仰候

時仕にく、候間、從御老中被仰聞候得者、後日仕よく候

之間、御息様へ御談合可被成由、大学殿へも申入候、其

後ハとかく不承候、爰許之様子細と申入候、爲御存知候、

恐惶謹言、

〔寛永十一年〕

三月十七日

兄玉筑後守様

山田民部少輔

有榮花押

700 〔光久公御譜中〕

爲小児誕生之祝儀太刀一腰・馬代銀子十兩并焼酎一甕、

珍重存候、誠に遠境厚志難謝候、猶重而從是可申通候間、

不具候、謹言、

〔寛永十一年〕

三月廿六日

光久花押〔御判〕

勝連

701 〔雜抄〕

絹布着用御法度

ゑり 袖へり 帯 下帯

木綿之着類に縫の紋所

右之通小者中間さうり取六尺

〔寛永十一年也〕

戊三月廿六日

702 〔家久公御譜中〕

同年三月晦日、伊勢貞昌贈島津久元・川上久國書言、所

在于大口青木村裏之茶、年年從求摩摘來、故其地固謂求

摩之境内、彼是互爭論事委員貞昌之書矣、

703 〔御文庫拾八番箱廿七卷中〕、〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

又申入候、大口境青木村之内へ茶園候を、此方へ可被爲

摘之由、青木行司衆〇内と加賀殿より被申渡候哉、然處

從求广番を付置候、如何可有之哉之由候、此儀者今度 上



使境目御覽之時、求厂衆与大口衆申相ニて候由、肥後仲右衛門此方にて慥ニ被申候つる者、求厂衆申様ハ、既ニ此茶を求厂より毎年摘候時者、求厂之内与申候処、此方より申候者、山之内ニ有之茶を、従求厂ほしかり候て摘候ニ者、かもひ不申候、此方茶ニ事關候ハ、何角可申候へとも、籠ニ有之茶を取候て自由ニ達候間、山之内へ

有之茶を必此方より望者無之候ニ付、打任而召置候、左様ニ候とて求厂之内ニ可成儀ニ而者無之候与、上使之御前にて爲被申由候、然處此中求厂衆へ任候て、爲摘与聞得申候、先知ぬ振にて可被召置候、如何様ニも被仰候而可然候ハんと候ハ、追而被仰様可有之候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
三月晦日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕  
貞昌〔判〕

野州様

川將監様

人々御中

野州様

川將監様

參

貞昌

伊勢兵部少輔

一、戌三月卅日之狀、四月十六日夕御道具衆持下候、  
一、大口と求厂堺茶之事

704

「家久公御譜中」  
「正文在島津左衛門久道」

家老役之義申越候處、爲其祝儀使者被指越、欣然之至候、弥諸式念を入、以談合被申付簡要候、此表無相替義候、御暇之儀未相知候、乍去近日中様子可相聞候、於其義者追付可致上洛候間、万々從京都可申下候、將又此中内義少々煩之由相聞、連日無心許候處、早々快然之由、大慶不過之候、猶追々可申越候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
卯月三日  
家久◎〔花押〕  
〔御判〕

彈正大弼殿

「在包紙」  
彈正大弼殿

家久

「御文庫三番箱五卷中」

(島津家久)  
(花押)

覚

一 今度喜入久右衛門尉・伊勢右京亮を以被仰上候條之内、御支配鬪取ニ不成衆御座候間、賦付ニ御談合之由被仰越候間、其由致言上候之處、御子様達并奥方之御知行之儀、鬪取と被 仰出候上者、一所衆并誰人にて鬪取之沙汰たるへき由、今度被仰出候ニ付、条々 御意之旨被仰遣候事、

一 御分國中此中之支配親疎有之ニ付、被召替候間、今度者惣支配平等ニ可有之義肝要候、後代迄之儀候条、能く被入念可被致沙汰候事、

一 今度被召替候支配之賦、惣並平等ニ候之間、又々幾度被召直候ても、此上之憲法有之ましきと被存候ハ、

今分ニて早々首尾尤候由 御意候、乍去今度其許より被仰上候鬪取ニ不成衆者、賦付ニ談合候由 聞召、とかく可爲鬪取之由達而被 仰出候時者、御支配も可相替候事、

一 御支配親疎於有之者、縦延引候共、賦等被召直、當年之所務者、旧領主致取納、以上免可爲鬪取之事、

一 御子様達之内、又八郎殿御事者、加治木を一所ニ御給候間、惣御高之内三分二を加治木へ被進、殘高者惣並之可爲鬪取之事、

一 式部太輔殿・玄番頭殿・町田出羽守殿・根占安藝守殿御事者、御居所之御知行を近所になされ、中途遠方之御知行ハ可爲鬪取候、知行之割様者諸士可爲同前候、御賦付ニ、御給之知行上中下被引合、可被相賦候事、

一 一所衆者、右 御子様達御同前之可爲御沙汰候、最前如相定候、北郷殿・種子嶋殿儀鬪取ニてハ有之間敷事、

一 奥方之御知行も 御子様之御知行之なミたるへき事、一分限之衆之鬪取ハ、惣並よりハ小割ニ有之候共、分限

役ニ不可有吳儀候由、御意候事、

一老中衆役分之知行も可爲鬮取候、左様候ハ、役分千

斛ツ、五人之分、五所ニ御賦候て、可被成鬮取候事、

一支配ニ付、惣侘一言も被取上聞敷候事、

右之條々、以 御意此許談合相究、被成 御袖判候

之間、此趣能々可被入御念候也、

寛永十一年

卯月四日

伊勢兵部少輔

「此同案写御文庫廿三番箱十八卷中ニあり、其末紙ニ左之如シ」

「甲戌卯月廿五日下午着、菱刈伴右衛門殿  
村田伊左衛門殿被持下候御条書写」

幸便之条一書令啓候、仍喜入久右衛門尉殿上洛ニ、其

許之様子委承候而、満足申事ニ候、殊ニ治十郎殿繁昌被

申候由、大慶ニ存候、弥各御兩所ヲ頼存候、兼又七島之

爲替久志之地頭ヲ鎌田(也)政統雲守殿を以被仰付候、今度菱刈

半右衛門尉殿下向ニ、御国元御老中ニも被仰通之由承候、

定而治十郎殿にも可被仰聞せ候間、各以御談合、久志之

役人召寄、彼此御尋被成、治十郎前よりも、無油断物こ

とニ被申付候様ニ、御入魂頼入候、今度御支配ニ付、地

頭所へ知行五拾石ツ、被給之由承及候、左候ハ、治十

郎前よりも、菱刈半右衛門尉殿へ左様成様子被尋、能様

ニ御談合肝要ニ候、遠方ニ而御坐候得共、久志之事ハ、

彼此申能所と承及候、左様成時ハ、治十郎殿・隼人佑殿

かこしまへ被指越候て、菱刈半右衛門殿ニ御相被成、能

様ニ御談合可有候、半右衛門殿□噯にて、彼是御存知

被成候由被仰候、東郷十左衛門殿へも御尋可被成候、巨

細ハ半右衛門殿へも申入候、爲御存知候、恐惶謹言、

寛永十一年甲戌

四月六日

伊地知采女正

重康判

「重康嫡子」重利  
伊地知治十郎殿

上原勘由兵衛尉殿

「重康弟」  
伊地知隼人佑殿御宿所  
「重泰」

707

「国分宮内澤氏文書」

覚

正八幡御神領惣高之内、三分一ハ中途ニ令支配候之間、社家中高拾石迄者中途之知行算用次第ニ相賦、其外小高之衆ヘハ所中にて可有配分候、其故ハ、武士衆百斛已下ハ、前々三分二之地上にて候へとも、御神領者少高迄四分一之地上にして、返地其遺候之間、今度も十石持迄ハ、中途へ可被割付者也、

寛永十一年四月廿三日

高崎伊豆守在判

山田民部少輔在判

澤殿

新納加賀守在判

桑幡殿

留守殿

708

『兒玉氏家藏』

御急故京へも無御立寄、すくに大坂御下之由不懸御目、千萬く御殘多令存候、江戸之御屋敷中、公私共ニ御

無事之由、先以珍重々々存候、以上、

雖指事無御座候、今朝好便一書申入候、爲御使御下國之由、御辛勞無是非候、乍去他所へ御座候様ニハ御座間敷と存候、一咲々々、黄門様京都御滞留中ニハ可爲御上洛候間、其刻可得貴意候、愚拙もいまた存命之様ニハ候得共、老耄御推量可被成候、猶期後音候、恐惶謹言、  
〔寛永十一年〕  
初夏晦  
八文字屋  
閑叟

兒玉筑州様

人々御中

709

「家久公御譜中」

同年五月四日、伊勢貞昌在于江府、贈書於在國之同職島津久慶、同久元・川上久國、專言琉球國高之員數達大樹公之上聞始末之趣、備于書矣、

710

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以三月初之比被仰出候ハ、雅樂頭殿・大炊頭殿・

讃岐守殿此三人にて、十五日ツ、萬事之儀被聞召御披露候へ、三人談合与候へハ、事も延候由被仰出候て、當時者何事をも、其日指ニ御當候御方へ、參候而申候へハ、取次而相談候而被罷居、則時ニ被申入、何事をも不申兼候、目出度儀ニ御座候、今度讃岐守殿御一人ニ琉球之儀申入候も、讚州御請取之日指ニあたり候間、右之様子ニ候、以上、

一書申候、然者琉球之儀御家へ被相付事、先公方普光院御所様之御時代之儀ニ候、然処石田治部少兵亂已後、琉球より御家へ被致無沙汰候ニ付、權現様へ被得上意候而、琉球へ人數被差渡、彼地平均ニ被仰付、其節又從權現様琉球御拝領之由被成御朱印、弥属御幕下候、就其先年被成檢地、十式萬三千四百石餘田帳雖有之、公儀へ未被成御披露候間、自然御沙汰茂可有之時之爲ニ候条、急度被仰上可然之旨致言上候処、尤之由依御意候、琉球知行之高書記、酒井讃岐守殿へ致持參、從上古之様子共、又大閣様之御時、亀井武藏守琉球を被申請、既渡海之

催候處、御家へ相付候筋目を大閣様へ御申候ニ付、被聞<sup>石</sup>及分、如前と相濟候、ケ様之段と細と讚州へ申入候処、則其日被成上聞、翌朝我等を被召寄、公方様爲上意被仰候趣者、琉球之様子初而被聞召入候、先以御當代ニ吳國之知行<sup>石</sup>、高御披露、一段御悦喜ニ思召候、大隅守殿へ尚御直ニ可被成御誕之由候、其首尾ニ候哉、今月朔日被成御出仕候而、御目見相濟、御門外迄御出候処、又可有御參之由候而、御前へ被成御祇候、琉球之儀初而聞召候、御祝着ニ思召之由候而、殊外之御機嫌にて御座候つる、將又讚州我等へ御内談候者、琉球知行之儀、彼地へ如斯之高有之由被仰上迄ニ候哉、又薩摩・大隅之高ニ被相加、御高を可被上との儀ニ候哉、御尋之由候間、則申入候ハ、自然御陳などの時、吳國之知行之軍役等、大儀ニハ可有之候へ共、惣高ニ御加候へハ外聞ニ候、大隅守内々如斯被存之由申入候、一段尤之由被仰候、其後大炊頭殿へケ様之御物語申入候へハ、讚州御披露之時、委被成御聞候、惣高ニ可有御加儀、大炊頭殿御同心

ニ被思召候、當時何ぞ役儀など可被成、御當儀ニ而ハ無

之候、自然之時之御爲ニ候間、高御上り一段尤之由被仰

候間、我等當座ニ申候も、如仰 大閣様以來、終御普請

なども不被仰付候、自然御陳などの時ハ、如何様ニも可

被抽軍役儀ニ候由、申入置候、如此候間、定當 公方様

より御朱印出可申与存事ニ候、自今以後、琉球へも可有

其御心得儀と存候、如何様重而委左様之段、可被成 御

詫候間、先以可被聞召置候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」

五月四日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌(判)

川上將監様

野州様

霜臺様

人々御中

711 諸所之合戦に於て戦功を顕し、政務參與之功勞神妙ニ被

思召依而、 太守家久様より薩摩國伊佐郡黒木村を食邑

トシテ賜ひ、御沙汰候事、

家老

寛永十一年五月八日

島津下野守久元

仝

島津彈正太弼久慶

島津豊後守久賀殿

(本文書ノ文言ニ疑アリ)

712 「家久公御譜中」

同年五月五日之朝、 家光公遣阿部豊後守忠秋於家久櫻

田第、而賜告、時白銀千葉、裕・單衣都百領家久拜戴之、

登 營拜謝如舊蹤矣、

713 「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

一書令啓上候、然者今朝安部豊後守殿 上使ニ而御暇被

成御給候、銀子千枚、裕單物百御拜領候、御仕合無殘所

候、近日可有御上京候、先々御仕合能御暇御給ニ而候、

此等之様子爲可申入、伊集院弥左衛門尉ニ申付候、委儀者重而可申上候、恐惶敬白、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕  
五月五日

三原左衛門佐<sup>○</sup>〔花押〕  
重饒〔判〕

喜入久右衛門尉<sup>○</sup>〔花押〕  
久洪〔判〕

714 「家久公御譜中」

同年同月六日、琉球國在番奉行町田勘解由久則、贈書於高崎伊豆能乘、而告配置勝連島平田増宗一子<sup>出</sup>家隨上命先月二日胥議三司官而已誅斯之、委曲見箇中矣、

川上左近將監様

下野守様

彈正大弼様

参人々御中

▽<sup>◎</sup>  
彈正大弼様

下野守様

川上左近將監様

参

〔末ニ〕  
五月六日江戸より

喜入久右衛門尉  
三原左衛門佐

久洪

715 「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書申入候、仍平田太郎左衛門殿子息出家ニて、琉球之内勝連与申嶋ニ被召置候、今度御成敗之由被仰越ニ付、三司官衆へ談合仕、四月十二日ニ成敗申候、然者乳母一人・小者一人相付候而罷居候、是者何ほとに可被仰付候哉、其元之様ニも渡可申候哉、被得御意、後便ニ無御失念可被仰越候、又道具等被改候日記進上申候間、是又同前ニ可被仰越候、道具者用ニ立物ニ而者無之由、改衆被申候、爲御存知候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕  
五月六日

町田勘解由次官<sup>○</sup>〔花押〕  
久則〔判〕

高崎伊豆守様

參人御中

町田勘解由次官

高崎 殿

久 (則)

琉球ヨリ  
甲戌五月六日ノ狀、但平田太郎左衛門子成敗之儀也、

「御文庫拾八番箱廿七卷中」

以上

追而申入候、

一從琉球表唐へ銀子過分ニ被差渡候儀、近年之御談合にて、始而爲奉行川上又左衛門尉被遣候処、於彼地一段精を入諸事仕様共、神妙ニ候つる由被及 聞召候、ケ様之儀始而被仰付、向後御國之御重寶ニ罷成儀候、殊又左衛門尉儀專可被召仕歳相ニ候条、自今以後者御旅之御供彼是ニ可被召仕候、又息之儀も成人之事情候、面ニ御奉公可被申候、小身にて可難成と思召候間、少分ニ者候へ共、先々今度知行百斛爲御加増可被遣候

由被 仰出候事、

一町田勘解由事數年致在江戸歸國候処、無程又左衛門尉爲替被遣、別而辛勞之儀候、是も父子面ニ御奉公之儀候、就中今度琉球へ被相渡候時分、於中途舟破損候処、別而被入精、御物之銀子過分ニのせ置候を、皆々取上、無吳儀由候、手前之荷物者、悉すたりたる様ニ聞召候、尤如此罷可有之儀候へ共、人ニより御物を致大形ニ、我身を能様ニ仕事多々有之儀候処、ケ様之儀も神妙ニ思召候、是も少身にて御奉公可難續候条、知行百斛御加増可有之由被 仰出候事、

一東郷肥前守事、是も當時御留守、奥方へひと相詰、御奉公被仰付候、藤兵衛尉事者、表方之御奉公仕、是も父子面ニ相勤候可難成候間、毎年米三拾石ツ、可被下由被 仰出候、當時上知行共候時分、如此御扶持被成儀、如何敷様ニ候へ共、無餘儀被召仕衆身上落着候へハ、咲止ニ思召候間、如此 御意之旨候条、以此趣御談合候て可被仰渡候、今度上知行ニ付、知行米ニ



よらす半分ツ、上り候儀者、何も同前之可爲御沙汰候、  
是又爲御存候、恐惶謹言、

五月九日  
伊勢兵部少輔○(花押)  
貞昌(判)

川上將監様

下野守様


彈正大弼様

人々御中

「家久公御譜中」

「正文在川上伴兵衛久置」

觀音經

▽  
  
(便力) 再生敗種爲心腑  
(方使品) 一乘妙行爲眼目  
(安樂行品) 顯本遠壽爲其命  
常住佛性爲咽唯

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五  
(壽力)  
(專數品)  
(普門品)

爾時無盡意菩薩、即從座起偏袒右肩合掌向佛、而作是言、

世尊、觀世音菩薩、以何因緣名觀世音、佛告無盡意菩薩、  
善男子、若有無量百千萬億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音  
菩薩、一心稱名觀世音菩薩、即時觀其音聲皆得解脫  
若有持是觀世音菩薩名者、設入大火火不能燒、由是菩薩  
威神力故、若爲大水所漂、稱其名號即得淺處、若有百千  
萬億衆生、爲求金銀琉璃車乘馬瑙珊瑚琥珀眞珠等寶、入  
於大海、假使黑風吹其船舫、飄墮羅刹鬼國、其中若有乃  
至一人稱觀世音菩薩名者、是諸人等皆得解脫羅刹之難、  
以是因緣名觀世音、

若復有人臨當被害稱觀世音菩薩名者、彼所執刀杖、尋段  
段壞而得解脫、若三千大千國土滿中夜叉羅刹、欲來惱人、  
聞其稱觀世音菩薩名者、是諸惡鬼尙不能以惡眼視之、況  
復加害

設復有人、若有罪若無罪、忤械枷鎖檢繫其身、稱觀世音  
菩薩名者、皆悉斷壞即得解脫、若三千大千國土滿中怨賊、  
有一商主將諸商人、齎持重寶經過險路、其中一人作是唱  
言、諸善男子勿得恐怖、汝等應當一心稱觀世音菩薩名號、

是菩薩能以無畏施於衆生、汝等若稱名者、於此怨賊當得解脫、衆商人聞俱發聲言、南無觀世音菩薩、稱其名故即得解脫、無盡意、觀世音菩薩摩訶薩、威神之力巍巍如是、若有衆生、多於姪欲、常念恭敬觀世音菩薩、便得離欲、若多瞋恚、常念恭敬觀世音菩薩、便得離瞋、若多愚癡常念恭敬觀世音菩薩、便得離癡、無盡意、觀世音菩薩、有如是等大威神力、多所饒益、是故衆生常應心念、

若有女人、設欲求男、禮拜觀世音菩薩、便生福德智慧之男、設欲求女、便生端正有相之女、宿殖德本衆人愛敬、無盡意、觀世音菩薩有如是力、若有衆生、恭敬禮拜觀世音菩薩、福不唐捐、是故衆生、皆應受持觀世音菩薩名號、無盡意、若有人受持六十二億恒河沙菩薩名字、復盡形供養飲食衣服臥具醫藥、於汝意云何、是善男子善女人、功德多不、無盡意言、甚多世尊、佛言、若復有人、受持觀世音菩薩名號、乃至一時禮拜供養、是二人福正等無異、於百千萬億劫不可窮盡、無盡意、受持觀世音菩薩名號、得如是無量無邊福德之利、

無盡意菩薩白佛言、世尊、觀世音菩薩、云何遊此娑婆世界、云何而爲衆生說法、方便之力其事云何、佛告無盡意菩薩、善男子、若有國土衆生應以佛身得度者、觀世音菩薩、即現佛身而爲說法、應以辟支佛身得度者、即現辟支佛身而爲說法、應以聲聞身得度者、即現聲聞身而爲說法、應以梵王身得度者、即現梵王身而爲說法、應以帝釋身得度者、即現帝釋身而爲說法、應以自在天身得度者、即現自在天身而爲說法、應以自在天身得度者、即現自在天身而爲說法、應以毘沙門身得度者、即現毘沙門身而爲說法、應以小王身得度者、即現小王身而爲說法、應以長者身得度者、即現長者身而爲說法、應以居士身得度者、即現居士身而爲說法、應以宰官身得度者、即現宰官身而爲說法、應以婆羅門身得度者、即現婆羅門身而爲說法、應以比丘尼優婆塞優婆夷身得度者、即現比丘比丘尼優婆塞優婆夷身而爲說法、應以長者居士宰官婆羅門婦女身得度者、即現婦女身而爲說法、應以童男童女身得度者、即現童男

童女身而爲說法、應以天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身得度者、卽皆現之而爲說法、應以執金剛神得度者、卽現執金剛神而爲說法、無盡意、是觀世音菩薩、成就如是功德、以種種形遊諸國土、度脫衆生、是故汝等、應當一心供養觀世音菩薩、是觀世音菩薩摩訶薩、於怖畏急難之中、能施無畏、是故此娑婆世界、皆號之爲施無畏者、無盡意菩薩白佛言、世尊、我今當供養觀世音菩薩、卽解頸衆寶珠瓔珞價直百千兩金、而以與之、作是言、仁者、受此法施珍寶瓔珞、時觀世音菩薩不肯受之、無盡意復白觀世音菩薩言、仁者、愍我等故受此瓔珞、爾時佛告觀世音菩薩、當愍此無盡意菩薩及四衆天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等故、受是瓔珞、卽時觀世音菩薩、愍諸四衆及於天龍人非人等、受其瓔珞、分作二分、一分奉釋迦牟尼佛、一分奉多寶佛塔、無盡意、觀世音菩薩、有如是自在神力、遊於娑婆世界、爾時無盡意菩薩、以偈問曰、

世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因緣 名爲觀世音

具足妙相尊	偈答無盡意	汝聽觀音行	善應諸方所
弘誓深如海	歷劫不思議	侍多千億佛	發大清淨願
我爲汝略說	聞名及見身	心念不空過	能滅諸有苦
假使興害意	推落大火坑	念彼觀音力	火坑變成池
或漂流巨海	龍魚諸鬼難	念彼觀音力	波浪不能沒
或在須彌峯	爲人所推墮	念彼觀音力	如日虛空住
或被惡人逐	墮落金剛山	念彼觀音力	不能損一毛
或值怨賊繞	各執刀加害	念彼觀音力	咸卽起慈心
或遭王難苦	臨刑欲壽終	念彼觀音力	刀尋段段壞
或囚禁枷鎖	手足被杻械	念彼觀音力	釋然得解脫
呪咀諸毒藥	所欲害身者	念彼觀音力	還著於本人
或遇惡羅刹	毒龍諸鬼等	念彼觀音力	時悉不敢害
若惡獸圍遶	利牙爪可怖	念彼觀音力	疾走無邊方
虵蛇及蝮蠍	毒毒煙火燃	念彼觀音力	尋聲自迴去
雲雷鼓掣電	降雹澍大雨	念彼觀音力	應時得消散
衆生彼困厄	無量苦逼身	觀音妙智力	能救世間苦
具足神通力	廣修智方便	十方諸國土	無利不現身

「全上」

種種諸惡趣 地獄鬼畜生 生老病死苦 以漸悉令滅  
 眞觀清淨觀 廣大智慧觀 悲觀及慈觀 常願常瞻仰  
 無垢清淨光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間  
 悲體戒雷震 慈意妙大雲 澍甘露法雨 滅除煩惱焰  
 諍訟經官處 怖畏軍陣中 念彼觀音力 衆怨悉退散  
 妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念  
 念念勿生疑 觀世音淨聖 於苦惱死厄 能爲作依怙  
 具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故應頂禮

爾時持地菩薩卽從座起、前白佛言、世尊、若有衆生、聞  
 是觀世音菩薩品自在之業普門示現神通力者、當知是人功  
 德不少、佛說是普門品時、衆中八萬四千衆生、皆發無等  
 等阿耨多羅三藐三菩提心

(島津家久譜ニヨリ補フ)

寛永十一年 甲戌 五月十三日

中納言家久 ○ (印)

「雜抄」

覺

○同年中夏家久命三男式部太輔久直、使妻北鄉出雲守忠  
 亮姉以爲忠亮後嗣、是忠亮去年十一月於江府卒故也矣、  
 ○家久賜告之後與嫡男又三郎忠元、共先 大樹公辭 日不傳  
中夏下旬 江府、而入 日不傳、稽 洛陽木之下宅、時家老伊勢  
之比乎 貞昌一人供奉、故家久將發江都以前徵島津久元於本邦、  
 可參會于京師旨有貴命矣、

與方御知行高千石方七百斛・六百斛迄者、諸人并半分  
 之御上地たるへき事、

- 一同高五百石者式百石之可爲御上地事、
- 一同高三百石より下之御衆ハ上地有之間敷事、
- 一刑部太輔殿御事ハ餘少地ニ御座候間、上地無之候而、
- 一御袋様御存生之内者、御衣裳御合力可有之事、
- 一桂長千代殿・伊集院松千代殿御事、是茂少高ニ而御座
- 候間、上地無之候而、御衣裳御賄等少茂 公儀之御物

等不入様ニ、御私ニ而諸事御調可有之候事、

一根占安千代殿今度御上地候而、殘地千石ニて、御衣裳

御賄等少茂 公儀之御物不入様ニ、私ニ而諸事可有御

調事、

一御臺所向之嶋伊勢鶴殿御懷、當時之切米五拾石被遣候、

是を當知行之高百石ニ付三拾式石賦ニシテ、高百五拾

六石ニ而候間、御加増四拾石被相加、二百石之都合

ニ而可有支配事、

一中西長門守知行此中之所其儘被遣、高千石ニ不足候ハ

、近所之名ニ而可被賦事、

一福昌寺談儀所座主日新公、南林寺・新田・妙圓寺・妙

國寺・霧島・開聞・正八幡・二之宮・興國寺・此外ニ

茂無餘儀寺社家之知行、當時之儘ニ而可被召置、修理等

ニ御物不入様ニ候而、寺役ニ被相調出、供田之外社人

之給地者諸士並可爲上地事、

右者戌五月、從江戸澁谷四郎左衛門殿・児玉筑後守

殿ニ而被 仰出候、以上、

寛永十一年五月廿日

左近將監印

下野守印

彈正大弼印

高崎伊豆守殿

山田民部少輔殿

新納加賀守殿

720 (本文書ハ七一九号文書ノ抄ニツキ省略ス)

721 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

一書申候、然者其地配當之義、下野守上洛候間、兩人能

く、談合簡要候、雖不及申候、支配者永々之儀候条、親

疎無之様憲法之沙汰專一候、尚様子共於有之者、重而此

方へ可被相達候、謹言、

「朱カキ」五月廿八日

川上左近將監殿

彈正大弼殿

家久判〔花押〕

「寛永十一年ト紙札アリ」

722

「御文庫廿三番箱十九卷中」

「写也  
家久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆致啓達候、

一從吳國伴天連をのせ渡ましき事、

一日本人吳國へ渡す間敷事、

一吳國ニ在之日本人のせ來間敷事、

一日本之武具吳國へ渡す間敷事、

一吳國船ニ積來候系之儀、去年如被 仰出候、長崎ニ而

祢段相究候而之上、御領分入津之船商賣之儀可被申付

事、

右之通御意候間、可被得其意候、委曲榊原飛彈守・

神尾内記可爲演説候、恐と謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」甲戌

五月廿九日

酒井讚岐守

忠勝判

酒井雅楽頭

忠世判

薩厂中納言殿  
人と御中

723

「御文庫拾八番箱三拾二卷中」

天爵靈社起請文前書之事

一乍恐申上候、光久様自然之御時者二世迄之御供可申

上候事、

一忝被召任被下候条、随分入念御奉公可申上候事、

一我等無調法者之儀ニ御座候間、自然被掠聞召候儀御座

候ハ、被遂糺明可被下候事、

▽◎ 右之條と於偽申上者

靈社上卷起請文事

謹請敬供、再拜と、夫惟年号寛永十一年甲戌月並者十

三月日數三百八十余ケ日、撰吉日良辰而、致信心誠白、

諸衆等、謹奉勸請、掛忝上者梵天 帝釋 四大天王 豹

尾 黄幡 歳徳神 釈迦善逝 釋提桓因 奉宿劫、四天

八天 十二天 二十天王 三十三天 十二神將 七千夜

又 廿八部第六天魔王 聖主 天之廿八宿地之二十六禽

百億須弥 百億梵天帝釋 百億鐵圍山 百億閻魔法王  
諸天 百億天衆 百億天人 百億天女 百億童子 百億  
大力夜叉 百億惡鬼 百億天上 百億閻浮提中所顯現之  
大小神祇、上者有頂天、下者到金輪際而佛神、皆悉驚白  
言、堅牢地神 八海所接龍王衆 十王十勢俱生神 太山  
府君 司命司祿 冥官冥衆 有情無情 辰星 南斗 北  
斗星 日曜星 破軍星 羅喉星 計都星 巨文星 明星  
七夕星 八葉星 本命星 四方四佛 五方五佛 大聖摩  
利支尊天 太白神 太歲神 八諸神 十二月將神 天葬  
神 地葬神 阿豆知神 天神 地神 海神 木神 火神  
金神 水神 風神 諸佛諸菩薩 諸善神 東方降三世明  
王 南方軍荼利夜叉明王 西方大威德夜叉明王 北方金  
剛夜叉明王 中王不動明王 大黑尊天 毘沙門天王 大  
弁財天女 宇賀神 十五童子 三寶荒神 多婆羅天王  
武答天神 頗梨采女 地毒氣神王 八王子 八万四千六  
百五十餘神 金剛界七百余尊 胎藏界五百余尊 金剛藏  
王 毘蛇帝王 大聖金剛童子 普天率土愛染明王 妙見

菩薩 過去現在未來三世諸佛 一万八千軍神 二万八千  
軍神 三万八千軍神 四万八千軍神 五万八千軍神 六  
万八千軍神 七万八千軍神 八万八千軍神 九万八千軍  
神 十万八千軍神 二千八百師天童子 一万燈明佛 二  
万燈明佛 三万燈明佛 藥師如來 寶生如來 無量壽佛  
微妙身如來 文殊 普賢 觀音 勢至 十六善神 八万  
四千夜叉神 忝日城崇廟天照皇太神宮 內宮 四十末社  
外宮 八十末社 風宮 諸末社 八万大菩薩 春日大明  
神 王城鎮守山王廿一社 醍醐根本尊師 立塔諸堂諸坊  
諸本尊薩埵 祇園牛頭天王 松尾大明神 平野大明神  
吉田 立田 勢田 大原大明神 稻荷大明神 北野天神  
賀茂下上大明神 貴布祢大明神 三輪大明神 住吉大明  
神 三十番神 愛宕四所大權現 熊野三所大權現 十二  
所權現 九十九所權現 廣田大明神 金峯山權現 吉備  
宮大明神 對馬天王 羽黑山大權現 葛城大權現 峯々  
藏王權現 子守勝手兩大明神 梅宮大明神 法花廿八品  
三藏法師 鞍馬毘沙門天王 吉祥天女 雨寶童子 關東

守護神 伊豆箱根兩所大權現 三嶋大明神 鹿嶋大明神  
 富士權現 白山妙理權現 立山大菩薩 (訪カ) 諏方大明神 出  
 雲大社大明神 多賀大明神 御靈八所大明神、殊者氏神、  
 摠者大日本國中六十六ヶ国大社 二千小社 五百九十二  
 所大小神祇等 地藏菩薩 陀羅尼菩薩 龍樹菩薩 虚空  
 藏菩薩 梅檀香菩薩 大病神 八万四千鬼神 大恩神  
 歲破神 天蘇神 大疫神 大歲神 夜氣夜叉神 妙鬼神  
 六百五十余神 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天王 天狗  
 太郎房眷屬 九億四万三千四百九十余神 善貳師童子  
 八所大明神 善害坊 次郎坊 八万四千眷屬 飯繩大明  
 神 四万一千眷屬 大天魔三万三千 小天狗三万三千眷  
 屬 智羅天狗 八天狗等、日域中山山峯と嶽と所居住之  
 大天狗少天狗等、合作群集而正路之旨照鑑給、若偽心於  
 在之者、立處受白黒癩之重病、八万四千毛吼、四十二之  
 骨節、日々夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加悉盡、  
 佛神三寶雖作祈願、不可叶、於後世者、墮八寒八熱阿鼻  
 无間大地獄、到未來永劫不可有浮期者也、仍靈社上卷起

請文如件、△

寛永十一年 戊 歲五月  
「甲戌也」

平瀬恕兵衛尉(花押)  
 氏清(判)

724

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々此度ハ御心静ニ御座なされ、忝奉存候、只今御  
 嘉定半にて、如何申上候、能様可被仰上候、

尊書忝拜見仕候、今度者私宅へ被成光儀候、外聞誠以忝  
 奉存候、殊被下御使預御音信、過分至極頂戴仕候、則今  
 日參上申御札可申上候處、不私御用御座故、御無沙汰仕  
 候、次矢しるしの事被仰聞候、涯分撰申可申上候、旁祇  
 候仕御札可申之旨、可然様可預御披露候、恐々謹言、

友枕齋(花押)  
「朱カキ」  
「寛永十一年」  
 六月十六日  
如「判」

伊勢兵部少輔殿

725

「御譜中」



伊勢兵部少輔殿

727 「雜抄」

伊地知左右衛門殿舍弟弥右衛門尉殿事、羽月嘜衆として被召移候、前ニ知行式拾石可被遣由被仰出候へ共、小林嘜衆江三拾石被遣候、其并ニ可被仰付之通左右衛門殿申分ニ付、久永吉右衛門尉殿下向之節、高三拾石弥右衛門尉殿江可遣由京都方被仰下候、如其高直支配有へき者也、

寛永十一年六月廿九日

左近將監印

彈正太弼印

下野守印

高奉行

肥後長次郎殿

御支配奉行

高崎伊豆守殿

同

山田民部少輔殿

同

新納加賀守殿

728

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

綱久  
女子於滿

寛永十一年甲戌六月十六日誕生於江戸、母同前、

日州佐土原城主島津右馬頭久雄室

女子

於辰

島津美作久憲室

726

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶と爰許相替儀無御座候、御用之儀被仰付候様ニ御

取成所仰候、

照高院様 新宮様へ被成御音信候、則披露仕候、照門様可被成御返事由被仰候処、以之外御煩にて正躰茂無御座候間、只今不被仰下候、從新宮様被成御返事候、猶自我等能く可申入之由御意候、此旨可被申入候、恐く謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」

六月廿六日

友枕齋

如「判」(花押)

以上

貴札拜見忝候、中納言様・忠元様海道御無事ニ御京着、誠々御大慶奉察候、左兵衛佑も定而頃者京着可申と存事候、可易貴慮候、公方様江戸御出馬、去月廿日比之由、被仰知忝奉存候、此地ニも必六月廿日ニ江戸御立之様ニ奉承及候、相易儀者從是可得貴意候、將又於此地玆敷琉球酒大壺一ツ、別而過分至極ニ存候、猶御使者得御意候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十年」  
七月四日

相良清兵衛尉（花押）  
頼兄（判）

川上左近將監様

嶋津彈正様

嶋津下野守様

貴報

「末ニ」  
寛永十一年七月七日

使 （市カ）  
□來五兵衛

封

729

「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置家臣川上太郎左衛門」

返々かハる事御座候ハす候、やかて又申候へく候  
く、かしく、

こ、元まいり候とて、せうそこ昨日五日たうらい、まん  
そく申候、うへさまもやかて御つきにて、後の七月ハ御  
いとまもいて候するよし申候ま、やかてくたり可申候、  
式もしもたに山に御入候よし、玄もしハ、しけく見ま  
いにこし候て、よく候する申候へく候、又くかしく、

七月六日

ひかし

京より

むもし

いゑ久

まゐる

730

「正文在島津筑後忠置」

北郷跡職之儀申越候處、爲祝儀到遠路使者、殊太刀一腰、  
馬代銀三十枚、欣悦之至候、從是も爲使伊東二右衛門尉  
指下候、仍樽一荷并肴・帷子二・肩巾袴二具贈進候、秋  
（肩衣袴）

中ニ者御暇給可致歸國候之条、萬賀期其節候、謹言、  
〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕七月六日 家久〔御判〕  
◎〔花押〕

北郷式部太輔殿

731 「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尊書忝拜見仕候、

一小袖しほの事、町ニ仕者可有御座候、於様子者、一和  
ニ具申候、

一紙のうらおもての事、はたのよく御座候方おもてにて  
可有御座候、はたのあらしき方ニ、當時本あみなど物を  
かき申由候、とかくはたのよき方おもてにて御座候、  
御門跡様へ得御意におよひ不申候、何も明日令伺公可  
申上候様可被仰入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕七月六日

友枕齋  
◎〔花押〕  
如〔判〕

伊勢兵部少輔殿

732 「家久公御譜中」

同年七月十一日

大樹家光公經歷東海道而入二條營矣、

733 「正文在島津内膳久兵」

やかてくたり候へく候ま、くハしき事又とかしく、

御せうそこのやうす、いせ丸なかくのはつらいにて候、

いろくやうしやうのよし候へとも、いまに然くとも

御さ候へて、無心元候、其方御そくさいのよし、めて度

〔本マ〕  
帯まいらせ候、こゝ元かハる事御入候へぬま、御心や

すかるへく候、又とかしく、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕七月十二日 京より

〔帖佐〕  
ちうきにて、いゑ久  
まいる返事

734 「正文在伊集院十右衛門忠覺」

くろかミのゆにて候や、いかゝと思給候、きやうたい  
もそくさいのよし、まんそくこの事候、又とかしく、

此たひのたうらいに、こゝち然くとも御入候ハぬよし  
うけ給候、せんとすちこゝろにて候まゝ、ゆにいりたき  
のよし、さやうに御入候てよく候するよし申候つる、其  
とをりに尤候、其元よりほとなく御入候まゝ、一たんの  
事に候、さためてくすりものミ候らんと思ひ候、なを此  
人へ申候、又くかしく、

『寛永十一年』  
七月十二日 京より

むかふ嶋殿 まいる  
いゑ久

735 (本文書ハ七一九号文書ノ抄ニツキ省略ス)

736 寛永十一年甲戌入來院石見守重高上櫻田邸、使東郷  
三右衛門歸於入來、乃賜家老重借等三人手書、

737 『入來院氏家臣入來院直記家藏』

已上

東郷内膳正・本田九兵衛尉所へ之書面細く令披見、其地

御無事之由、先以喜悅候、御支配之儀も未致落着候哉、  
定於京都可爲御議定候間、東郷三右衛門尉爲使此度差下  
候様子者、以條書申遣候、委細之通者口上ニ可申達候、  
其許時分雖如何ニ候、公儀之出銀過分ニ就被仰付、私  
領之支配可申付候間、急度從當毛可被申付候、一涯被入  
精可致首尾様ニ可有校量候、配當衆之儀者以別紙申越候  
条、慥ニ可被申付候、乍重言、御借銀過分ニ相増、諸侍  
知行上地可有之候御沙汰共候間、爰元無人雖事闕候、遮  
而使申付候、何も堪忍難成躰ニ可罷成事、笑止存候、然  
共御分國并之儀候間、右之通無延引可被申調候、猶口上  
ニ申合候間、不能詳候、謹言、

『寛永十一年甲戌』  
七月十一日 入來院石見守 重高(花押)

入來院左兵衛尉殿  
宮里治部左衛門尉殿  
東郷吉兵衛尉殿

738 「家久公御譜中」

同年七月十四日、酒井忠勝・土井利勝奉 鈞命、贈連署之奉書於家久曰、來十八日 大榎公參内、如以前、衣冠而可參候四足之御門云云、且十七日又贈小牘曰、明日之曙候四足門、自此可供奉旨所示諭也矣、

739 「下野守久元譜中」

寛永十一年甲戌七月進發、同十三年丙子六月歸國也、

740 來十八日可被成御參、内之旨被仰出候、然ハ衣冠ニ而如此以前、四足之御門迄被參尤候、恐々謹言、

「寛永十一年」

七月十四日

酒井讚岐守 忠勝◎(花押)在判

土井大炊頭 利勝◎(花押)在判

薩摩

中納言殿

人と御中

▽◎

薩摩 中納言殿

土井大炊頭 酒井讚岐守

△

741 「正文在文庫」△

明日者日出ニ

禁裏四足之御門通被參可有供奉候、已上、

「寛十一年」

七月十七日

薩摩

中納言殿

「此二通共家久公御譜中ニ在リ」

742 「真本見玉氏家藏」

返々長々敷事迷惑仕候得共、是ハ貴様迄之御内證ニ候、拙子慮外不存通奉頼存候、せめて他方之下手ニ罷成度存候、返すく、

今朝者得貴意、先以辱奉存候、廿四日ニ者必々可罷立候間、「利昌子」四郎兵衛殿迄御用等於有之者、可被仰下候、罷登候刻も御狀預罷越候間、御狀被遣候ハ、可被下候、一此中内々國分民部少輔殿頼入、御内證共奉頼候一儀御座候つる、定而此間之御取紛ニ、未左様之儀茂在之間敷存候、右如申上候、近日下國仕候故、何共心中迷惑仕候、此度諸士同前ニ知行も高ニ仕候得ハ、八拾石被召上同前ニ候、數年御國御奉公仕、如御覽被成候、子供餘多持申、なましひニ能子被仕候ヘハ、三人共ニ出座仕候ヘハ、三人御奉公仕候故、下地身上難成上ニ何共迷惑仕候間、御侘茂仕度存候得共、新座ニハ候得共、別而辱御詞被下候處、左様之儀を奉戴、欲心ニ又々御侘申上など、被思食候得ハ、無念奉存、謹而罷在候而、誠ニ罷成時迄と存勘忍仕候、此度之御配當之様子茂餘迷惑成被仰付様故、せめて此度拜領之知行、諸士同前ニ存申上候處、早御配當相濟申候故、御藏入之内ニ而替被成可被下旨被 仰出候条、正月廿八日右右之通申

上候得共、事果不申、漸及三月中旬宮之浦被下候得共、竿茂此度之竿者役ニ立不申、手竿正ニ罷成、荒地三拾石餘御座候、是を茂拔可被下事不罷成由承候、知行上地ニ替可被下旨 公儀者被 仰出、結句荒地を迄入可被下事迷惑ニ存、他方ニ而被下申様ニと申上候處、大方望申候へと承候間、謹前書物を以申上候時も、山一圓無之、長木一本茂御手形にと申上候事、迷惑ニ存候由申上候故、北山村知行者山田之由承候得ハ、少々材木茂心安可仕哉存、北山村ニ而三百八拾石之所被下候得と申上候、前ニ無吳儀被下候、相殘所遠方ニ而可被下旨承候間、拙子申候ハ、不案内間又人を遣承合申内、日數延、三月中ニハ上洛茂不罷成候、近キ所ニ似合候所をと申候ヘ共、事果不申ニ付而承合候ヘハ、上伊敷鹿府衆配當ニ罷成、七百石餘相殘有之由傳承候間、彼所ハ今朝人を遣候得ハ、晚ニハ罷歸處ニ候、被下候者承合候而拝領仕度段、申上候得ハ、殊之外御談合爲有之由傳承候、宮之浦物成茂上伊敷物成同前候、近所ニ

御藏入之所山無之、伊敷を替宮之浦御藏入ニ被成候へハ、公儀之御爲ニハ増申との御談合を以、伊敷拙子へ被下候処、此方へ如何申來候哉らん、又於此方御にくミ被成候、御方ヲ被仰候哉、六ツ敷申、殊伊敷前代より配當ニ參たる儀茂無之処、愚拙むりニ望拝領仕候由承候、此段返々迷惑仕候、上伊敷諸士配當ニ被成候儀、去年相定、皆々早一毛知行被仕候、拙子ハ當年三月ニ被下、未取納茂不仕候、是が前代拙子初而望申候哉、如此迷惑成を被仰掛候、公儀ニ而承候ハ、口を持申候而可申開儀候へ共、内々ニ而被仰上候故、可仕様無之候、黃門様御耳ニ立、拙子欲心ニふけり、辱被召仕候を奉戴、公儀へも申度儘ニ申候様可被思召事、迷惑仕候、又たとひ千石之知行半成御座候所を被下候『千解』、越中守殿御内之太夫下手同前之御扶持候、漸三百式拾石被下候而茂、他方之下手程ニも及不申候処、剩拙子不義を申様ニ被仰上事無念至極奉存候、辱被召仕ニあまへ申、又々申上など、被思食候得へと存候而、

743

勘忍仕、此中御侘茂御目を被下、忝存不申上候、他方之儀を乍御存、如此爲躰候、御内を被下仁へハ、親子分くニ御扶持被成候仁茂御座候、諸人存候前候、皆御恨ニ奉存ながら、謹而罷在躰候、乍去拙子心中如在、不存候通、一言被達 上聞、胸をはらし歸國仕度候間、偏ニ奉頼存候、御六ツ敷儀乍存候得共、萬々御芳志奉頼存候、恐惶謹言、

『寛永十一年』  
七月十九日 中西長門守 秀長（花押）

『時在京師』  
兄玉筑州様 參人と御中

『写兒玉氏藏』

從 黃門様爲御使吉田次郎兵衛殿被罷下候間、一書令啓候、

『七月』  
『家久公』  
『光久公』  
一 一昨十八日御參内御座候而、薩州様始而 禁中江被成御參、目出度奉存候、明廿一日 御城江御能御坐候、近日亦大坂江 御成之由候、如此候ハ、聽而御隙明

可爲還御との、取沙汰仕候事、

一於其元被成御談合、御借銀返濟之儀ニ付、諸士知行之儀御國江被仰遣候、其御返事渋谷四郎左衛門殿・兎玉筑後守殿、被罷登候而、被申上候、於御國茂皆と談合被申、重と被申上候内ニ、夫婦にて在江戸之衆、御賦方ニ銀子入申候間、先此節者町田駿河守殿・我等兩人ハ從最前御供申候間、此□ニ而被召置、其後被召寄候衆女房歸國被仰付尤之由候間、上聞候処ニ、諸事改儀候間、ケ様ニ可有之旨被仰出候、委細者御國江被仰遣候条、書之帳面有之儀候間、以其趣一と可被仰達候、誠ニ此節ハ腰之刀を活却ニ而成共、御用可被立時節候間、如何様ニも候而、堪忍尤之由可被仰渡候、鹿兒嶋衆ニも、知行上之上ニ、刀ニ付置候金具をはつし、可致進上之由被申上候衆、出立ニ而參候、一段被成御感事候、下と少シたくハへ共候衆も、成次第少ツ、成共銀子借上可申之由、内と申之由候、誠ニ御譜代之御國ニ而候故、如此候儀感入候、少も迷惑がりにて無之由

候、奇特成との申事候、

一御借銀ハ八千貫目餘成候、上知行にても漸利御なし候而、少本銀御なし候やうなる御算用ニ候、心安夜をも寝可申事ニて無之候、諸事確氣を替候而、此中朝夕汁を添候を、塩ニ而たへ候程之心持にて無之候ハ、調間敷と存候、能く其元之衆江茂以此心得可被仰達候、恐惶謹言、

寛永十一甲戌

七月廿日

鎌田出雲守様

人々御中

伊勢兵部少輔 貞昌判

744 請取

焼酒壺式ツ内六拾盃入卷ツ

右同入卷ツ

右者慥ニ請取御藏へ入置申候、

『寛永十一年』

『甲』 戊閏七月廿一日

宇都長兵衛 (花押)  
宮里右京亮 (花押)



児玉筑後守殿

長田藤左衛門(花押)

745

「御文庫廿三番箱十九卷中写也」「家久公御譜中ニ在リ」

今度古田兵部少輔家來不儀有之候而、令死罪之處、彼妻  
子於在所聞之欠落候、右之通及 上聞可尋出旨被 仰出  
候ニ付、兵部少輔家中之輩、諸國在く所くへ相廻候間、  
見出之聞出之届於有之者、急度捕之可相渡者也、

「宋カキ」  
「寛永十一年」

戊七月廿三日

阿部豊後守

忠秋在判

阿部對馬守

重次在判

松平伊豆守

信綱在判

諸國在く所く

御領内

746

「雜抄」

覺

747

「御文庫廿三番箱十九卷中写」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一今度在く所く御領・私領共に、侍分之浪人在之者、具  
相尋住所并名を書付、可指上之旨被 仰出候、浪人氣  
遣成儀にてハ少茂無之候、此已前何方ニ罷在、何と申  
浪人何程在之との御尋候、又主人構なく有付度者ハ、  
其身心得次第有付可申者也、

戊七月廿八日

右者御上洛之節於京都被 仰出之、

去月廿三日之御狀令披見候、

一五月廿六日ニ御領分あぐねへおり申候唐人式人被差  
越、則穿鑿仕候事、

一去年曾我又左衛門尉殿・今村傳四郎殿預置被申候唐人  
五人、右之同類七人御越穿鑿申候、其外三人之内一人  
ハ病死、式人ハ走り候て、行急しれ不申候由承届候事、  
一御領分片浦へ去年入津仕候唐船、不審成儀御坐候間、

爰元ニて致穿鑿候へ之由候て、其船頭一人・脇船頭壹

人被差越候、此方ニて穿鑿仕ルニ不及候間、於其地被

遂御穿鑿尤ニ存候、右之段々御使者へ口上ニ申入候間、

不能詳候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
寛永十一年

閏七月朔日

神尾内記

元勝判

榊原飛彈守

職直判

嶋津彈正

〔張紙ニ〕  
於鹿兒嶋御せんさく被成候へとも、は(八橋)ハ八不仕由申候、脇ニ爲存者  
無之候間、不相知申候、

748

〔家久公御譜中〕

寛永十一年甲戌閏七月二日、酒井忠勝・土井利勝報家久

曰、球王因繼續可奉拜 大樹旨家久預、雖令球王、渠酷

病心身不快、故子息佐敷王子・舍弟金武按司及玉城來著

在近、達 高聽、則有於京師可被受拜禮之 鈞命、而至

同月九日、琉使可奉拜謁 台顏旨、忠勝・利勝奉 台命、

又所傳達也矢、

749

〔古御文書三十一卷中十一番箱〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

兩通之貴札令拜見候、然者琉球之國主御代替付而、公

方様江御礼被申上候様ニと思召、兼日被仰遣候處、當國

主煩ニ付、子息并國守舍弟近日來着之由承候、御書中之

通達 上聞候處、則於京都御礼可爲請之旨被仰出候間、

其御心得尤候、恐々謹言、

〔朱力キ〕  
寛永十一年 閏七月二日

酒井讀岐守

忠勝判(花押)

土井大炊頭

利勝判(花押)

薩

中納言殿

貴報

▽◎

薩摩

中納言殿

土井大炊頭

「古御文書三拾卷卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

琉球衆之 御目見明日四時分と被 仰出候、上様御長袴ニ而可有御座候間、其御心得候而御登城尤候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十一年」  
閏七月八日

土井大炊頭◎（花押）  
利勝判

酒井讚岐守◎（花押）  
忠勝判

松平大隅守殿  
人々御中

▽◎  
松平大隅守殿  
人々御中

土井大炊頭  
酒井讚岐守  
△

「家久公御譜中」

同年同月十六日、大樹家光公以薩隅并日州諸縣郡及

薩  
中納言殿  
人々御中

琉球國宜全領知之 御判物日付八月四日也、憶預賜家久  
矣、所書置、先賜之乎

○同年同月十七日、安藤右京進重長、内藤伊賀守忠重・

永井信濃守尚政贈連署之奉書此書昨所於家久曰、就今

般 御判物頂戴、領内鄉村之高細記以可獻、因家久命

久元・貞昌、而翌日達在國之家老、備于書矣、

「御文庫廿三番箱十九卷中写」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々此趣就 上意申入候、已上、

今度 御朱印御頂戴付而、御領分鄉村之高辻具被注付、  
出來次第可有御上候、爲其如此候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十一年」  
閏七月十六日  
安藤右京進 重長判

内藤伊賀守 忠重判  
永井信濃守 尚政判

「御文庫拾八番箱廿七卷中」家久公御譜中ニ在リ

一書令啓候、然者一昨十六日御國兩國并日向之内一郡琉球國迄之儀、全可有御領知之由、御直判御頂戴候、就夫又昨日御奉行中より御狀被遣之、御分國之郷村高具ニ被付驗可有御上之由候間、於爰元不罷成候条、則御國へ被仰遣、檢地帳を以被相記、可有御進上之由被成御返事候、最前石田治部少輔殿衆ニ而させられ候檢地帳、可有之候哉、先年はや一通御當代ニ被成御上候、それハ駿河へ上り申たると覚申候、其時之帳定而江戸へ可有之候、左様成ニ御引合候而、違候ハん様ニ可有御沙汰候、先年駿河へ御上候帳之調やう、爲被存衆可有之候条、可有御尋候、随分被入御念早々出来候様ニ可被仰付候、將亦御奉行衆之御狀写遣申候、可有御覽候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
閏七月十八日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌(判)

下野守

久元◎(花押)  
(判)

川上將監様

彈正大弼様

人々御中

彈正大弼様

久元

川上將監様



參

下野守

伊勢兵部少輔

一從 公方様御朱印御拜領之事、

一御國琉球迄之高目錄公儀へ可有御上事、

一永井信濃殿、安藤右京殿、佐藤伊賀守殿御狀之写相添

參候事、但京都王七月十八日打立候、送者衆同廿九日

寅刻持下候、

「家久公御譜中」

同年同月二十日、家久於京師賜暇、即日發京師而赴于

本邦矣 供奉之家老姓名亦不傳、  
伊勢貞昌暫留于京師矣

○同年同月二十八日、島津久元・伊勢貞昌、以連署書告

島津久慶・川上久國、今月二十三日江都城 西丸有火、悉焼失、因旃至御年寄被言此事可也、且言貞昌今日降于大坂、

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度致言上候、然者江戸 西之丸今月廿三日火事出來申迷致焼却候、此由以早使御年寄衆迄被仰上尤候、兵部少輔事此中大坂へ被爲 成、船之往還不罷成ニ付、今日還御候間、則打立申候、此旨可然様ニ可預御披露候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」

閏七月廿八日

伊勢兵部少輔（花押）  
貞昌（判）

下野守

久元（花押）  
久元（判）

彈正大弼殿

川上左近將監殿

彈正大弼殿

久元

川上左近將監殿



下野守

伊勢兵部少輔

甲戌壬七月廿八日京都ノ状八月十日ニ御道具衆持下候、但江戸西之丸壬七月廿三日ニ火事出來申候儀也、

「家久公御譜中ニ在リ」

薩摩、大隅兩國并日向國諸縣郡都合六拾万五千石余目録在別紙、此外琉球國拾貳万三千七百石事全可有領知之状如件、

寛永十一年八月四日

家光（花押）

薩摩

中納言殿

「家久公御譜中」

同年八月十四日、長崎御奉行榊原飛彈守職直（彈）・神尾内記元勝投書於家久家老中曰、有訴人言覺府有入滿、因兩人

遣之宜穿鑿、既而潛居西田町人吉兵衛者宅入滿及亭主吉兵衛同其子三右衛門共三人捕之、如崎陽、使警固護送彼地、宣水問、則於覺府、未知南蠻宗旨者六人白之、其交名如別記、而吉兵父子於長崎行同罪、吉兵妻於當國行火罪、如幼稚子家僕者、被宥赦之矣、

758

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

▽◎  
以上

一筆令啓達候、其元ニ入滿有之由訴人申ニ付而、兩人もの差添遣候、此者共申次第穿鑿之儀、無油断可被申付候、入滿穿鑿之外私成儀於有之者、此者共其地ニ被留置、爰元へ可被申越候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
八月十四日

神尾内記

元勝◎判◎  
判◎

神原飛驒守◎  
職直判

職直判

松平大隅守殿

老中

松平大隅守殿

神原飛驒守

老中

神尾内記

長崎方

759

(本文書ハ七六三号文書ト同文ニツキ省略ス)

760 栗野之内

知行名寄目錄

合規大ツ九表一升八合

高ニシテ三石三斗

寛永十一年八月十五日

阿多掃部助印

内田主馬首殿

761

「家久公御譜中」

同年八月中旬家久還日及從駕之家老姓名不傳覺城矣、

762 「御文庫三番箱五卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一西田町へ入滿隱居候を、從長崎被聞付候て、今朝彼使

衆即とらへられ候事、

一彼亭主吉兵衛事被捕候て、水せめニて殊外稠彼使衆被

問候事、

一右之入滿亭主吉兵衛同子源右衛門三人之事、長崎へ可

被送届由被申候事、

一入滿事當所へ五六年罷居候由、使之衆被申候事、

一當所へ此内不相知南蛮宗之者六人、水せめ之時申出候

事、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
八月十八日 戌

763 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

草野九郎兵衛殿

岡安伊右衛門殿

奈良崎十右衛門殿

宮墻九左衛門殿

神田六大夫殿

赤木長右衛門殿

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
八月十八日

764 「家久公御譜中」

同年同月二十二日、榊原職直・神尾元勝報家久曰、從今

年薩領内應禁遏異國船著岸之旨有 台命、宜奉得其意云

云、

765 「古御文書三十一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御使札忝拜見仕候、然者於上方御仕合能此中御歸國被成、

緩くと御休息被遊候由、珍重奉存候、隨而爰元別条無御

座候、將又從當年御領分江吳國船着岸之儀、弥御法度ニ

被仰付候旨、奉得其意候、御分國へ唐船六艘致入津候間、

當地へ御廻之由、從御家老中被仰越候、右六艘之内壹艘

者先日此表へ致着岸候、か、やん出之舟貳艘、御使者被

差添、昨日入津仕候、殘而三艘之船未爰元へ不致參着候、

其段御使者へも申入候、猶期後音之節候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
〔寛永十一年〕

八月廿二日

神尾内記

◎元勝〔花押〕  
〔判〕

榊原飛彈守

◎職直〔花押〕  
〔判〕

松大隅守様

尊報

766 「正文在高岡浦名石城山西福寺」

御免屋敷目録

屋敷五畦八歩 糶・大豆壹俵五升

高ニシテ四斗壹升六合

右屋敷之事、此度雖被載御檢地帳、住持上方江被罷上、  
就御洩、令免許早、寺役掃除等無緩疎可被相守者也、

御支配所印

寛永十一年

高崎伊豆守印

八月廿四日

山田民部少輔印

新納加賀守印

西福寺

貫明存忠公庵主尊牌

右御尊牌當寺江奉安置候様子ハ、當寺御免地ニ而無御

座候ニ付、御免地之願申上候得共、不相達候付而、前

住恕嗽寛永十一年甲戌態罷登、猶於江戸達而御訴訟申

上候得者、願之通被遊御免許候付、其節方御尊牌奉安

置候、右御免地目録頂戴仕候前文也、

767

〔雜抄〕

口上

急度令啓候、仍今度御支配名寄帳被相寫、來月十五日限  
ニ本帳相添可被差出候、糺合仕寫帳を留置、本帳ハ可返



進候、一名持切之村者先被召置、わり合之名計可被写候、

地頭所之知行并衆中分茂同前ニ候、御支配究ニ付入事ニ

候間、少茂御延引有間敷候、此由被聞召候通御報待入候、

恐惶謹言、

八月廿六日

新納加賀守

忠清判

高崎伊豆守

能乘判

山田民部小輔

有榮

伊地知治十郎殿

人々御中

以上

768

「古御文書三拾壹卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

一筆申入候、か、やん出之唐船式艘上乘のせ被差越候、  
無吳儀致着岸候、被入御念之段尤存候、此外唐船一艘最  
前致入津候、残而三艘者此表へ不參候、尚爰元之様子使  
者可被申候間、不具候、恐々謹言、

「朱力キ」  
「寛永十一年」

八月廿七日

榊原飛彈守

職直判

神尾内記

元勝判

松平大隅守殿

家老中

松平大隅守殿

家老中

神尾内記

榊原飛彈守

769

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一筆申入候、從其元入滿捕參候付、使者被差添被入御念  
候通尤ニ存候、入滿宿親子同前被差越、得其意候、妻子

甲戌八月廿七日之御狀大窪備前守被持下候、但か、やん舟二艘被うけ  
取之儀也、又唐船三艘被給候、  
「甲戌ハ寛永十一年ニ當レリ」

・下人以上八人其地ニ被預置候由承届候、吉兵衛落着次第追而可申入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕  
九月三日

神尾内記  
元勝〔判〕  
〔花押〕

榊原飛彈守  
職直〔判〕  
〔花押〕

松平大隅守殿

老中

▽◎

松平大隅守殿

老中

榊原飛彈守

神尾内記

方 Δ

〔末紙ニ〕  
甲戌九月三日之御狀三原市右衛門・古後七郎右衛門被持下候、但入滴并吉兵衛父子御うけ取の儀也、

770

〔家久公御譜中〕  
〔正文在頼娃左京〕

爲重陽慶事小袖五到來、怡入候、委曲土井大炊頭可述候、謹言、

〔朱カキ〕  
〔寛永十一年〕 九月七日 家光〔判〕  
〔花押〕

薩摩  
中納言殿

771

〔北郷久加譜中〕

寛永十一年甲戌九月十一日、赴江府、是爲監於芝之御宅地、先是入來院伯耆重國勤仕之、以久加代重國、

772

日新寺之内常潤院之住持吞泰和尚、知行三十三石六斗被買取、常潤院ニ被相付候、寺家江知行被付儀、雖爲御法度、常潤院之儀者 日新様御影御坐候間、他之寺家ニハ可相替候、其上日新寺少知行之儀候間、常潤院ニ見次等可難成候間、右買地被付置候、出物方公役之儀者、諸寺

家可爲同前者也、

寛永十一年九月十七日

伊勢兵部貞昌

川上將監久国

彈正 久慶

常潤院

773 評定所江申出候條々

在江戸弥可相談候、就夫諸人之心持可入事候間、老中其  
外評定所へ被出候衆ハ、稻荷大明神欽諏訪大明神欽之於  
神前、起請文ニ身之血ヲ付、不可存邪心之旨、可致誓紙  
候事、

誓紙之ケ条者、各以談合相定、可致其上事、世上以讒言  
にくき人を云儀、むかしもいまも有之事候間、讒言かま  
しき儀をかろく聞入、人をほろほすましきとの以誓紙、  
各江可被聞事、

以上、

寛永十一年九月廿三日

〔御筆者座旧記之内ニ有之〕

774 覺

高千石者伊勢兵部少輔殿役分式千石之内千石被爲上置  
候、今度返御給之由、渋谷四郎左衛門殿・児玉筑後守殿  
にて被仰下之間、可有支配候、但此高之分上地者有之間  
敷者也、

寛永十一年九月廿五日

川上〔川上〕 左近將監印〔久国〕  
嶋津〔嶋津〕 下野守印〔久元〕  
全〔全〕 彈正太弼印〔久慶〕

山田民部少輔〔有榮〕  
高崎伊豆守殿〔能栄〕  
新納加賀守殿〔忠清〕

775 「古御文書三拾卷中」

一筆致啓上候、然者、被成御進上候松之御材木、目錄を以披露仕候之處、一段首尾能上り申候間、御心易可被思召候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

九月十五日

堀田加賀守

◎正盛(花押)  
〔判〕

松平大隅守様

人々御中

776

〔家久公御譜中〕

同年九月晦日 家光公賜御鷹之鶴於家久、因堀田正盛・阿部忠秋・松平信綱・土井利勝、副從江都至薩摩路程置郵各連印之行書、護送到覺府矣、

777

〔三拾卷中〕

此鶴壹羽從江戸至薩廣國、急度可相届者也、

寛永十一戌

九月晦日

加賀 □ (印)

豊後 ○ (印)

778

〔御文庫拾八番箱廿七卷中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

伊豆 ○ (印)  
大炊 ○ (印)  
右宿中

以上

一筆令啓候、

一其元方捕參候入満つるし殺申候、宿吉兵衛并むす子源右衛門同罪ニ申付候、吉兵衛女房火罪ニ可被申付候、此外吉兵衛子供若年ニ候間、被差免尤存候、其外下女下人助可被申事、  
一五人組之儀、爰元ニ而者、伴天連入満之宿致し、死罪ニ申付候者之五人組ニハ、爲過代、五拾日籠者申付候事、  
一御領分之内、從此方之預ケ者無之候、兩人もの、由、にせ事を申方とありき候て、無如在ものをも預ケ置候由、内々承候間、其御心得可有候、恐々謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
十月一日

神尾内記  
元勝◎判花押

榊原飛騨守  
職直◎判花押

嶋津彈正殿

川上左近將監殿

伊勢兵部少輔殿

「末紙左ノ如シ」  
嶋津彈正殿

榊原飛騨守

川上左近將監殿

神尾内記

伊勢兵部少輔殿

参  
刀

甲戌十月朔日之御狀長崎衆養屋作兵衛尉、同九日被持來候

一入滴ニ宿借候渡部吉兵衛・同子、つりころし被成候、女房可爲火罪由  
被仰候、一五人与五十日籠捨之事、

一御領分ニきりしたんのあつけ物無之由候事、

779

「御文庫三番箱宝鑑中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

猶と其邊御無事之由、弥重存候也、

去夏比者遂面談祝着之至候、其後以書狀成共可申入處、

遠路故心外此事候、仍此薰物乍輕少進之候、猶期後音不

能詳候、かしく、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
初冬二日  
判◎良恕親王御判花押

松平大隅守殿

780

「三番箱宝鑑中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

依遠路乍思久無音不及是非候、其邊弥以無異儀候哉、無

心許候、猶京都珍事無之候、朝暮御床布計候、頓而可有

上洛候、諸端期對話候、かしく、

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
十月八日  
近衛信尋公  
御判◎

薩摩中納言とのへ

781

「家久公御譜中」  
「正文在島津左衛門久道」

御狀致拜見候、仍從中納言様遠路御使札種と被掛御意、

誠以忝奉存候、殊從御手前御太刀一腰、馬代銀三枚被懸

御意、別而過分之至候、隨而中納言様當冬中御上洛可

被成之旨、御尤存候、拙子儀茂承合可罷上覚悟御座

候、相易儀共候ハ、 可得御意候、委細御使者口上

申達候、弥可然様御禮被 候て可給候、頼入候、

猶期後音之時候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
「寛永十一年」

十月十八日

有左衛門佐

直純判花押

嶋津彈正様

御報

「家久公御譜中」

「正文在琉球國國司」

覚

一從 王位 黄門様江年頭之御進物定之事、

一上布 五十疋

一芭蕉 五十端

一焼酎 十壺

一薩州様へ年頭之御進物定之事、

一上布 三拾疋

一芭蕉 三十端

一焼酎 五壺

一黄門様江自金武王子御進上之事、

一はせを 十端欵盆之類か

一焼酎 一壺

一從三司官進上物之事、

一芭蕉 五端

一竹心香欵盆之類か

一使者之進上物者其時とニ於此地老中衆へ可被相尋事、

一右付衆者鳥目百疋宛たるへき事、

一老中衆へ進物者上布十疋・焼酎一壺たるへき事、

一御使衆へ上布五疋・焼酎一壺たるへき事、

一琉球奉行衆へ者老中衆可爲同前事、

一同藏衆并手形取次衆へ礼物被遣間敷事、

一鹿兒嶋にて舟改衆へ禮物入間敷事、

一琉球へ一度御使ニ參候人として、從 王位相續御音信共  
可被成儀、必可爲御無用事、  
右之趣不可有違變候也、

寬永十一年十月十九日

伊勢兵部少輔○(花押)  
貞昌〔判〕

川上左近將監○(花押)  
久國〔判〕

嶋津彈正大弼○(花押)  
久慶〔判〕

三司官

金武王子

「家久公御譜中」

「正文在琉球國國司文庫」

覚

一他國人琉球へ下候儀、堅令停止候間、其地にても無許  
容、早々此方へ可被申上事、付致同心候者相記可被申  
出事、付琉球にて宿かし候ものも可爲曲事候事、

一公儀へ無披露琉球へ内談候て、投銀仕候衆、向後稠可  
有御沙汰候間、琉球へも於被請付者、曲事之段可被仰  
付候事、

一先年者唐之糸直成下直候處、近年高直ニ罷成候、自長  
崎福州にて年々ニ糸を買候、其直成爰元へ巨細相聞得  
候間、琉球口ニ被買候糸の直成、涯分入念可被仰付候、  
高直ニ候者可致其沙汰事、付唐にての雜用糸之直成之  
外に可被書出事、

一福州口にて糸之外卷物之類買間敷候、當年參候卷物、  
いつれ共手のあしき物迄にて、御用不立候、御用之刻  
者從此方可申下候間、如其可被仰付事、

一琉球へ被召下候衆、王位へ之御使ニ而候者、城へ可  
被罷出候、或輕使或銀子之宰領などに罷下候衆、王  
位并 王子衆・三司官へ、曾以罷出間敷候、乍去何そ  
可申子細とも可有之時者、三司官迄者可罷出事、

一其地へ渡海之衆者、相應に御賦飯米給候處、從地下爲  
御馳走飯米故実野菜薪等被遣候共、自今以後、御合力

被請ましく候、但被罷着候刻、不弁ニ可有之御志にて、右之御音信共候ハ、一返ハ可被請取哉、逗留中可被請取事者、必可爲停止事、

一從此方被遣候輕使衆、王位并三司官衆へ捧進物、振舞ニも參、不似合躰共有之由其聞得候、於必定者、其人々の儀者不及申、三司官衆も越度ニ可罷成事、

一公儀へ無御存知日本衆、琉球へ家を持永く逗留仕儀、自今己後者可爲停止候間、左様ニ可被心得事、

一運賃漕之船頭・水手、於其地持家嫁女房いつとなく致逗留、仕上之時分をすらし、大風に合候而荷を打候、

曲事之儀候間、女房を持候事堅可爲停止由、稠可被申渡事、

一七嶋の者同前之事、

一八重間嶋のミヤらと申者、南蛮宗ニ成候故、當時流罪之由候、早と火あふりに可被仰付事、

一琉球之出銀、此中者其色くにて上納させられ候へとも、

就直成之出入琉球之損ニも可罷成之由候間、於此地被爲賣銀子にて可有上納候、但其色にて此方御用之物者、自奉行衆可被申事、付右之賣物他國へ可出時者、老中手形可出事、

右條と堅被承諾、不可有緩疎候、若違変之儀於有之者、稠可及其御沙汰候、仍爲後日條書如件、

寛永十一年十月十九日

伊勢兵部少輔◎(花押) 貞昌〔判〕

川上左近將監◎(花押) 久國〔判〕

嶋津彈正大弼◎(花押) 〔本マ、レ〔判〕

三司官

金武王子

784

「家久公御譜中」



同年十月二十一日、家久謝球王以金武王子・佐敷王子及玉城於京師、無故障奉拜謁 大樹公至家久亦甚怡悅、且年首壽又王冠頂戴等之事備書矣、

785 「正文在琉球國國司」

爲改年之祝儀金武王子被差渡、於京都致對顏節々申談、本望存候、仍爲舊例之儀太平布百端・練芭蕉布五十端・燒酒十甕贈給、珍重存候、從是茂勅作之匂袋一箱十包・薰一箱・屏風一双令進入之候、猶委細者從家老中可申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」十月廿一日 中納言家久〔花押〕「御判」

謹上 中山王

786 「正文在琉球國國司」

去年從唐 勅使被相渡、冠被成頂戴、御満足之由尤存候、爲此等之御祝儀佐鋪王子渡楫、幸甚々々、殊御祝物共御

慇懃之至候、仍能時分 公方樣依御上洛、佐鋪王子・金武王子・玉城、各御礼被申上、於我等大悅存候、委曲金武王子可爲演說候間、不能書載候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十一年」十月廿一日 中納言家久〔花押〕「御判」  
謹上 中山王

787 「家久公御譜中」

先是家久以使者獻硫磺及火繩於 大樹家光公、則土井利勝達 上聽、因賜 台書之旨、且於參觀之時分者、先日既以連署相達事由、詳左利勝之十月二十六日之奉書矣、

788 「古御文書三拾卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

先日之硫磺・火繩、時分能御座候付而遂披露候處、遠路之儀重疊入御念候段、御機嫌ニ御座候而被遣 御内書候、此表相替儀無御座候、江戸御參之儀者、先日以連狀申達候間、弥可被成其御心得候、委細者從下野方可被申上候

790

『高岡法華嶽寺』

「包紙」  
大隅中納言とのへ

「本々」  
信尋

大隅中納言とのへ

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
十月廿七日

あ

「近衛信尋公也」

789

「家久公御譜中」

松平大隅守様

「朱カキ」  
「寛永十一年」  
十月廿六日

土井大炊頭  
利勝◎「花押」  
「判」

去八月六日之書札遂披閱候、使者直東國相通候ニ付、不及即答候、只今歸國之由候間令啓候、今度者在京中度と遂參会本望候、來春者上洛之由風聞候、弥以其通候哉、京都ニ逗留候哉、必以對面可申候、かしく、

条、不能詳候、恐惶謹言、

法華嶽寺

鳴津彈正太弼

久慶判

川上左近將監

久國判

寛永十一年十月廿八日

伊勢兵部少輔

貞昌判

從前々被相付候門前屋敷拾貳石之外、今度四十九石七斗三升、深歲村之内佛生田之門拾三石貳斗七升者一之瀬川より上合六十三斛之儀、虎壽様爲御祈禱被成寄附候間、御祈禱之儀弥可被抽精誠候、永々不可有相違之狀、如件、

791 加世田小湊之内、中之塩屋と數十石之儀、永々被相付候

由、以 日新様御證文之趣御任尤候、如斯御先祖之御證文共候、雖寺社家多く有之、依御法度近代皆と被成毀破候、貴寺之儀者、無餘儀雖爲御寺、餘御知行少地之儀候間、右塩屋中屋敷之儀被付進候、然ハ從前方相付候知行

「高三拾壹石五升、合四拾壹石五升、全可有御領地候也、仍状如件、

寛永十一年  
十月廿八日

伊勢兵部少輔  
貞昌判

河上左近將監  
久國判

嶋津彈正大弼  
久慶判

熊嶽

寶福寺

792 (本文書ハ七九一号文書ト同文ニツキ省略ス)  
「家久公御譜中」  
「正文在國分遠壽寺」

覺

妙蓮様爲御位牌所遠壽寺被立置候、後年不致破壞様ニ、  
貴所喫之從御藏入可被相調者也、

寛永十一年十一月十四日

794 「家久公御譜中」

福屋五郎兵衛殿

兵部少輔  (印)  
左近將監  (印)  
彈正大弼

同年十一月二十六日、家久遣教訓之條書於北郷式部大輔  
忠直、情見書矣、

795 「正文在島津筑後忠置」

覺

一 知行之高壹万石ニ付、出陣之時ハ馬廿騎充之賦ニ候、  
然者其方應知行三萬石候へハ、惣別家中より出候馬六  
十騎ニて候之間、諸士より出候馬之數いかほと、被相  
定、又其方殿ニ被飼置馬數合六十騎、相定たる外ニ可  
被飼置儀、かたく可爲無用事、  
一 飼犬十疋より上ハ可爲停止事、孟子ニ庖有肥肉、廐有

肥馬、民有饑色、野有餓殍、此率戰而食人也と候事、

一 大事之出物有之儀候間、何事も心のまゝ、に用物共被申

付、就中從京都下物など過分有之儀、可爲停止事、

一 衣裳諸細工方有度まゝ、に有之間敷候、君子ハ憂道而不

憂貧と候間、衣裳其外諸道具等を専<sub>ニ</sub>候て、下<sub>ノ</sub>のつ

かれ候儀、道之外<sub>ニ</sub>て候事、

一 鷹おほく被召置ましき事、

一 諸士被召仕様、北郷殿前<sub>ノ</sub>よりの次第、無相違やうに

可有之事、

一 大酒可爲停止事、

一 萬事を差おかれ、自然弓箭などの時、諸人つかれす候

て用<sub>ニ</sub>立候様、連<sub>テ</sub>覚語肝要<sub>ニ</sub>候、北郷殿跡を被継儀

者、當家之ために成候様<sub>ニ</sub>との儀候処、むさと北郷殿

家中くたひれ行候者、其方ふかくに可罷成事、

一 諸士下<sub>ニ</sub>至迄、自然罪科可有之時ハ、家老衆へ能<sub>ク</sub>

内談候て、鹿兒嶋へ被申越、以其上いかやう<sub>ニ</sub>も可相

濟候、心にまかせられ候て、麁相に有之間敷事、

一 学文を専可被懸心候、家國を治事、学文に爲過儀有間  
敷候事、

一 百姓共被召遣様、稠無之様<sub>ニ</sub>可被入念候、百性つかれ

候へハ、其國其所なきかことくに成候事、從上古至于

今眼前<sub>ニ</sub>候、是故論語<sub>ニ</sub>も節用而愛人使民以時与候之

事、

一 惣別百姓町人以下おひひもを解たる様<sub>ニ</sub>存、當代いく

久しくと仰候而こそ、家も繁榮に可目出度候、自然左

様之儀相替り、下<sub>ノ</sub>苦し<sub>ミ</sub>候やう<sub>ニ</sub>成候ハ、天罰遁

あるましく候間、私之不及看經、右之心もちさへ正<sub>ク</sub>

候ハ、縦<sub>ニ</sub>祈念等無之候とも、しねんに可有冥加候之

事、

一 祈念祈禱も底心尊くおもひ、慇懃有之而こそ佛神之守

りも可有之候、信心これあるとて、朝夕わけもなき様

<sub>ニ</sub>されことのやうに祈念祈禱も候ハ、還而其奇特有

之ましき事、

一 知行も國も同前<sub>ニ</sub>て候へ共、其主人之心持<sub>ニ</sub>より人之

多少有之由、古文に相見得候、其主人心持能候へハ、人多出來候、心持惡候へハ人退候、就中武家ハ人多無之候てハ、弓箭ハ不罷成事ニ候事、

一身持輕と敷無之様可有分別候、論語ニ君子不重則不威、學則不固と候、見及候ニも如此文章、主人身持輕と敷候へハ、内之者不恐候、五人三人召仕人さへ、内之者はち恐れ候ハねハ、何事を申付儀も不調候、況一郷一郡之主たる人ハ、先我か行義を慥に候てこそ、下とも其躰を見習ひ、可然道に可入候、氣任ニ我まゝに分別候てハ、諸事相調ましく候、天下ハ天下之天下也、非一人之天下と有之事、

右條と堅被相守、北郷家繁栄候て、當家之可被抽忠節、覺語可爲肝要者也、

寛永十一年十一月廿六日

北郷式部太輔殿

「右式部太輔久直ハ家久公第四ノ御子ニテ、北郷出雲守忠亮ノ後ヲ嗣ガセラル、公御教戒書也」

「家久公御譜中」

「正文在江戸御家老座」

薩摩大隅日州諸縣郡之内

知行方目錄

惣高七拾三萬貳千六百拾六斛

内

三拾壹萬三千二百五拾三斛余 薩摩

「朱カキ」  
押札ニ薩摩ノ下有

三拾壹萬貳千五百四拾九石三斗八田畠之高

七百三石七斗八山川浦濱役之米但米壹石ヲ以高一石

ニシテ相加候、

外ニ

貳千四百五拾六石三斗

内貳千三百拾五石三斗ハ高城郡ノ内水引村ニ同所ト

在之、此目錄ニ落申候、

百四拾一石ハ此度相究候圖田帳ニハ在之、此目錄

ニハ不足

「以上朱書」

拾七萬五千五拾七斛余

大隅

〔朱カキ〕  
押札ニ大隅ノ下ニ有

拾七萬九百三拾五石三斗四升八合田島之高

内百壹石八斗九升六合者 此度相究候圖田帳ニハ無之、

四千百貳拾壹石八斗八山川浦濱役之米右同

拾貳萬六百六斛余

日州諸縣郡

〔朱カキ〕  
押札ニ諸縣郡ノ下ニアリ

拾貳萬貳拾四石ハ

田島之高

五百八拾貳石ハ

山川浦濱役之米右同

押札ニ

合田島ノ高六拾万三千五百八石余

外貳千三百五拾四石余ハ此目錄ニ不足

合六拾萬五千八百六拾貳石ハ御朱印ノ高ニ合申候、

「以上朱カキ」

拾貳萬三千七百斛余

琉球諸嶋

已上

薩摩中納言

寛永十一年甲戌十一月廿六日家久御判

右御分國惣高一紙目錄者、家光將軍軍様御代始之時、

御領國繼目之御朱印被成御拜領候、就其、圖田帳四

冊并此一紙目錄相添、以市來八左衛門尉・永井信濃守

殿・内藤伊賀守殿・安藤右京亮殿迄、被成御進上候、

爲後證被寫置者也、

伊勢兵部少輔判

川上左近將監同

下野守同

彈正大弼同

797 「全御譜中」

同年十二月、家久舉從義久至家久盡忠而奉事功當家家老

之者姓名、粗記小傳等、欲傳于不朽、且不忠之者亦自見

傳中、嘗聞昔時漢武治天下之後、盡畫忠功之臣於麟閣、

長示不忘、如今家久之書記亦畫圖之情乎、悉備于書中矣、

「雜抄」

覺

高拾五石者

築瀨兵右衛門殿

右切米五斛之返地とシテ可有支配候、

高三拾石者

包丁人牧野對馬守殿

右切米拾石之返地

高貳拾壹石者

同 邊見八郎右衛門殿

右切米七石之返地

高貳拾壹石者

同 内山新兵衛殿

右同七石之返地

右者三人包丁役ニ付被給候、自今以後包丁役相替候時者、

此知行可被召上候条、名寄帳奥書ニ可被書記候、是又爲

御存候、已上、

寛永十一年 甲戌 戊十二月朔日

肥後長次郎印

新納加賀守印

三与

御支配所

まいる

「光久公御譜中」

北郷之家就相續、庄内へ被相越祝儀調之由候て、使者殊

太刀一腰・馬一疋令祝着候、猶使へ口上申渡候間、不詳

候、謹言、

「朱カキ」

「寛永十一年」

十二月九日

薩摩守◎(花押)

光久〔御判〕

北郷式部太輔殿

「正文御文庫三番箱五卷中ニ在リ」

「御譜ニ正文在山田巾郎兵衛有英トアリ」  
「家久公御譜中御名ナシ、年号月日アリ」

覺

一少年之時從 太閤公家督之儀被仰出、高麗江相渡、萬

事不案内之処、龍伯公・惟新公被仰談、伊集院下野入

道抱節・鎌田出雲守・比志嶋紀伊守を被相附、朝夕側

をはなれす、内外共ニ可然様ニ精を入、就中伊集院右

衛門大夫入道幸侃誇威勢、國を傾んといたし候を、右

三人見及、龍伯公・惟新公江奉得御内意、諸人幸侃江

心を合○せ候○ハ半○ハ様○トニ○廻計策、高麗より歸朝以來も、  
 國之仕置等念を入、別而石田治部少輔乱劇以後、國家あ  
 やうく成行候時も、抽忠節道をた、しく相守候故、國家  
 無吳儀安全當家之中興、誠其功不可勝計也、因茲比志  
 嶋宮内少前かた不相馴、心中之邪心を雖不知、紀伊  
 守跡を重んじ、家老役申付候處、無知無能ニして背旧  
 政、專新儀我志の所之○まかニ任○せ、畜金銀愛酒女、且又  
 内者殺害等を輕し、無道之驕有之の間、諸人見せしめ  
 のため種子○島へ令流罪、命を助置候得共、生れ付不  
 神妙之間、我惡を悔、分別を改、重而可抽奉公志ハ無  
 之、還而催惡黨○諷をいたすへき志連々顯然候間、令  
 行死罪候、自此方義理者不違候處、右之惡心故天罰不  
 遁候事、

一山田越前入道理安事、先年大友家催六ヶ國之軍兵、日  
 州表江取掛候處、爲高城之主○頭連々城を可持覚悟有  
 之之故、始叔父中務少輔歴々令籠城、於彼地支留 龍  
 伯公・惟新公、其外薩隅日三州之人衆、不殘差合、安

否之合戰有之而被得勝利、全并三州加之九州大形雖屬  
 幕下、大閣公天下之大軍を引率し給ひ、日向・肥後  
 兩口より押入せられ候處、又於高城相支、彼地ニ而和  
 睦ニ成候、然處肥後表○者〔ハ〕出水より早々使を出、義虎  
 大閣公江被申入、何之子細もなく川内迄押入せられ、  
 無正躰候故、龍伯公被成落髮 太閣公御陣江御參り候  
 て、當家相續候、夫より已來理安事 龍伯公御家老役  
 被仰付、別而被召仕候事、

一三原遠江入道正庵事抽奉公、依爲義士御家老役被仰付  
 候由、古來之衆物語委聞傳候、不幸にして子孫断絶之  
 故、其跡を同名備中守令相續候間、近年家老役申付候  
 事、

以上

寛永十一年戊十二月晦日 家久

「御案文御名ナシ年号ナシ」

801

『児玉氏家藏』



御託申上候事、

濱之市以來、親次郎右衛門、自分之高式百石ニ而御奉公申上候、其後休心養子ニ罷成、自分之高式百石休心知行之内ニ籠置、時分を以申上我等附屬可申之由候処ニ、先年於國分蒙御勘氣、知行被召上候、親次郎右衛門事者、御勘氣内ニ相果申候、休心被召直前之知行千百石、其半分ニシテ高五百五拾石被下、休心爲筋目兄次郎右衛門御奉公申候、當分我等事兄格護ニ罷居候、兄次郎右衛門すり切果し我等共格護可申様無之、迷惑之式ニ候、我等事何ぞ御用ニハ罷立間敷候得共、親次郎右衛門自分之高知行被仰付、相應ニ被召仕可被下通、寛永五年二月方山田民部少輔殿・三原左衛門佑殿頼存、遮而御侘言申上候得共、然々御返事も不被仰聞せ、早此節迄ニ摺切はたし、女房子供飢にのそむ躰候、兄次郎右衛門知行之内、高式拾石分地とノ預置候、親次郎右衛門自分之高いまた右衛門兵衛知行之内ニ少分者今ニ相殘算用ニ而候得共、右衛門兵衛事も、知行無殘賣果し我等同前之躰ニ候間、御公

儀へ被召上候本領五百五拾石之内ニ而、此度卒度被成御手附、責而今分ニ御奉公申候様ニ、萬々野州様へ被懸御談合、御助被成候様ニ御国元御老中衆ニ被仰通、御心付候様ニ是非共御侘奉存候由、去々年在江戸へ參候時分、兵部少輔様ニ申上候、御返事ニ承候ハ、當分ハ御借銀過分ニ御座候條、次第ニ被懸御談合可被下候由承候、我等事何共身躰不罷成、迷惑ニ候、今度兵部少輔様京都へ御上洛之由承候、御仕合を以被仰上可被下候、右之侘言爰許御老中へ申上候間、定而被仰上候、巨細者新納勘解由次官殿へ申候條、御尋候而御申上奉頼候通、今度鎌田源左衛門殿御上洛候間、書面を以頼存候、御借銀過分ニ罷成候ニ付、知行被召上之由候、御奉公之儀候間、御侘申儀ニ而ハ無御座候へ共、禿れ果候間、此度於京都鎌田源左衛門殿・新納勘解由殿江御談合被成、兵部様・野州様へ御申上奉頼候、御年比之者之末ニ而候間、御前御仕合之時分ハ禿れ果申儀候條、御申上奉頼候、せめて今之知行成共被下置候様ニ御侘ニ奉存候、以上、

寛永十一年

六月七日

児玉筑後守殿

参

税所三兵衛尉(花押)

後  
編 舊 記 雜 錄 卷八十八

802 「久元日記」

寛永十二年<sup>乙亥</sup>正月二日甲寅雨降東風

一中納言様巳刻御差出有

一御太刀持參

彈正大弼殿 川上左近將監殿 伊勢兵部少輔殿

右者御三献御寄會有但鳥目三百疋宛進上、

一御太刀持參衆

一鳥目貳百疋

一同 百疋

一同 百疋

一同 三百疋

一同 百疋

一同 三百疋

一同 百疋

一同 三百疋

一同 百疋

一同 百疋

一同 百疋

一同 百疋

右へ御三献御寄含有

一鳥目百疋

一同 百疋

一同 百疋

豊後守殿

弥市郎殿

川上上野介殿

喜入攝津守殿

吉利三郎九郎殿

澁谷石見守殿

穎娃長左衛門殿

肝付三郎四郎殿

諏訪神六殿

比志嶋大監物殿

菱刈伴右衛門殿

敷根与兵衛殿

東郷若狭守殿

新納加賀守殿

阿多掃部介殿

一同	百疋	川上七郎次郎殿	一同	百疋	土持平左衛門殿
一同	百疋	新納縫殿介殿	一同	百疋	吉田次郎兵衛殿
一同	百疋	本田作左衛門尉殿	一同	百疋	相良丹後守殿
一同	百疋	村田九郎左衛門殿	一同	百疋	本田休左衛門殿
一同	百疋	寺山四郎左衛門殿	一同	百疋	吉田貞左衛門殿
一同	百疋	新納左京亮殿	一同	百疋	本田弥五郎殿
一同	百疋	本田伊与守殿	一同	三百疋	三原左衛門佐殿
一同	三百疋	山田民部少輔殿	一同	百疋	平田孫六殿
一同	三百疋	鎌田出雲守殿	一同	百疋	桂 小外記殿
一同	百疋	澁谷四郎左衛門殿	一同	百疋	町田休右衛門殿
一同	百疋	三原次郎左衛門殿	一同	百疋	北条出佐守殿
一同	百疋	高崎伊豆守殿	一同	百疋	田原主膳正殿
一同	百疋	相良李助殿	一同	百疋	伊東二右衛門殿
一同	百疋	土持左馬權頭殿	一同	百疋	國分十右衛門殿
一同	百疋	野村大学介殿	一同	百疋	兒玉筑後守殿
一同	百疋	本田甲斐守殿	一同	百疋	中西長門守殿
一同	百疋	鎌田左京亮殿	一同	百疋	三原大藏大輔殿

「家久公御譜中」

寛永十二年乙亥正月上旬日不傳、家久爲述職發覺城而赴于

東武、家老伊勢貞昌隨高駕矣、

一同 百疋

猿渡新介殿

一同 百疋

田尻嘉兵衛殿

已上

一上下之町衆進上

鳥目五百疋

一御太刀進上 馬代三百疋

大和守殿

一御太刀進上 馬代三百疋

基太村新八郎殿

御兩人同座ニ而御三献御寄合有

下野守者江戸罷居候つる、

一具足屋新左衛門子參候、進上

一毛氈壹枚

薬丸伴左衛門

右惣別進上、物奉行請取

肥後惣兵衛

「家久公御譜中」

「正文在篠原喜右衛門」

試筆

中納言家久

そのかミのあまつひつきの跡とめて

道し有世や久かたの春

發句

長閑なる宿りや千とせけふの春

「朱力キ」  
「寛永十二年」

「正文在種子島藏人久時」

改年之吉兆多幸々々、尚以不可有盡期候、爲此等之祝詞

一書令啓候、猶万賀重疊、期後慶之節候、恐々謹言、

正月六日

家久（花押）

種子嶋武藏守殿

「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

極月十五日之御狀、吉利九郎右衛門尉一昨晚持參候間、細々披見仕候、

一 來年此地御普請御當家ニ者御免之由、柳生但馬守殿より内詔候條、其段前廉申入候、可相達と存候事、

一 御普請御免ニ付何ぞ可有御進上由、御意候哉、尤ニ奉存候、先年も角石百本御進上候、此度も猶々左様成もの可有御進上候哉、當時角石六十六本有之儀ニ候間、

今卅四本買添、百本之用意可申置由、先書ニも申入候處、先々可承合由候條、買申間敷通御返事ニ申入候、

然處今度百本之都合可致首尾之旨被仰越候、心得申候方々承合、直成やすく候ハ、買置可申候、此外ニ築石千ニても二千ニ而も可有御進上由候哉、前稜も百貫め程之御入目ニ而御座候つる哉、談合仕、それほどの御

造作之石用意可仕候、柳生但州方加藤勘助殿迄内詔承候ハ、先年角石百本御進上候ハ、此度も可爲百本候、前よりおほく御上事者、必々御無用之由堅承候、其由年内申入候、兎角角石百本之用意者仕、其上ニ築石御

進上候ハ、兵少老御着之時分御談合可申調候、伊豆より石召寄可申苦勞、彼是被入御念被仰越候、石難調候ハ、何を御進上候而可然哉と承候、方々承合御爲可然様ニ可仕事、

一 旧冬柳生但馬守殿・加藤勘助殿・有馬玄蕃頭殿へ可被成御音信由被仰越候、則御三人へ御進物相調、御書同前ニ進覽申候、其御返書迄參候間、進上申候ツ、有馬玄蕃頭殿へ被成御無沙汰候間、今度御書被進之由候へ共、不參候、彼方へ者其刻焼酎一壺、砂糖二桶被進之候條、御失念にてもや候ハんと存、先延引仕候、又大坂へ焼酎・氷砂糖過分ニ有之ニ付、此方へ可被持せ由被仰渡候哉、御藏奉行よりも何程と不申來、兩種共ニ此方へ者未參候、爲御心得候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
寛永十二年

正月九日

下野守

◎〔元花押〕  
久元〔判〕

伊勢兵部少輔様

川上左近將監様

彈正大弼様  
御報

「末ニ左ノ如シ」  
彈正大弼様

川上左近將監様

久元

伊勢兵部少輔様

下野守

乙亥正月九日ノ狀、同廿七日ニ到來、御道具衆持參候、但御普請ニ付  
角石御進上候ハ、先年ニ不相替分量程御進上被成、可然由、柳生但馬  
殿被仰由候、

807

「在谷山土東郷長兵衛」

曳附

高式拾五石者

右者福永長兵衛尉殿へ此度被下候、但父藤四郎事御成  
敗以後雖被召出候、本知行高百拾七石之内式拾五石被  
下置候処、ケ様之并之衆本知行皆々被返下候間、御任  
之由被申候得共、當時御知行相迫候付、今式拾五石被  
相加、合高五拾石ニ被仰付候間、可有支配者也、

寛永十二年正月十二日

兵部少輔判

左近將監同

彈正大弼同

高崎伊豆守殿

山田民部少輔殿

新納加賀守殿

肥後長次郎殿

まいる

808

「家久公御譜中」

「正文在琉球國司文庫」

改曆之嘉祥多幸々々、不可有盡期候、仍其地靜謐令察候、  
然者御太刀一腰・馬一疋并國之方物録に、別緒委曲可相  
達使者口上之間、不能詳候、猶慶事重疊可申承候、恐惶  
謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」正月廿日

中納言家久○(花押)「御判」

謹上 琉球國司

809

「家久公御譜中」

「正文在島津内膳久兵」

返くはこを御うち候ハぬ事のミ思ひ候事候く、  
かしく、

わきと御せうそこ詠めいり候、うちつゝき、てんきよく  
候て、これまで參候事候、山ふしとのも一たんそくさい  
にて候、御心やすかるへく候、やかてまかりくたり候す  
るまゝ、御めにかゝり申まいらせ候、かちきへも御見ま  
いたるへく候、よろつ又々かしく、

「朱カキ」  
「寛永十二年正月」

廿七日

中納言

ちうさま

まいる返事

いゑ久

810

「家久公御譜中」

同年二月朔日、安藤右京進重長・内藤伊賀守有報家久之  
書、所謂去年於京師由頂戴 御判物 重長伊賀守書 御朱印者  
非也、以虛文不害實矣、  
領國之高具記進獻之、如所其致最好、因請取之而進上、

莫勞心志云云、

811

「古御文書三拾卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊書致拜閱候、然者去年於京都御朱印御頂戴被成候、御  
國之高付具ニ御帳被成御上候、一段候て能御座候条、拙  
者共請取指上申候間、御心安可被思食候、永井信州當地  
ニ不罷在候付而、不能加判候、猶期後音之時候、恐惶謹  
言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」

二月朔日

安藤右京進

重長 (花押)

内藤伊賀守

忠重 (花押)

松平大隅守様

尊報

812

「雜抄中」「御譜中ニ無之」

定

一御留守中諸事無緩可入念事、



「雜抄」

一 御在江戸御國彼是慥ニ可有之様ニと思召、談合衆使者  
 被 仰付候處、大形ニ有之候而者、其曲有之間敷候事、  
 一下ニ御留守に、みたりかハしき事、  
 一 兼日御法度被定置候儀を相背もの候ハ、江戸江不及  
 被請 御意曲事ニ可被申付候、  
 一 餘りこまニ敷評定所江被取嘸ましき事、  
 一 各毎朝可致出仕候、別而諸役人事ハ懈怠有間敷事、  
 一 御番所無懈怠可相勤事、  
 一 諸地頭衆ハ第一其所之井手溝耕作之儀、堅申付可致沙  
 汰候、并取納時分ハ其所之御藏入未進無之様、諸出物  
 等之儀無緩其首尾申付、諸事可入念事、  
 一 與頭衆與中之武具・馬鞍等之嗜之事、付諸出物無油斷  
 可申付候、若無沙汰之輩於有之者、到與頭曲事之通可  
 被仰付候事、

乙亥二月朔日

引付

高五百三斛八斗三升者 新納加賀守殿  
 高式百四拾八石壹斗三升者 穎娃長左衛門尉殿  
 高三百拾壹斛五斗者 本田伊豫守殿  
 高百三拾三斛式斗者 野村大学助殿  
 高百八斛八升者 川上又左衛門尉殿  
 高式百三拾八石九升五合者 相良李助殿  
 高百六拾斛壹斗九升者 伊東二右衛門尉殿  
 右之人衆今度 御使役就被 仰付、先年知行四部一上  
 地之分、御使役中被返遣候間、可有支配者也、  
 寛永十二年二月十日

鎌田出雲守  (印)  
 三原左衛門佐  
 川上左近將監  (印)  
 彈正大弼  (印)  
 山田民部少輔殿  
 相良權兵衛尉殿

平田狩野介殿

814 「雜抄」  
覺

高貳千四拾六斛者

内五百三斛者御役分

高千百五拾七石者

内貳百四拾八石御役分

高千貳百四拾六石

内三百拾壹石御役分

高八百六拾三石

内百三十三石御役分

高五百八斛

内百八石御役分

高九百六拾八石

内貳百卅八石御役分

高九百七拾四石

新納加賀守殿

穎娃長左衛門殿

本田伊豫守殿

野村大寺助殿

川上又左衛門尉殿

相良李助殿

伊東式右衛門尉殿

内百六拾石御役分

右之人數、今度御使役就被爲當候ニ付、先年四部一上  
地之分、御使役中被返遣候由候間、可被成御支配候、  
以上、

寛永十二年二月十日

相良權兵衛尉  (印)

平田狩野介  (印)

御支配所

まいる

815 「家久公御譜中」

同年二月十二日、家久在于 至之日 伏見時、島津又八郎忠

平・北郷式部大輔忠直奉賀儲君光久及嫡孫虎壽丸之疱瘡

快然增剛健之使參候、島津久元之書亦帶來伊勢貞昌披覽

之後、副書翰贈本邦之同職、委見貞昌書矣、

816 「御文庫拾八番箱廿八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

薩州様御疱瘡ニ付、從又八郎殿・北郷式部大輔殿御使、

從江戸被罷上候、猶伏見被<sup>◎</sup>上<sup>參</sup>合候而、自野州老之御狀致披見指下候間、可被成御覽候、先々薩州様 虎壽様御庖瘡以後弥御息災之由、目出度御事御座候、將又御國之圖田帳御進上候、内藤伊賀守殿・安藤右京進殿被成御請取、一段可然由被仰御狀參候間、黃門様被成御覽候、此御狀ハ向後可入御用儀も可有御坐候条、能く不失様ニ被召置候而尤ニ御座候、明後十三日ニハ必可被成御打立之由候間、從江戸可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」

二月十二日

伊勢兵部少輔<sup>◎</sup>(花押)  
貞昌(判)

彈正様

川左近將監様

人々御中

彈正様

川左近將監様

參

伏見方

貞昌

伊勢兵部少輔

乙亥二月十二日之狀同廿八日ニカチ木ノ使持下候、但御國之圖田帳内

藤伊賀守殿、安藤右京進殿ニ而上リ候之由也

817

「家久公御譜中」

同年二月十三日、家久發伏見而同月下旬至<sup>日不</sup>江都事及台聽、則三月朔日 上使松平伊豆守信綱來于櫻田第、勞跋涉之辛苦、遙 台命曰、憩息緩緩、而後可登 營、既而信綱歸去、家久乃贈書翰於酒井忠勝・土井利勝、奉謝台命忝、且告早奉拜 台顔、於是兩老有俟時節可報知之 即答矣、

818

「古御文書三十一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尊書之趣致拜見候、隨而御參之儀御耳ニ立、爲上使松平伊豆守を以、緩くと被致休息其上出仕可有之、上意之通忝思食之旨得其意、尤奉存候、併當年未 御目見不被成候間、一刻も早御禮被仰上度御内存候由、尤存候、御前見合重而御左右可申達候、恐惶謹言、

「正文在本田與兵衛」  
覚

一去夏於京都榊原飛驒守殿・神尾内記殿上使ニ而、唐船

「家久公御譜中」

同年三月十七日、家久命不可使大明商舶湊泊吾領内之旨  
於家老等、因家老領旨以連花押之條簡令領内之要津及浦  
浦島島地頭及長官等、如左矣、

「朱力キ」  
「寛永十二年」  
三月朔日

酒井讚岐守  
忠勝判

土井大炊頭  
利勝判

松平大隅守様  
貴報

▽  
松平大隅様

土井大炊頭

酒井讚岐守  
△

之儀被 仰出候、 黄門様御直ニ御請被成御申候ハ、

自今已後御分國中ニ唐船御入有間敷由被成御申候事、

一如右御請御申候間、曾以唐船許容有間敷候、猥ニ右之

旨相背候ハ、曲事之段、深ク敷可被仰付候条、噉衆其

所之五人與ヘ慥ニ可被申付事、

一他浦ニも唐船并破判人又致渡唐候日本人有之由承付、

令披露候ハ、一廉之御褒美可被下事、

一唐船曳舟不可出候、縦洋中ニ而見合候とも、曾以かも

ふましく候、自然指をおろし、舟を損し候由申來候と

も、則刻可追出、若獵船ニ隠し候て或人をのせ、或荷

物をのせ候ハ、可被處敵科事、

一其所之中人之無往來野山嶋儀、就中宇治之嶋ニ別而入

念右之改可被申付事、

右之旨堅固ニ相守可被申付候、件之条々者、天下之御

法度ニ而御國ニ相かゝる儀候處、大形ニ存、緩於有之

者、到地頭噉衆一途之御噉可被仰付候、各銘心肝可被

承届者也、

寛永十二年三月十七日

喜入攝津守殿

左衛門佐判 ○(花押)

出雲守判 ○(花押)

民部少輔

左近將監判 ○(花押)

彈正大弼判 ○(花押)

在口裏

飯嶋

本田伊賀守殿

822

「家久公御譜中」  
「正文在伊勢兵部貞榮」

松平大隅守召列候人數

一 乘馬廿騎外替之乘馬拾騎

一 小之性拾人

一 陸之者百卅人

一 小者中間道具之者式百廿人

一 又小者七百九拾人

都合千百八拾人

「朱カキ」  
「寛永十二年」 四月三日

821

「正文在喜入家」

任便宜用一書候、仍上洛已後者打續天氣能候間、定而早

と可爲上着と存候、然者美作守不圖煩出笑止之躰候、養

生之儀理心藥被用候、我等も兩度見廻候、何共氣色無然

と候之間、心遣之至候、殊更留守之儀候条、別而笑止ニ

候、さこそ其方心遣令啓候、委儀者從在所可相聞候間、

不具候、理心殊外精入養生候、脈躰者能候由申候間、次

第二可爲本復候、追々吉左右可申段候、謹言、

寛永十二年

三月廿三日

家久(花押)

松平薩摩守在江戸ニ召列候人数

一乘馬廿騎

一小と性廿人

一陸之者式百人

一小者・中間・道具之者百拾人

一又小者八百九拾人

都合千貳百四拾人

二口合貳千四百廿人

〔朱カキ〕<sup>亥</sup>寛永十二年四月三日

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

返くこ、元かハる事御入候ハす候、御しろにてハ

御のふおとりにて候、御あそひの事にて候、たうねん

ハやかて御いとまと申候、ほど有ましく候、我く

もそくさいにて候、いもし・ふくろへも申度候く、

かしく、

御文ににそうけ給候、ミまさか事はてられ候よし、さて

もしうしなる事候、いろくどあしき事のミと申候事候、

そもし事この比もわつらひのよし候つるに、やかてよく

御入候よし、めて度候、なにとしてさやうに候や、此度

も、ひた一にうらかたをたのミ、きねんの事申候、いよ

くよく候すると思ひ候事候、くハしき事此使に申候、

又くかしく、

〔朱カキ〕<sup>卯</sup>寛永十二年卯月三日

〔朱カキ〕<sup>卯</sup>寛永十二年卯月三日  
たん正との  
むもし

まいる

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

此人しんさうへ可越候、かしく、

返くひた一に、此たひきねんの事たのミ申候、又とこ

ゝ元にてもきねん申候て申まいらせ候く、かしく、

〔朱カキ〕<sup>卯</sup>寛永十二年

むもし

まいる

江戸より

「正文在島津左衛門久道」

うらかたもよく御入候、よく候ま、いよくきねん  
申候へく候く、かしく、

あらまし申候つる、そもしきねんの事しやうしゆ申候間、  
まふりふたく物もたせしんし候、めて度いた、き候へく  
候、猶其方にてきねんの事申候ま、心やすく思ひ候へ  
く候、よろつめてたく、又こかしく、

「朱カキ」  
「寛永十二年」卯月八日

中納言

たん正との  
むもし  
まいる  
いゑ久

「家久公御譜中」

「正文在琉球國金武王子」

猶以佐鋪之儀能く御養生簡要候、次玉城へ一傳申候、  
被相心得可給候、次馬・太刀并當年之宇治茶一壺書  
信之驗計候、以上、

不圖企書信候、先以海路無異儀其地へ入津之由、玆重多  
幸、仍佐鋪王子不例氣御入候由、其聞餘無心元存如此候、

「家久公御譜中」

「正文在琉球國司文庫」

於養生者不可有疎意候間、定可被成快氣候、様體委細可  
示給儀待存候、將又就此方之儀別而被入精由、令喜悅候、  
弥熟慮所希候、我等儀、從仲春之比在江戸之儀候、猶期  
後信候、恐く謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」

中納言

初夏十八日

家久○(花押)御判

金武王子  
進之候

猶以太刀一腰・馬代白金二十枚并當年之宇治茶一壺  
祝儀之驗計候、以上、

當年者未能書信候、改曆之祝詞者雖事旧候、猶更不可有  
際限候、仍而佐鋪王子鹿兒嶋出船以後之左右令承知度候  
處、中途相付候者、歸帆候而、旧冬極月之末、其地へ着  
船之由申來、玆重存候、將又佐鋪不例氣御入候由、其聞  
候、如何御坐候哉、千萬無心元存候、便宜之節委細可示

給事待入候、我等儀も正月從早と國本打立、二月之末江  
戸へ致參府在之事候、尚期後音不詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔寛永十二年〕

四月十八日

中納言

家久〔御判〕

中山王

玉机下

829

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津左衛門久道〕

くれくおふくろさそと思ひやるはかりにて候、一

しほの物おもいたるへく候く、かしく、

〔喜入忠高意〕

さてもくさくしう内、ふしきなるはてにて候、うちつ

きさそくたん正との、ふくろめいわく、夢うつと

も申へきやう御入候ハす候、とてもかへらぬみちにて候

間、心をはらしおハし候やうに人のおやの心はやミ、さ

らに忘かたき事にて候、たんもしふくろへもよくく申

候やうにまつきこえ候て、一ふて申候、これより申候へ

く候、いそきのまゝ大かた申候く、かしく、

〔朱カキ〕  
〔寛永十二年〕五月十三日

たん正との

むもし

まいる

中納言

いえ久

830

〔家久公御譜中〕

喜入美作忠高、當年季春五日病卒、家計至達貴聞、則五  
月十四日、家久自筆和字之書而賜島津久慶母、慰其哀情、  
忠高者是以其婿也、

831

〔正文在島津左衛門久道〕

くれく殘多事のミ申候く、かしく、

あたし世のうらミ申ても申つくしかたく候、さそくめ

いわくたるへく候、我ら其元うつたち申候おりふしハ、

一しほつ、かなく御入候て、いとまこい申候つる、むか

しになりハて候事、うつ、共夢ならぬあハれ、たん正と

のさそく袖の儀はかりたるへく候、とても歸らぬ事ニ

て候間、心をはれ候やうにとおもい候へく候、まづとり

あへす申候く、かしく、



「朱カキ」  
「寛永十二年」五月十四日

中納言

おふくろ

まいる

いゑ久

「包紙ニアリ」

たん正との

おふくろ

まいる

いゑ久

832

「家久公御譜中」

島津久慶之妹者喜入忠高之室也、忠高卒之後四月十八日病卒、故家久賜久慶之室、書中叮嚀反復言其事矣、

833

「正文在島津左衛門久道」

返く／＼やかて侘いたし共候て、御いとまも出候と申

候、いそかしくこそ候へ、我々も心よくハ候へも、

くたひれたる計候、

うけ給候やうに新さうはん生にて候つれ共、心の外にて候、世中ハなに事もまゝならぬ事のミはかりにて候、西行の哥に、花ちらす月ハくもらぬ世なりせば我はものを

やおもはさらまし、と御入候、世上ハたかきもひき、も

心にまかせざる事にて候、いもし事もさてく／＼あたる

事にて候、御いたハしことハ中く／＼子ともたち二人のお

やにはなれ、あハれる共可申やう御入候ハす候、たん

正とのふくろ一しほふくろのなけきたるへく候、せひな

き事にて候間、心をへ候やうにと申度候、こゝ元かハ

る事なく候、うへ様御はつらいよく候て、めてたかり

候事候、又くかしく、

「朱カキ」  
「寛永十二年」五月廿三日

中納言

たん正との

むもし

いゑ久

「包紙ニ在リ」

たん正との

むもし

まいる

いゑ久

834

「家久公御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

到遠方使書殊兩樽并着共令祝着候、其後者其地之様躰如

何と存候處、いづれも無事之由相聞、満足不過之候、自

是も爲祝義単物帷子并樽肴共銘々進之候、尚期後喜候、

謹言、

「寛永十二年」六月廿日

家久〔花判〕  
〔朱カキ〕

種子嶋左近太輔殿

835 「御文庫廿三番箱十九卷中写」

武家諸法度

一文武弓馬之道專可相嗜事、左文右武古之法也、不可不

兼備矣、弓馬是武家之要樞也、號兵爲凶器不得已而用

之、治不忘乱、何不勵修練乎、

一大名小名在江戸交替所相定也、

毎歳夏四月中可致參勤、從者之員數近來甚多、且國郡

之費且人民之勞也、向後以其相應可減少之、但、上洛

之節者、任教令、公役者可隨分限事、

一新義之城郭構營堅禁止之、居城湟壘石壁以下敗壞之時、

達奉行所、可受其旨也、櫓塀門等之分者、如先規可修

補事、

一於江戸并何國、假令何篇之事雖有之、在國之輩者守其

處、可相〔符〕下知事、

一雖於何處而行刑罰、役者之外不可出向、但、可任檢使

之左右事、

一企新義、結徒黨、成誓約之義、制禁之事、

一諸國主并領主等不可致私之諍論、平日須加謹慎也、若

有可〔反〕遲滯之義者、達奉行所可受其旨事、

一國主・城主壹万石以上并近習之物頭者、私不可結婚姻

事、

一音信贈答嫁娶儀式、或饗應、或家宅營作等、當時甚至

華麗、自今以後、可爲簡略、其外萬事可用儉約事、

一衣裳之科不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上

聽之、紫袷・紫裏、練・無紋之小袖、猥不可着之、至

于諸家郎從緒卒、綾羅錦綉之飾服、非古法、令制禁事、

一乘輿者、一門之歴々、國主、城主、壹万石以上并國大

名之息、城主暨侍從以上之嫡子、或年五十以上、或醫

陰兩道、病人免之、其外禁濫吹、但、免許之輩者各別也、至于諸家中者、於其國撰其人、可載之、公家、門跡、諸出世之衆者制外之事、

一陪臣質人所獻之者、可及追放死刑時者、可伺 上意、

若於當座有難遁義而、斬戮之者、其子細可言上事、

一知行所務清廉沙汰之、不致非法、國郡不可令衰弊事、

一道路驛馬舟梁等無斷〔施〕<sup>◎</sup>、不可令致往還之停滯事、

一私之關所、新法之津留、制禁之事、

一五百石以上之船停止事、

一諸國散在寺社領、自古至今所附來者、向後不可取放事、

一萬事如江戶之法度、於國之所遵行之事、

右條々、准當家先制之旨、今度潤色而定之訖、堅可相

守者也、

寬永十二年六月廿一日 御朱印

836

「御文庫拾八番箱廿八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

急度令啓候、然者江戶江被仰越候去年其元へ着岸仕候ば

八ん船之人數之分、不殘長崎へ可有御越候、於當地穿鑿可仕候、爲其如此候、恐々謹言、

〔朱力字〕  
〔寛永十二〕  
六月廿八日

仙石大和守  
久隆〔判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

榊原飛驒守  
職直〔判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

松平大隅守殿

家老中

松平大隅守殿

仙石大和守

家老中

榊原飛驒守

長崎方

837

「家久公御譜中」

同年六月晦日、徵諸侯伯於 營中、老中傳 台命曰、自

今以後、各以夏四月須爲參觀更替、或賜告或在府之輩以

書記、見示論、如九州國主・城主、僉爲在府、是以家久

亦至于來載三月、在于江都之前定也、故及中山王當年所獻之使節不可淹留于甌府之事、委見貞昌久元之書矣、

838 「御文庫拾八番箱廿七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書申候、然者今度被仰出之御条目、先日写させ候て差下候間、可有御覽候、字之書違共有之歟と存候、能本ニ而写候て、重而差下可申候、御条目之面迄ニ而者不相知之由候而、皆々御年寄衆へ被得御意之由候間、從此方も委被成御尋候て尤存候条、重而細々可申下候、將又昨晦日大名、小名御城へ被爲召候て、諸大名衆自今以後者御參府之衆、夏四月替たるへき由被仰出、今度御暇被遣候衆、又在江戸衆以書立被仰出候、九州衆者皆々在江戸ニ相究候、黃門様御事も來年三月迄◎者可爲御在江戸候、御大儀成儀無申計候、内々今度者御暇にて可爲御歸國と存候処、案ニ相違仕候、此等之段早々可申遣之由 御意候条、如此候、萬事其元御心持可入候、次從琉球當年之

爲御祝儀、使者被參候由、はやとく被仰上候、 黃門様可爲御歸國候条、御對顔候て可爲歸帆と存候処、來年夏◎迄可爲御在江戸候条、先々歸國候様ニ御沙汰尤ニ存候、左様候ハ、内々奉得 御意候て、重而可申下候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
七月朔日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌判  
下野守  
久元◎(花押)  
久元判

川上將監様  
彈正大弼様  
人々御中

「末紙ニ」  
彈正大弼様  
川上將監様  
久元  
下野守

伊勢兵部少輔  
乙亥七月朔日之狀同廿一日御道具衆持下候、但黃門様來年三月迄可爲御在江戸之儀也、又琉球使可召下儀也

「御文庫拾八番箱廿八卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

去春我等罷上候時分、從川上十郎左衛門尉殿、御當家流之馬書就進上候、今度被成御書候、然者御太刀一腰・馬代鳥目百貫被遣候間、御書ニ御太刀被相添、於御屋形御兩所御間ニ御渡尤候、但、將監殿之儀者、御同名之事候間、如何可有之候哉、初而馬之儀被申上候御祝儀之由御意候条、被入御念尤候、御馬代者福屋五郎兵衛尉方へ被仰上可然候、猶委細者東郷藤兵衛尉殿へ申合候間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」

七月六日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌(判)

彈正大弼様

川上左近將監様

人々御中

彈正大弼様

川上將監様

參

貞昌

「在谷山土東郷長兵衛」

伊集院谷口村

下竹原崎門男一人馬一疋

下屋敷七畝十步云々

高ニシテ廿五石

右知行、親父藤四郎殿御成敗之刻、高百拾七石持留之内、前ニ廿五石被給、又今度廿五石被遣之候由候間、令支配者也、

寛永十二年七月九日

三与

御支配所印

「家久公御譜中」

同年七月十二日夜半、家久櫻田第有火、急卒之間爲大火、



伊勢兵部少輔

乙亥七月六日ノ狀八月六日ニ東郷藤兵衛殿被持下候、川上十郎左衛門尉へ薩州様御馬◎釋古ニ付進上候付、御太刀拜領之儀也

「御文庫拾八番箱廿八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

故家久之夫人及幼子漸遁其難、官女等亦然、其外家屋・寶刀・珍器・名畫・墨蹟之類、盡皆爲灰燼耳、餘炎延引飛越而移燒松平陸奥守政宗父子及眞田氏・永井信州父子第宅、暫時間皆爲燒土、呼嗟自己之事不足論、如斯火災之及他家、久甚以迷惑、雖然於第宅急不可不經營之、可設其<sup>○</sup>旨、伊勢貞昌・島津久元、飛書而告在國之家老、細見書矣、

急度令啓候、然者昨晚夜半時分、上之御屋敷へ火事出來候而、咲止千万、中々可申様無御座候、火以之外急ニ候て、御曹子様・御前様、漸々被成御込躰ニ候つる、乍去女房衆ニ至迄、一人も無何事被出候間、目出度候、名物之御腰物・御茶入、一ツも出不申候、其外何にても少も出不申候、火移候御方者、政宗之御父子、眞田殿・永井信濃殿御父子ニ而候、鍋嶋殿などハよけ候て、川向ニ眞田殿へ火移候而、それより又堀越之信濃殿へうつり候、

歴々之御屋敷焼候而、被成御迷惑候、御手前之儀者何ぞ之御災難ニ替候欤と 思召候間、御損者不苦候、御普請ニ御取付候ハん間、過分ニ銀子可入と申事ニ候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
七月十三日

伊勢兵部少輔<sup>○</sup>〔花押〕  
貞昌〔判〕

下野守  
久元<sup>○</sup>〔花押〕

鎌田出雲守様

三原左衛門佑様

山田民部少輔様

川上左近將監様

彈正大弼様

人々御中

彈正大弼様

久元

川上將監様

下野守

火事之御左右也  
乙亥  
七ノ十三日午刻

843

「光久公御譜中」

已上

其方之義、雖爲豊州懷之養子、少知行之故、當時者其方爲私分、別ニ知行不相分之由聞及候之間、黄門様へ伺御意、我等藏入之内五百斛進之候、田坪字等別紙有之、雖爲少分、先可有領知候也、恐々謹言、

「朱カキ」七月十九日  
「寛永十二年」

(島津忠廣、市正)  
寶寿院

光久○(花押)  
〔御判〕

844

「家久公御譜中」  
「正文在島津市之助忠起」

返々々きやうたいいづれもころへまいらせ候く  
かしく、

久しく文しても不申候、ほう寿とのくたりにて、ち、

めき候おもひ候ハんと、この方いづれもそくさいの事にて候、おもひよらすらいねんの四月まで候事候、こ、元たうねんハ、あまりくあつくも御入候ハぬ事にて候、もはやさむく候ハんのていにて候、なつハ六月七はかりにて候、めつらしくこそ御入候事候、よろつほうるんのくう上たるへく候、又とかしく、

「朱カキ」七月廿七日  
「寛永十二年」

中納言

千鶴との  
まいる  
いゑ久

845

「御文庫拾八番箱廿八巻中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

猶と福山之母駄御取せ候而、頼娃之牧ニ可被召加之由被仰出候、又相良殿より母駄御所望候間、十五正可被遣由候、巨細者國分帯刀長被承候間、御談合尤候、以上、

今度御屋形より火事出来ニ付、納殿衆并奥へ不断相詰候定衆之御小者、當番之衆、表之大番衆、惣別御屋敷内ニ

被罷居候衆へ、被 仰出やう御座候而、御褒美之衆も少  
と御座候、又御堪氣之衆も御座候、其様子御條書之写指  
下候間、爲後日候条、可被御覽置候、就中、金銀藏衆・  
進物藏衆之儀者、不届様子ニ候間、先々可致歸國由被  
仰出候、左様ニ候て、次第ニ可有御沙汰との 御詫ニ候、  
將又宅万樂右衛門尉事、 御曹子様奥之局方へ御出懸り  
被成、長屋との間ニ有之隠シ門ニじやうをおろし候て有  
之故、女房衆之分にてハ明候事不成候て、内より皆とた  
、かれ候へ共、覚悟之外にて候故、誰も不聞付候処、樂  
右衛門尉心懸候而走合、板を打はなし、 御曹子様御も  
り仕候而罷出候、其門より女房衆も餘多被罷出候、爲御  
褒美、知行式拾石被下候間、早々知行被相渡候様ニ、配  
當所へ被仰付尤候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
七月廿七日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌〔判〕  
下野守  
久元◎(花押)  
〔判〕

川上將監様

彈正大弼様

人々御中

彈正大弼様

川上左近將監様



参

久元

下野守

伊勢兵部少輔

乙亥七月廿七日ノ狀九月五日ニ鎌田傳左衛門殿・山口李衛門殿被持下  
候

一江戸火事ニ付、宅万樂右衛門虎寿様を出し上候御褒美として、知行  
廿石被下候

一福山の母駄を畚野、牧へ入□由也

846

「御文庫拾八番箱廿八卷中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

急度令啓候、然者今度之火事ニ金銀藏ニ御座候つる小判、  
金四百兩餘・銀子拾貫目程失候、如御存金も銀も焼候と  
て、うせ候物にて無之候、既壁一重ニ御進物藏候つるニ、



諸士衆之被誂置候まめ銀迄、皆見出候処、右之金銀無之儀、盗人爲取ニ相究候、就其、種々穿鑿候へ者、金銀藏之口ニ有之鎖、又金箱ニおろされ候鎖、皆とじゃうの舌を引おり候て御座候、然時者兼而より鎖をおろしたるけりニて、金銀を可盗取才覚にて候欵と皆々申事ニ候、就其、此中者御藏衆ニ可有御沙汰ニ相究候ニ付、藏衆も靈社之起請文被仕候、然處別府主計火事之夜、皆人ハ如御屋形馳參候処、御屋形より大わらハニ成、如町被走出候ニ、皆々被行逢、不審成跡にて候と内々被申候つる、就其目付などをも被相付候ハん欵と候処、書〔立〕<sup>置</sup>を被致、ゆくゑ不知被成行候、其書物不審成様子ニ而候間、爲御覽写候而持せ申候、若妻子など列出候ハんとて、其元へ忍候而被下候儀も可有之候間、其可有御心得候、書〔立〕<sup>置</sup>之日付ハ、去月廿六日にて候処、充所之衆へ渡り候ハ、一昨日四日之晝程にて候、同宿蒲地掃部より彼書物被出候、色々同宿不審之儀共候ニ付、掃部事も先被召籠候次第ニ御沙汰ニて、彼身上之儀者落着可有之候、扱々金銀

盗取候のミならず、御屋形へ火を爲付様子ニ候間、此重罪者、親類へも可相懸と申事ニ候、主計女房へ者暇を爲遣由申候、今度從爰元申遣候哉、又何比暇を遣申候哉、定世上ニ可相知候間、ケ様之儀も可有御沙汰候、相宿衆之外ニも、同類可有之と申事ニ候、尚追々可申下候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
八月六日

伊勢兵部少輔<sup>○</sup>〔花押〕  
貞昌〔判〕

下野守

久元〔判〕<sup>○</sup>〔花押〕

三左衛門佐様

鎌出雲守様

山民部少輔様

川左近將監様

彈正大弼様

人々御中

彈正大弼様

848

「家久公御譜中」  
「正文在琉球國司文庫」

御分國中

左近將監印  
彈正大弼印

847

『在始良含粒寺』

始良含粒寺勸進被相廻候間、諸所以宿次、奉加物含粒寺

江可被送届候、毎年可爲右之通者也、

亥八月九日

亥八月六日の狀

一江戸金銀藏之小判并銀失候事

別府主計走候事

蒲池掃部被召籠候事

川左近將監様

参

久元

下野守

伊勢兵部少輔

850

「御文庫拾八番箱廿八卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚豊公  
貴報

「朱カキ」  
「寛永十二年」 八月十九日

薩摩守  
光久〔御判〕

849

「光久公御譜中」

去冬疱瘡相煩、無異儀令快氣候由、相聞候哉、爲御祝詞

到遠方芳翰珍重候、弥致本復候間、可御心易候、萬縷重

而期書信而已、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」

八月十八日

尚豊公  
御報

松平大隅守〇〔花押〕  
家久〔御判〕

去歲薩摩守致疱瘡候之由桐聞候之哉、爲左様之御祝詞、  
到遠境、早々預御使札、御懇意之至候、無異儀快氣、弥  
息災之儀候之間、令満足候段、可有御推量候、猶期後音  
候、恐惶謹言、

猶以長崎助左衛門尉へ被給米十石之儀、其内何茂切米取并之由候て、被引殘候、爰元にて御侘被申候へ、評定所筆者并・老中与力衆并ニ、十石之内壺石ツ、被召欠候様ニと被申候、在國之筆者衆さへ、十石之内壺石被召上候間、助左〔衛門〕<sup>◎ナシ</sup>事者、續候而之上洛にて候条、責而其並ニハ無之候へてハと出合申候間、當年より八十石之内壺石、又今度五石被給内より、五斗分被召欠尤候、以上、

去月廿四日之御狀、今月十七日到來、則致披露候、

一新造之御懷御産以後御血之道不相調、御氣色于今無御本復候哉、御打臥候程者無御座候へ共、先く御申之由細く達 上聞候、理心御藥進上被申候哉、御脈者能御座候由、被申之由候間、定頃者可爲御快氣候、則飛脚可被差下由 御意候間、申付候事、

一琉球より當年之爲御祝儀被參候使者之儀、兼日如申遣候、弥歸帆尤候、就其從王位御進物之目錄已下、其上御兩殿様へ參候書狀共、今度焼失候間、於其元使者へ

御尋候而、進上之目錄并金王子・三司官などより進上之書立、各より被成請執可被遣候、此方よりハ御書計被遣候、又 薩州様御疱瘡被遊候ニ付、御兩殿様へ從尚豊公之御狀者、有之事ニ候間、此御返書も只今被遣候事、

一當年者御家ニ付而、御凶年之由候て、春初より於其元大御祈禱御立願共候、爰元ニ而も、大御祈禱共候つる故欤、今度火事出來候而、誠名國之御道具共すたり候、火事起り候前方、木村休兵衛と申はかせ、御屋敷ニ一大事之氣がたち申候、能く御祈禱無之候ハ、御家相果申程之御事か、又者 御父子間ニ御不慮之儀可有之欤と申候つる間、護摩などたかせられ、種く御祈禱候ツ、又火事出來候四日前ニ、上御屋敷ニ火柱たち候由候、松平出羽守殿・永井信濃殿之近所ニ、御振舞ニ御座候而、晝二階より御覽候へハ、此方御屋敷ニ事く敷火柱立候を、何も御相客衆皆く被見たる由候、然時者、御信心故、火事ニ相替たるとの 御意ニ候、下くも左

様ニ申候事、

一御前様御事も、五月之廿日時分より、御血之道指起、

殊之外六ヶ敷候ニ付而、最前ハ久志本右馬助殿御養生

ニ而候つれ共、御暇出候而、有馬ヘ湯治候ニ付、同名

式部少殿ヘ御頼候而御養生候、火事之時分者、專御煩

最中ニ而候間、御血之道ハ物ニ被爲驚候事一段悪敷候

条、弥咲止ニ可有之と存候処、火事以後者結句御快氣

ニ而候、ケ様之儀も只事成ぬ儀ニ候と、下々申事ニ候、

右ニ申候はかせ木村申候ハ、下御屋敷之氣も、殊之外

悪敷由申候間、此比愛宕之座主圓福寺ヘ御頼候而、聖

天之法一七日御修行候、此方御祈禱坊主今泉寺ヘ被仰

付、大荒神供も御座候、就其爰元各致談合、御家中之

諸侍衆中より爲御祈禱、日本國中之諸神ヘ、大ほう六

拾六本にて、神舞可有之由、御立願申候、定惣やうニ

相懸り候ハ、させる出銀にてハ有之間敷候条、可被

致其奉行衆、早く被仰付、霜月必神舞成就候様、可被

仰付事、

一長崎助左衛門尉ヘ八木當時拾石被給候、今五石被相加

拾五石可被下由、今度被 仰出候間、可有其首尾事、

一木場羽右衛門尉先日罷下候、今度火事之夜、御屋敷内

ニ罷居候て、御屋形へもをそく參、御用ニも不立候故、

ケ様之通之者ハ、御賦ニケ月分ツ、御ひかへ被成候間、

彼者も主從二人之賦ニケ月分之算用、其元ニ而御扶持

方を以、可被成御差引候、

一吉利下総守殿上洛之時御上せ候條書、今度焼申候間、

題目之儀重而御書立候而可被遣事尤候、猶期後音之時

候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
八月十九日

伊勢兵部少輔◎(花押)  
貞昌判

下野守

久元判◎(花押)

三原左衛門佐様

鎌田出雲守様

山田民部少輔様

川上左近將監様

彈正大弼様

御報

851 「光久公御譜中」

以上

去月廿九日之書狀、今月廿四日到來候、然者今月十日此方打立候早打其許通候刻、今度火事之儀、於船中爲承由申候ニ付、則飛脚被差上候、被入念候段 中納言様別而被成御祝着候、我等居候近邊より火起り候故、皆々漸々出候躰ニて候間、何ニても少も不出候、手前之儀者不及是非候、正宗之父子其外御馬廻之衆類火候、何共令迷惑候、乍去火急ニ候つるニ、上下無何事候間、令満足候、委細定野州・兵部少輔方可被申間、不能詳候、恐々謹言、

「朱力本」  
「寛永十二年」

八月廿六日

薩摩守

光久○(花押)  
〔御判〕

北郷式部太輔殿

852

「家久公御譜中」

「正文在琉球國國司」

覚

- 一 去年於京都、從 黃門様公儀へ琉球高之儀被仰上、御朱印被成御頂戴候書写、今度差下候事、
- 一 琉球國惣高拾貳万三千七百石ニ相窮ニ付、目錄指下候事、
- 一 七月十二日ニ江戸上屋敷不殘炎上候、御家珍等悉令焼却候ニ付、此元諸士高一石ニ付、出銀三匁五分充、年内可爲皆濟由、申渡候事、
- 一 琉球者遠嶋にて海津之渡涉不自由、殊更諸嶋も偏小候間、可爲三匁出銀候、此節者例ニ替心持可入儀候条、急度可有皆濟様ニ可被仰付事、付當國者去々年御檢地被仰付、高一石ニ納米三斗二升ニ相定候、琉球者先年之檢地も、いかにも緩と被仰付候故、當時之納米も爰許よりハ餘分有之由候事、
- 一 毎年琉球出物者、次年之八月限ニ可爲皆濟候、拾月移

候ハ、如此方出銀利足可被相付事、

一當年之糸船歸朝廷引無心元候、去春金武王子ニ細々如申談、一年中ニ御物銀子千貫目充、唐へ可被相渡ニ定候、然時者琉球衆之御奉公者、唐口之商賣之外、別ニ無御座候条、弥被入御精へく候、當國之諸士者、或在京、在江戸、或御使、所之御奉公、不嫌夜白、致辛勞候儀不一事候事、

一軍役方者、馬鞍・具足・鎧・長刀・鉄炮并玉藥・弓矢・ゑひら・うつほ・のほり・刀、乗船或高相應ニ人數を拘置、出陳之用意等之入目、或公界を相勤候衆之雜作、琉球ニ相替、不大方候へ共、三匁五分出銀相調候事、

一たはこ出物一人ニ付銀貳分、位之衆者可爲御免許候、其下へ者、可被仰付候、牛馬口錢之代銀、壹疋ニ付二分五り、作人之高一石ニ壹分出銀、如右之當國道之嶋ニ到迄、數年納來候處、琉球者無其沙汰候、自今以後出物同前ニ上納可被仰付候、若月定より於延引者、出

物同前ニ可爲利付事、付琉球國中男女之人數付并牛馬之數相改候而、帳を相調可被差上せ事、

一唐へ渡楫之船ニ銅を下積ニ仕、唐ニてとうたんニ替り、於此元銀ニ成由候而、從大坂銅四千貳百貫目下候間、次第ニ船便毎ニ可差下候間、漸々ニ唐へ被遣、とうたん被召換可被指上   糸を   渡障ニ必不   成様ニ可被仰付事、

一自今以後琉球諸士之出銀方者、鹿兒嶋出銀藏へ上納候而、御分國中之高奉行へ可有首尾事、

一自江戸被仰下御条目差下候間、聊無御油断可有御調事、一秋走之内として、銀子百貫目差下候事、

一馬之尾三百斤右同前之事、

右之条々、我等前より可申入由、老中衆被仰候間、如此候、巨細者村田郷左衛門尉可被申達者也、

寛永十二年八月廿八日

川上(忠通)又左衛門尉(判)(花押)

三司官

金武王子

まいる

853

「家久公御譜中」

「正文在種子島藏人久時」

久敷其地之到來共無之候、無事候之哉、如何と存候、餘り此中無音ニ相過候之条、使差越候、仍爲祝義肴一種・樽二荷令進入候、内義へも樽一荷并肴進之候、聊書信之驗迄候、謹言、

「朱カキ」寛永十二年九月二日

種子嶋左近太夫殿

家久〔花押〕  
〔御判〕

854

「家久公御譜中」

「正文在島津市之助忠起」

頃者定而無吳義可爲下着と令推量候、其地無事之由致満足候、此方も其後無相替義候之条、可心安候、將亦其方之事弥学文可爲專要候、とにかくに光陰被押移候てハ、咲止候事共に候条、片時も徒ニ被居候ハぬ様、無油断其

心懸可爲肝心候、尚追而可申越候間、期其節候、謹言、

寶寿院

855

「家久公御譜中」

「正文在吉留甚兵衛」

昨晚者、爲重陽之御祝義、御小袖三・染物綾嶋段被懸御意、謹御慰勸之至、幾久もと祝入申候、何様以面上可申述候、恐惶謹言、

「朱カキ」寛永十二年九月七日

松平大隅守

家久〔花押〕  
〔御判〕

土井大炊頭様

人々御中

家久

856

「御文庫拾八番箱廿八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

一筆申遣候、其元へ指戻候鹿籠浦・泊之浦兩浦之船頭・水手共、別紙ニ書付進之候間、被得其旨、死罪可被申付

候、破判人之儀者、於長崎悉死罪申付候、恐と謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十二年

九月十四日

榊原飛驒守

職直〔判〕

仙台大和守

久隆〔判〕

松平大隅守殿

家老中

857

〔全巻中右ノ別紙〕「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一船頭七人

右七人之者ハはたものニ懸可被申候、

一水手三拾人

右三十人之者ハ斬罪可被申付候、

右何茂其所之爲令見ニ候間、鹿籠之浦・泊之浦兩浦ニ

て、急度死罪可被申付候、以上、

〔朱カキ〕  
寛永十二年

九月十四日

飛驒

大和

松平大隅守殿  
家老中

松平大隅守殿

家老中



仙石大和守

榊原飛驒守

858

〔家久公御譜中〕

〔正文在琉球國國司文庫〕

新年之吉兆多幸と、猶更不可有盡期候、爲此等之御祝

儀、太平布五十端・蕉布五十端・焼酎十甕贈預、幾久祝入

候、仍我等事、江戸御仕合能御暇給、去六月致歸國、緩

くと罷在事候、猶期後音不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕  
寛永十二年 九月十七日

中納言家久〔御判〕



「正文在琉球國國司文庫」

猶以香餅・寿帶香・竹心香贈給、大慶不少候、已上、去六月朔日之芳札令披見候、然者去年唐へ船被指渡候之處、二艘共ニ今年五月中旬致歸帆之由候て、急被差上候、其上此已前、五年ニ一度充之進貢致中絶、種々被成懇望、三年ニ二度之進貢ニ成候哉、此上之目出度仕合御座有間鋪候、弥以唐口之義可被入念候、旁工候(本マ)而可申入候条、不能委候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「寛永十二年」

九月十七日

琉球國主

中納言

家久(花押)「御判」

「正文在琉球國國司文庫」

一書申入候、仍去々年渡唐之系船、令歸帆大慶此事候、畢竟三司官能く爲被仰付上にて致首尾候、此等之御礼爲

可申入如茲候、雖不玆候宇治茶一壺・錫鉢十・大重箱五組進之候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「寛永十二年」

九月十七日

琉球國王

中納言

家久(花押)「御判」

「古御文書三拾卷卷中」

尚以被人御念被仰聞候段、過分至極不淺奉存候、以上、

貴札忝致拜見候、仍伴天蓮門徒之儀、重而就被 仰出、十一月朔日より極月中旬迄、日本國同時ニ御改可被成旨、各被仰合之由、最ニ存候、如仰、拙者知行所御隣國之事ニ候間、如何様ニも任御意ニ可申付候、右之通内く被仰遣旨、得其意奉存候、何様令伺候、可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「寛永十二年」

九月廿六日

有馬玄番頭

豐氏(花押)「判」

松隅州様  
貴報

862

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

猶以南蠻宗之義、弥以御法度之旨稠被 仰出ニ付、

來ル十一月朔日より諸國一時ニ可被相改之由、各談

合を以其旨ニ相究候、委者下野守・兵部少より可申

越候条、可被得其心候、我等留守之義候之条、其方

諸事念を入可被申付候、聊以不可有油断候、已上、

其後其許之到來如何と無心元候処、弥以無事之由、今度

相聞、欣悦之至候、此方之義も、皆く無爲之躰候条、可

心安候、將又來春者早くと可致歸國之条、追付犬追物可相

企と存候、久くと中絶之義共ニ候、其上川上十郎左衛門尉

事も年之儀候条、彼らを以爲稽古必くと可相催候、其方事

も兼日馬之用意可爲肝要候、其外射手ニ可罷出衆、其心

得候様、内くと可被申渡候、俄ニ者可難成義候之条、連くと

其覚悟不可有油断候、尚追而可申候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」 九月廿七日

家久○(花押)「御判」

彈正大弼殿

「在包紙」

彈正大弼殿

家久

863

「光久公御譜中」

光久公

男女二十四人略

男子

寛永十二年乙亥 九月生、不日夭亡、

864

「正文在御文庫拾八番箱廿八卷中」

「亂合誤ナシ」  
「家久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓候、然者先日黒葛原治部大輔方を以被仰遣候南

蛮宗改之儀、日本國被仰合候而之儀ニ候条、大形ニ御座

候而者、いつれの國之改やう大かたニ候なとと、御沙汰

ニ可成候、右ニ細々如申候、十一月朔日より極月中旬比迄、日本國同前ニ被改、其内ニ他國之者入來候ハ、何之國之者と能く被糺付、其國ニ而居所之名其者之名を被記付、其國之之家老衆迄、其元より早々以書狀、ケ様ニ申者御存知之儀ニ候哉と、被相理尤候、左様之儀緩ニ無御座様ニ、談合可肝要之由御意候、最前如被仰遣候、此前も穢被改候〔得者〕<sup>◎</sup>、船ニ取乘、方々旅舟之様ニ候而、爰かしこニ繋居候つる由候間、今度御改中、何れの津浦へも旅舟相繋候ハ、其所より早々出合陸へ呼上候て、其舟不出候而能く被問付、如右之國所之名を被記付、其所々へ可被相理儀、不可有御油断候、就中飩之島など相離たる所にて、其上如形廣き嶋にて候間、連々かくれ居候共、不知儀も可有之候、不断旅舟着合候所之由候間、能く入念候様ニと、本田伊賀守殿へ可被仰渡候、はや被罷移候哉、其後とかく相聞得不申候、彼嶋之儀、一向宗殊之外居候由、取沙汰候、定先年御改ニ御沙汰可有之候〔得〕共、伊賀守殿へ被仰、弥其沙汰候様ニ御座候而肝要

ニ候、出水之内諸所、舟之着候所、屋久・永良部・七嶋などへも、念を入させられへく候、種子島之儀者、他宗を被禁候儀ニ候間、別儀有間敷候哉、雖不申及候、惣別御家中方々之津浦へ、目付衆をも可被付置候哉、不可有御油断候、恐惶謹言、

「カキ入也、正文ニハナシ」  
「寛永十二年」  
九月廿七日

伊勢兵部少輔<sup>◎</sup>〔花押〕  
貞昌〔判〕

下野守

久元〔判〕<sup>◎</sup>〔花押〕

三原左衛門佐様

鎌田出雲守様

山田民部少輔様

川上左近將監様

彈正大弼様

人々御中

▽<sup>◎</sup>  
彈正大弼様

川左將監様

山民部少輔様

久元

三左衛門佐様

鎌出雲守様

参

ノ

下野守

伊勢兵部少輔

△

「末紙ニ左ノ如シ」

亥九月廿七日

一南蛮宗改様之事

一一向宗之事

865

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

返くきくもしさためて其方に参候らんと思ひ候、

あまつ候ハぬやうに申候へく候、やかて又申候へく

候く、かしく、

たひく文共うれしく思ひまいらせ候、其元いづれもそ  
くさいのよし、一たんめて度候、こ、元も同前の事にて  
候、何たるかハリたる事も御入候ハす候、きくの花さか

りにて候、哥ともおはし候つる事候、琴も御ひき候や、

糸きれ候すると思ひ候、むかしのむすめと御ひき候へく

候、はやたうねんも十月にうつり行申候、としよりのめ

いわく計候て、よろつ又とかしく、

「朱カキ」

「寛永十二年」九月廿八日

中納言

たん正との

むもし

まいる

いゑ久

「在包紙」

きくの花のさかりにハ参候て、哥をよミ可申候、又

とかしく、

たん正との

むもし

まいる

いゑ久

866

「北郷久直譜中」

寛永十二年丁亥十月、忠直爲 太守公之質、赴江戸、家

老北郷仲左衛門久永従、同十三年丙午正月拜謁 大樹家

光公、遠路参勤苦勞之由有 上意、

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

御使札令拝披候、鹿籠・泊兩浦之船頭・水手罪科之儀、  
先日如申入候、去廿日ニ被致討尉候通、別紙ニ書付御越、  
得其意候申候、遠路預御使者、被入御念儀共ニ候、猶期  
後音之時候、恐々謹言、

「朱力キ」

「寛永十二年」

十月七日

仙石大和守○(花押)

久隆判

榊原飛驒守

○(花押)  
職直判

嶋津彈正殿

川上將監殿

「御文庫三番箱家久五卷中」

文王問太公曰、君務舉賢、而不能獲其功、世亂愈甚、  
以致危亡者何也、太公曰、舉賢而不用、是有舉賢之名、  
而無用賢之實也、文王曰、其失安在、太公曰、其失在

君好用世俗之所譽、而不得其賢也、文王曰、如何、太  
公曰、君以世俗之所譽者爲賢、以世俗之所毀者爲不肖、  
則多黨者進、少黨者退、若是則群邪比周而蔽賢、忠臣  
死於無罪、姦臣以虛譽取爵位、是以世亂愈甚、則國不  
免於危亡、文王曰、舉賢奈何、太公曰、將相分職、而  
各以官名舉人、按名督實、選才考能、令實當其名、名  
當其實、則得舉賢之道也、文王問太公曰、願聞爲國之  
大務、欲使主尊人安、爲之奈何、太公曰、愛民而已、  
文王曰、愛民奈何、太公曰、利而勿害、成而勿敗、生  
而勿殺、與(子)而勿奪、樂而勿苦、喜而勿怒、文王曰、敢  
請釋其故、太公曰、民不失務、則利之、農不失時、則  
成之、省刑罰(不罰無罪)、則生之、薄賦斂、則與之、儉宮室臺榭、  
則樂之、吏清不苛擾、則喜之、民失其務、則害之、農  
失其時、則敗之、無罪而罰、則殺之、重賦斂、則奪之、  
多營宮室臺榭以疲民力、則苦之、吏濁苛擾、則怒之、  
故善爲國者、馭民如父母之愛子、如兄之愛弟、見其饑  
寒、則爲之憂、見其勞苦、則爲之悲、賞罰如加於身、

賦歛如取於己、此愛民之道也、文王問太公曰、賞所以存勸、罰所以示懲、吾欲賞一以勸百、罰一以懲衆、爲之奈何、太公曰、凡用賞者貴信、用罰者貴必、賞信罰必、於耳目之所聞見、則所不聞見者、莫不陰化矣、夫誠暢於天地、通於神明、而況於人乎、

一御爲によき儀申候人者、國老衆之氣に不入候、然共乍存 御爲を申候人者、國老衆之間惡敷成候之事、

一萬事ニ付、國老衆之上にて御座候共、惡敷御座候者、御爲に惡敷儀と存つ、有様を申候へハ、氣に不入、推參ものに罷成候事、

一諸臣下共 御爲に成儀者不申候て、老中衆之前にてハ、機嫌を取、色々へつらひ、氣に入事計仕候、ケ様に仕候之事を、老中衆真と被存候て被罷居候、何共殘多儀にて候、誠ニ御國廣遠ニ御座候間、細なる儀を奉行ニ被申付候て、老中衆者、宜擇善惡人之沙汰、而取誠信去詐僞、御奉公精を入人弥々可致出來候、近年以來、不弁善惡故、人心不均のミ、以邪人爲賢、以賢人爲邪、

務慾舍義、專私忘忠、如此候者、御國之臣下共皆惡敷成、君臣之道御座有間舖と存候、

一萬事ニ付老中衆不被存事計御座候之間、左様之事を〔茂〕物奉行として被罷居候へ共、御爲に成儀者不被申候事、

一老中衆与力共、萬端可心得事多御座候へ共、左様ニ無之候与力之者共ニ、惡敷儀有之候〔得〕共、老中衆之者共にて候間、さしより惡敷儀と申人無之候、

一老中衆、御奉公ニ精を入もの或者惡敷もの、同前ニ被存候之間、誠精を入者も左様ニ無御座候之事、

日新様之伊呂波哥

いにしへの道を聞てもとなへてもわかおこなひにせずは甲斐なし

似たるこそ友としよければしまらはわれにます人おとなしき人

よきあしき人のうへにて身をみかけ友はか、みとなる物ぞかし

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

此方弥無事之躰候、殊 御城も一段静被成御座、御機嫌  
能候之間、可心安候、其地之義、諸式入念可被申付事可  
爲肝要候、年内もはや無程義ニ候、來春者、早く可致歸

そしるにもふたつあるへしおほかたは主人のためにな  
る物としれ

おもほえずちかふ物なり身のうへのよくをはなれて義  
を守れ人

ひとり身をあはれと思へ物ことに民にはゆるすこゝろ  
あるへし

善にうつりあやまれるをハあらためよ義不義ハむまれ  
つかぬもの也

すこしきをたれり共しれみちぬれ八月もほとなきいさ  
よひの空

寛永十二年十月九日

「曾於郡止上社由緒」

覚

- 一 曾於郡 一 清水 一 國府 一 敷根
- 一 福山 一 日當山 一 踊 一 溝邊
- 一 加治木 一 帖佐 一 山田 一 蒲生
- 一 吉田 一 一庄内表

右諸所衆中在郷以勸、曾於郡止上權現之宮、可有再興  
由候間、心落次第可入奉加者也、

「寛永十二乙亥」

左衛門佐

乙亥十月十一日

出雲守判

國候之条、萬事期其節候、謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」十月十一日

家久○(花押)  
「御判」

彈正大弼殿

「在包紙」  
彈正大弼殿

家久

民部少輔判

左近將監判

彈正太弼判

〔全巻中〕

別紙

覚

一伴天連　とうます次兵衛　とし三十八

一小者老　甚吉　とし三十

已上

右之通之人數ニ而隠居候間、爲念書付進之候、

871 (本文書は「旧記雜録後編四」三九九号文書ト同文ニツキ省略ス)

872 「御文庫拾八番箱廿八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

急度申入候、然者今度大村領山中ニ伴天連隠居候ニ付而、

山さかし候處、遁出候、彼伴天連其表御領分へ於參者、

捕可申旨、在る所と可被申付候、恐と謹言、

874 (本文書ハ八七二号文書ト同文ニツキ省略ス)

875 從長崎半天連相定候ニ付、稠可相改之旨被仰下候、當

國者、惣別手札を取往還可仕様申付候、請所之人衆、

男女當歳子〆百歳迄不殘木札を糺、鹿兒嶋江所之衆老

人、庄屋相添持參候而焼印判を押、自由可相逢候、判

錢者出ましく候、札不取者ハ、十一月朔日より從鹿兒

嶋檢者を迫見合ニ可被擲候間、堅不被申付候、

一旅人行脚帳一札但札出ましく候、此条題目之改ニ付、

十月十二日

仙石大和守◎(花押)

久隆判

榊原飛驒守◎(花押)

職直判

松平大隅守殿

家老中



所と留守可有披露候、

一地下人衆中在郷當年子より百歳迄札可差上候、

一地下人之外人と披露浮世人帳一札但札可差上候、

一居付之旅人但書物之上進以札可差上候、

一居付之乞食帳一札但札可差上候、

一せいらい村可爲別帳候、其内ニ旅人居候ハ、旅人帳

一札可差上候、

右無油断早と此方へ可有首非候、恐と謹言、

〔寛永十二年〕十月十七日

鎌田出雲守

山田民部少輔在判

川上左近將監在判

彈正大弼在判

都之城

御家老中

噯衆書物之事、

我々噯中人改被仰付候、一人茂隠不申候、後日跡さらへ

の御衆被記出候ハ、至我々、いかやうにも曲事之旨可被仰付候、爲其如此候、以上、

十月何日

噯衆名判

あて所

地頭

876

覺

一旅人を相改、別帳ニ可被付記候、左候而旅人へハ生國

并當時之居所、年比・宗跡細と書物をさせ、帳ニ相添

此方江可被差上事、

一新唐人・居付之唐人、別帳ニ相付可被差出事、付此節

に唐人他國へ差上出間敷夏、

一衆中男女、おやこ五人与を定、与中旅人不罷居由、書

物させられ、可被差出事、

一町在郷右同前事、

一所中之者何も不残手札を被下、手札不持者ハ相改可被

出候、札者從高城可出事、

一旅人へ者札不出被召置次第、無紛者江ハ札可被下事、  
 一來月朔日より、日本國中一同ニ貴理師且宗改可有之事、  
 付きりしたん宗自他國可走來候間、尋究留置候而、此  
 方江可被爲申事、

以上

寛永十二年十月廿一日

覺

一士衆之女房子并下女誓紙入間敷候、人數改帳ニ者堅固  
 ニ可被付記衷、

一男子者拾歳より拾五歳迄者、誓紙ニゆひかたを仕、拾  
 六歳より上ハ血判たるへく候、拾歳より以下者、判入  
 間敷事、

一他所の衆中何所へ居住仕候ハ、本所之地頭噺衆より、  
 きりしたん宗ニ而無之由、以曳付手札可被出事、地頭  
 噺衆之引付、於不出者、其所之住人ニ可罷成、きりし  
 たん宗にて無之もの、書物を取置手札可被出事、

一他所江居候人之〔被〕官、きりしたん宗ニ而無之候を、  
 主人之成付而、何かしの〔被〕官と札ニ書付、手札可被  
 出候、證文於有之者、向後者其所之住人ニ罷成、主人  
 の手を可離由、書物取置手札可被出事、

一浮世人者其時に相付、うき世人と札書付、手札可被出  
 事、

一町に居候うき世人者、部當より書物を取、町之うき世  
 人者、札ニ書付可被出事、

一唐人奉行新納加賀守殿・穎娃長左衛門殿にて候間、唐  
 人帳右兩人江可有首尾事、

一改衆へ、其所中者、送夫馬・野菜・草・薪・其所とよ  
 り可出候、高百斛より下と改衆へ者、賄夫壺人ツ、  
 其所より可被給事、

一改衆無狼藉様ニ可被相嗜候、細と岩賃(マコ)入間敷事、  
 右條と聊違變有間敷者也、

寛永十二年霜月一日

左衛門佐印判

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

以上

十月廿七日次飛脚之貴札、今二日午之刻ニ參着、致拜見候、きりしたん御改之内、從御領内往來之奉公人・町人之儀者、貴殿様御印判御持せ可被成之由、奉得其意候、將又百姓之儀者、其むよりく之衆、以手形可被成御通之由ニて、別紙ニ六人之御名字書付之通、此方境目之者共ニ具ニ可申付候、從爰許茂先日様子以繼飛札得御意候、定而相届可申と奉存候、恐惶謹言、

「朱力キ」

「寛永十二年」

十一月二日

林田圖書助

重正○(花押)判

堀齋助

純(俊カ)○(花押)判

民部少輔

出雲守

彈正大弼印判

「家久公御譜中」

「正文在青山兵右衛門」

御書中并御使者過當ニ候、明後日ハ可有御來臨之由、辱存候、日出ニ奉待候之間、様躰遂拜顔可申談候、恐惶謹言、

「朱力キ」

「寛永十二年」十一月七日

家久○(花押)御判

在口裏

松平大隅守

水戸中納言様參家久

尊報人々御中

「家久公御譜中」

西監物

純政○(花押)判

嶋津彈正様  
貴報

「雜抄」

「正文在島津左衛門久道」

已上

態用飛札候、きりしたん御改ニ付、往來之儀志布志表ニ  
互ニ申談候、此方領内清武表之儀候、御領分高岡表と申  
談度候、左様ニ御座候者、清武方ハ平邊長右衛門・田中  
四郎左衛門、此兩人印判ニて、奉公人・町人・百姓以下  
迄往來申付度候、高岡表江右之通被仰付候に、此方之儀  
も可申付候、御報可被示下候、恐惶謹言、

「朱力本」  
「寛永十二年」  
十一月十七日

肥田木主人佑○(花押)  
重昌判

川崎大学助○(花押)  
祐宣判

壹岐右近將監○(花押)  
幸光判

嶋津彈正様

人と御中

薩摩之國鹿兒嶋町三官、肥後表江商賣ニ罷越候処ニ、御  
改ニ付被召留候、今度爲迎与四郎と申者遣候、彼者、貴  
(通脱)  
師且宗ニ而無御座通、五人與手前方證文取置候間、御判  
形可被下候、以上、

鹿兒嶋町奉行

新納加賀守

寛永十二年

十二月四日

印判

嶋津彈正殿

882

曳付

高五十石者

平田盛右衛門尉殿

右者、爲加増被給候間、可有支配者也、

寛永十二年十月十五日

左衛門佐印

出雲守印

彈正大弼印

右寛永六年八月十五日高五拾石被下候、曳付アリ

山田民部少輔殿  
新納加賀守殿

「家久公御譜中」  
「正文在島津左衛門久道」

以上

御飛札致拜見候、仍當地從細嶋津御領分之衆借船ニテ、  
御領内波見と申所へ着船之由候、然処ニ最前御約束如申  
上、○拙者共手形持參不仕ニ付、船水主共ニ被爲留置候由、御尤ニ  
奉存候、則細嶋肝煎共召寄、穿鑿仕候処ニ、少も別儀無  
御座者共ニテ御座候間、無吳儀出船仕候様ニ、被仰付可  
被下候、誠被爲入御念、遠路預示忝奉存候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
十一月十九日

林田圖書助○(花押)  
重正〔判〕  
堀齋助○(花押)  
純俊〔判〕

嶋津彈正様  
貫報

『種子島氏藏本』

一書申入候、然者今度南蛮宗之御沙汰ニ付、立野之儀種  
子嶋江可有堪忍由、被仰出候、如御存〔光久公〕薩州様御祖母之  
儀御坐候間、可被添御心候、人之往來等御法度者、公  
衛門續能ノ女ニテ、法名永春ト云、始ハ肥後宇都城主小西標津守行長ノ室ニテ、  
義可被仰渡候、定而作事之儀可有御沙汰候間、於其許  
御老中衆江御熟談尤ニ候、恐惶謹言、  
女一人ヲ生ミ、行長誠ヒタル後島津忠清ノ小西ニ御預ニテ居ラレシニ、娶ラレ桂  
安夫人ヲ生ミ、慶長十四年鹿府ニ來リ、忠清死後野ノ令郷田氏辺ニ居ラレ、野ノ御祖母様トモ又永俊尼トモ爲申由也、行長ト生メル女子ハ喜入標津守忠政ノ  
室トナレリ

「寛永十二年乙亥」  
極月七日  
伊勢兵部少輔  
貞昌

種子嶋左近大夫様  
人々御中

「古御文書三拾卷中」  
「家久公御譜中ニ在リ」

猶々、左衛門佐船、折節大坂ニ罷在、御用〔候〕立、

大慶ニ奉存候、就夫御懇之御礼、御慇懃之至ニ御座候、以上、

遠路被入御念、御使札殊御太刀一腰・御馬代黄金壹枚并御小袖拾被懸貴意、不淺忝奉存候、如被仰下、拙者儀在所仕置申付候様ニと御詫ニ而、仕合能御暇被下罷下候、何様追而可奉得尊意候条、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕  
寛永十二年

十二月十一日

有馬藏人

◎(花押)  
康純判

松平大隅守様

尊報

▽◎  
松平大隅守様

尊報

康純

有馬藏人

△

〔御文庫廿三番箱十九卷中写〕

條々

一忠孝をはけまし、禮法をたゝし、常に文道武藝を心かけ、義理を専にし、風俗を見たるへからさる事、

一軍役如定、旗・弓・鉄炮・鎗・甲冑・馬、皆具諸色、兵具并人積無相違可嗜之事、

一兵具之外不入道具を好、私のおこりいたすへからず、萬儉約を用へし、知行、水損・早損・風損・虫つき、或船破損或火事、此外人も存たる大なる失墮ハ、各別件之子細なくして、進退ならず、奉公難勤輩者、可爲

曲事之事、

一屋作、少身之族に至迄、近年分につき、美麗におよぶ、自分以後進退に應し、其列を承合、かろく致へき事、

一嫁娶儀式、近年小身之輩に至迄甚及華麗、向後諸道具

以下、分に過たる結構致さず、可用儉約、縦大身たりといふとも、なかえつりこし三拾丁・長持五十掉に過へからず、惣而以此數量應分限可沙汰之事、

一振舞之膳木具并盃臺金銀彩色停止之、但高貴人珍客にハ木具不苦、或晴之会合或嫁娶之時者、金銀土器龜足可爲其意次第、惣而振舞之儀からくいたすへし、酒亂醉に及へからさる事、

一音信禮儀、太刀・馬代黄金壹枚或銀拾枚、隨分限以此  
内可減少、或銀壹枚・青銅三百疋・禮物百疋に至迄可  
用之、并小袖拾如右可減少之、雖爲大身不可過之、惣  
而諸色以此積可用遣之、國持大名と禮儀取替しの時も、  
此上之花麗致すへからず、勿論酒肴等も可爲輕少事、  
一被行死罪者在之時者、被仰付輩之外一切其場江不可懸  
集事、

一喧嘩口論堅制禁早、若有之時令荷擔者、其咎可重於本  
人、惣而喧嘩口論之刻、一切不可懸集事、

一於殿中万一喧嘩口論有之節者、番切に相計へし、狼に  
自他番寄集へからず、番無之座ならハ、其所へちかき  
輩可計之、事にも成ましき儀を見ながら、悪事いたさ  
しむへからさる事、

一火事若令出來者、役人并免許之輩之外不可懸集、但役  
人差圖ものハ可罷出事、

一本主のかまいあるもの相抱へからず、叛逆殺容盜賊人  
之届あらハ、急度かへすへし、其外かろき咎のものに

至てハ、侍者届次第追拂へし、小者・中間は可返之、  
難渋におひてハ、番頭・組頭令相談濟へし、番頭なき  
ものハ、そのなみの輩可致談合、若滯所あらハ、役者  
に達し可受差圖事、

一於諸家中大犯人あらハ、たとへ親類縁者たりといふ共、  
直參之輩取持あひかこふへからさる事、

一知行所務諸色あひさたまる年貢所當之外に、非法をな  
し、領地亡所にいたすへからさる事、

一知行境野山水論并屋敷境、於何事も私之諍論いたすへ  
からず、若申分あらハ、番頭・組頭に可令相談、番頭  
なきものハ、其なみの輩に談合に及可濟之、滯儀者達  
役者、可受其旨事、

一組中并与力同心他之組と申分有之時、其組之荷擔いた  
さす、番頭・組頭互に及相談可證之、若滯儀あらハ役  
者達し、可受差圖事、

一百姓公事、双方自分之知行所たるにおひてハ、其地頭  
可計之、相地頭之百姓と公事いたさは、其類之番頭・

組頭以相談きはくへし、番頭なきものハ、其なミの輩  
寄合濟へし、忽而滞儀あらは、役者に達し扱をうくへ  
し、

- 一 跡目之儀、養子ハ存生之内可致言上、末期に及、忘却  
之割申といふ共、用へからず、勿論無筋目者許容すへ  
からず、縦雖爲実子、筋目ちかいたる遺言立ましき事、
- 一 結徒黨致荷擔、或妨をなし、或落書、張文、博奕、不  
行儀之好色、其外に不似相事業仕へからさる事、
- 一 大身・小身共に、自分用所之外買置、商買利潤のかま  
へいたすへからさる事、
- 一 かち若黨、衣類、さやちりめん・平嶋はふたへ・絹袖  
布・木綿之外停止之事、
- 付弓・鉄砲之者、絹袖布・木綿之外不可着之、小者  
・中間、衣類萬に布木綿可用之事、
- 一 物頭・諸役人、萬事付而不可致依怙、并諸役者其外之  
品々、常に致吟味、不可由断事、
- 一 上意之趣、縦如何様之者申渡といふ共、不可違背事、

887

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

以上

右、可相守此旨、若於違犯之族者、糺其咎之輕重、  
急度可被處罪科者也、  
寛永拾貳年十二月十二日

態被差越御使、御狀致拜見候、然者貴理志端宗門、去ル  
霜月朔日方今月十五日迄、日本國一同之御改被仰付而、  
明十五日迄道口・津口番等被仰付、十五日以後者、如前  
く往來可被仰付之旨、得其意存候、何も隣國承合可申入  
候、今度之御改之儀、江戸へ追付可被仰上之由、尤ニ存  
候、越中守所へ國中別条も無之段申遣候、尚御使ニ申達  
候、恐惶謹言、

「朱カキ」  
「寛永十二年」  
極月十四日

長岡監物 ○(花押)  
是季判

有吉頼母佐 ○(英賞)(花押)

判



嶋津彈正様

御報

候故、首尾能仕廻申候而罷戻候由申聞、過分至極存候、

旁爲御礼如此御座候、恐惶謹言、

888

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

已上

態令啓上候、然者當國葦北郡湯浦之百姓源左衛門と申者  
夫婦、去ル四月ニ相走申之由ニ御座候、又益城郡矢部村  
之百姓源六と申者、三年以前ニ走申之由ニ候、然處、今  
度貴理志端御穿鑿ニ付、彼者共貴國ニ罷居候を、御改出  
シ候由ニ而、右男女三人、新納加賀守殿より御使者を被  
相添候て、葦北郡迄返シ被下候通、彼郡奉行所方申越候、  
御懇志之儀共忝存候、越中守ニも右之通可申聞候、將  
○亦  
〔又〕當國王名郡長須浦之藤左衛門と申者之船、去年御國  
鹿籠浦ニ而破損仕ニ付、其船道具已下少々、彼地ニ預置  
申由ニ而、當夏藤左衛門罷越候條、以書狀申入候シ、其  
御報頃致持參拜見仕候、彼者手前之儀、被入御念被仰付

「朱力キ」  
「寛永十二年」

極月十四日

長岡監物○是季(花押)

判

有吉頼母佐

○英貴(花押)  
判

嶋津彈正様

人々御中

889

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

以上

御狀拜見仕候、如仰此中者きりしたん宗旨御改ニ付、往  
來之者共互ニ以手形致往還候、然處ニ、極月十六日方ハ  
如前々被仰付之由、得其意存候、爰許も任仰右之段ニ可  
申付候、此表何ぞ新敷儀共無御座候、御隣國之儀候間、  
替儀共御座候者、互ニ得御意度候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十二年  
極月十五日

肥田木主水佑○(花押)  
重昌判

川崎大学助○(花押)  
祐宣判

壹岐將監  
幸光○(花押)  
判

嶋津彈正様

尊報

890

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

尚以相替儀御座候□可被仰下候、此方方も可得貴意候、以上、

極月十二日之貴札、同十六日ニ參着、忝致拜見候、随而貴理師旦宗門就御改、御隣國申合せ、往來之者共互ニ以手形致通融候処ニ、從當月十六日者如前く可被仰付之由、奉得其意候、此方も御同前ニ可申付候、誠被爲入御念段、畏入奉存候、猶重而可得尊意候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十二年  
極月十七日

西監物  
純政○(花押)  
判

堀齋助  
純俊○(花押)  
判

林田圖書助○(花押)  
重正判

嶋津彈正様

貴報

891

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

以上

追而貴札忝致拜見候、先度此方領内之者御返被下候御礼申上候処ニ、只今又被爲入御念蒙仰候儀、重疊忝奉存候、於以來もケ様之儀者互之儀ニ御座候本マ、被仰付被下候ハ、弥可忝候、從此方も疎意御座有間敷候、恐惶謹言、

「朱力キ」  
寛永十二年  
極月十七日

西監物  
純政○(花押)  
判

「家久公御譜中」

「正文在島津左衛門久道」

以上

去七日之尊報忝令拜見候、然者領内之内福嶋之者共、肥後之國へ商ニ参候而、其御地へ被成御留候ニ付、従是以一書申上候處、申分相違之者共、于今御留被召置之旨、被仰聞、御尤之至候、併名を違へ申候者三人、久藏・善次郎・弥介、一定福嶋之者ニ而候間、先々無吳儀御帰シ可被下候、万被入御念被仰聞、畏存候、將又作左衛門と申候者、是者先月之狀ニ不申上候、彼者も無疑福嶋之者ニ而候間、無吳儀御返シ可被下候、恐惶謹言、

嶋津彈正様

貴報

堀齋助

純〔後方〕判〔花押〕

林田圖書助

重正〔判〕

寛永十二年

高 究 帳

谷山衆

三月十四日

一高百七石者

一高百石者

一高八拾九石者

一高七拾九石者

一高七拾七石者

一高七拾五石者

一高六拾六石者

一高六拾貳石者

一高六拾壹石者

〔朱力キ〕  
寛永十二年

十二月廿五日

嶋津彈正頭様

人々御中

秋月權助

種成〔判〕

〔張紙〕  
此高究帳管冊者谷山士平田甚左衛門殿嫡子平田平太殿ニ筒藏

平山内藏丞

江夏五右衛門尉

吉田喜兵衛尉

高田宮内左衛門尉

有川郷左衛門尉

有川与左衛門尉

池田次郎右衛門尉

留田〔塞〕隱岐守

有馬千兵衛尉

一高五拾九石者	岩切与右衛門尉	、	一高三拾三石者	折田助左衛門尉	、
一高五拾四石者	堀 久左衛門尉	、	一高三拾三石者	柏原但馬守	、
一高五拾三石者	江藤權六	、	一高三拾三石者	長野四郎左衛門尉	、
一高五拾壹石者	東郷長左衛門尉	、	一高三拾貳石者	小倉七介	、
一高五拾壹石者	古牆伊賀守	、	一高三拾壹石者	平田甚左衛門尉	、
一高四拾九石者	山下善右衛門尉	、	一高三拾石者	川野内膳正	、
一高四拾七石者	宇都三寿坊	、	一高廿九石七斗	藤田將兵衛尉	、
一高四拾七石者	中野官兵衛尉	、	一高廿九石貳斗	溝口樋之介	、
一高四拾七石者	最勝寺源兵衛尉	、	一高廿八石九斗	吉井慶右衛門尉	、
一高四拾六石者	平井助太夫	、	一高廿八石者	肥後左京亮	、
一高四拾五石者	肥後善左衛門尉	、	一高廿八石者	伊地知爲右衛門尉	、
一高四拾四石者	白濱丹波守	、	一高廿七石九斗	佐土原城之介	、
一高四拾三石者	瀬戸山爲左衛門尉	、	一高廿五石四斗	富山与介	、
一高四拾三石者	鍋倉弥八良	、	一高五拾石者	福永長兵衛尉	、
一高四拾壹石者	澁江藤七兵衛尉	、	一高廿四石九斗	西村右衛門兵衛尉	、
一高三拾七石者	奈古屋舍人佑	、	一高廿四石六斗	橋口甚内	、
一高三拾五石者	伊地知筑後守	、	一高廿四石五斗	吉利治部右衛門尉	、

一高廿三石九斗	藤田弥右衛門尉	。	一高拾六石四斗	白石利左衛門尉	。
一高廿三石六斗	檢見崎兵右衛門尉。		一高拾六石式斗	羽月佐渡守	、
一高廿三石五斗	益山弥兵衛尉	、	一高拾五石九斗	帖佐大炊佑	。
一高廿式石五斗	厚地新右衛門尉	、	一高拾五石五斗	長井壹岐守	、
一高廿式石五斗	有川源右衛門尉	、	一高拾五石六斗	寺師八右衛門尉	。
一高廿式石五斗	福崎談右衛門尉	、	一高拾五石者	肝付縫殿助	
一高廿式石六斗	有川安房守	、	一高拾四石七斗	前田新左衛門尉	
一高廿壹石五斗	山崎志广丞	、	一高拾四石三斗	藪田次郎右衛門尉	
一高貳拾石	江波甚兵衛尉	、	一高拾四石五斗	岩崎藤右衛門尉	
一高拾九石七斗	愛甲民部左衛門尉。		一高拾四石五斗	竹下勘左衛門尉	
一高廿壹石者	平田拾右衛門	、	一高拾四石五斗	山下萬左衛門尉	、
一高拾八石五斗	矢神納右衛門尉	、	一高拾四石者	隈本八兵衛尉	、
一高拾八石七斗	川本梅屋 <small>(濟)</small>	。	一高拾三石七斗	清藤新兵衛尉	、
一高拾八石壹斗	原口孫兵衛尉	、	一高拾三石五斗	吉井覺右衛門尉	、
一高拾七石九斗	澁江善兵衛尉	、	一高拾三石壹斗	前田主膳正	、
一高拾七石五斗	佐藤主税助	、	一高拾式石六斗	海老原太兵衛尉	、
一高拾七石三斗	田嶋戸左衛門尉	、	一高拾式石五斗	竹内堅介	、

一高拾貳石貳斗	折田七右衛門尉	一高八石者	山下喜左衛門
一高拾貳石七斗	平田孫次郎	一高七石七斗	厚地狩野之介
一高拾壹石七斗	本田志广助	一高七石六斗	吉井新兵衛尉
一高拾壹石七斗	川原内藏丞	一高七石五斗	井口主水佑
一高拾壹石五斗	曾木早兵衛尉	一高七石五斗	中村少兵衛尉
一高拾壹石貳斗	恒吉利右衛門尉	一高七石五斗	鬼塚覚兵衛尉
一高拾石四斗	弓削表右衛門尉	一高七石四斗	杉尾千右衛門尉
一高九石三斗	梶原太郎左衛門尉	一高七石七斗	中村弥左衛門尉
一高九石八斗	藺田軍介	一高七石貳斗	田中小次郎
一高九石五斗	安藤形部左衛門尉	一高七石貳斗	原田九右衛門尉
一高九石者	二見大炊兵衛尉	一高七石貳斗	帖佐弥七左衛門尉
一高九石者	長野勘兵衛尉	一高七石壹斗	松崎助兵衛尉
一高八石四斗	横山賀左衛門尉	一高七石壹斗	肥後和泉守
一高八石八斗	濱田善右衛門尉	一高六石九斗	松田二左衛門尉
一高八石貳斗	篠崎惣左衛門尉	一高六石九斗	鬼塚助七郎
一高八石者	上原彦左衛門尉	一高六石九斗	坂本甚介
一高八石者	原口孫四郎	一高六石七斗	成合三介

一高六石六斗	嶋田五郎兵衛尉	、	一高四石貳斗	東条孫右衛門尉	。
一高六石五斗	鳥丸内藏之丞	、	一高四石貳斗	長井有介	、
一高六石三斗	富山長三良	、	一高四石壹斗	佐藤孫左衛門尉	
一高六石三斗	小田五左衛門尉	、	一高四石壹斗	吉瀬千左衛門尉	
一高六石貳斗	久留小左衛門	、	一高四石壹斗	海老原大藏助	
一高五石三斗	富山土佐守	、	一高四石者	牧瀬三右衛門尉	
一高五石貳斗	今村主殿助	。	一高四石者	竹迫九郎兵衛尉	
一高五石六斗	竹内大左衛門尉	。	一高三石八斗	森 八兵衛尉	
一高五石六斗	長野次郎兵衛尉	。	一高三石七斗	山口七右衛門尉	
一高五石壹斗	富山甲斐守	、	一高三石七斗	福崎大学助	
一高五石者	猪俣傳次良	、	一高三石六斗	高田仲左衛門	
一高四石七斗	羽崎半兵衛尉	、	一高三石六斗	木藤大右衛門	
一高四石七斗	羽月帶刀長	、	一高三石四斗	新原六郎左衛門	、
一高四石五斗	原田清三良	。	一高三石四斗	竹内賀右衛門尉	、
一高四石五斗	入佐与左衛門尉	。	一高三石四斗	存良坊	、
一高四石五斗	野間源兵衛尉	、	一高三石貳斗	牧田半兵衛尉	、
一高四石四斗	田中七郎兵衛尉	、	一高三石貳斗	長井次右衛門尉	、

一高三石式斗	丸野大膳正	、	一高壹石九斗	鶴田彦左衛門尉	、
一高三石者	大脇少監物	、	一高壹石八斗	鬼丸善左衛門尉	。
一高三石者	谷山十郎兵衛尉	、	一高壹石七斗	内村對馬守	。
一高三石者	濱田半左衛門尉	、	一高壹石七斗	橋口与三良	、
一高三石者	寺師丹波守	、	一高壹石七斗	上田隼人佑	、
一高式石九斗	入佐仲兵衛尉		一高壹石五斗	石塚郷兵衛尉	、
一高式石八斗	折田備後守		一高壹石三斗	木原讀岐守	。
一高式石五斗	常波郷兵衛尉		一高壹石式斗	羽月右京亮	、
一高式石五斗	猪俣掃部助		一高壹石式斗	青木兵左衛門尉	、
一高式石五斗	木山四郎左衛門		一高壹石壹斗	大窪勘左衛門尉	、
一高式石五斗	木原孫介		一高壹石者	山下少監物	、
一高式石六斗	橋口覚内		一高壹石者	白濱甚右衛門	、
一高式石五斗	野元勘兵衛尉		一高九斗	鬼塚郷右衛門尉	。
一高式石式斗	大村七兵衛尉		一高九斗	相良勘解由左衛門尉	。
一高式石式斗	長野大乘坊		一高九斗	永倉新介	。
一高式石壹斗	竹迫主殿助	。	一高九斗	鬼丸休七	。
一高式石者	永瀬七左衛門助	、	一高七斗	橋口彦七	。



一高六斗

入佐郷介

内式拾五石者今度加増

一高六斗

谷口休太夫

一高式石者

行司 瀬戸口甚右衛門尉、

一壺ヶ所

平山源左衛門尉

一高式石者

中村行司 佐藤三郎兵衛尉

一壺ヶ所

吉田右近允

一高式石者

平川行司 竹迫九郎兵衛尉

一壺ヶ所

大村七兵衛尉

一高式石者

衆中ふれ 郡山太郎兵衛尉

一壺ヶ所

橋口市兵衛尉

一高式石者

衆中ふれ 山下小左衛門尉

一壺ヶ所

厚地半介

一高式石者

中村肝煎 溝口郷右衛門尉

一壺ヶ所

益山宗兵衛尉

一高式石者

(役力) 濱使 青屋吉右衛門尉

一壺ヶ所

郡山郷右衛門尉

一高式石者

山田村肝煎 牧田吉兵衛尉

一壺ヶ所

平井孫作

一高式石者

下福元村肝煎 川原治左衛門尉

一壺ヶ所

益山諸兵衛尉

一高式石者

上福本村肝煎 山下對馬助

一壺ヶ所

川野泰右衛門尉

一高三石者

常樂寺

一壺ヶ所

中馬左右衛門尉

一高拾三石者

慈眼寺

一壺ヶ所

大脇伊与守

一高百石者

皇德寺

一壺ヶ所

帖佐隼人佑

都合高三千式百七拾石式斗

一壺ヶ所

肥後六左衛門尉

児玉大吉

一沓ヶ所

窪田小監物

一沓ヶ所

留田安藝守

一沓ヶ所

山下新三郎

一沓ヶ所

奥宗兵衛尉

一沓ヶ所

木藤主水佑

一沓ヶ所

桑古屋六兵衛尉

一沓ヶ所

今村弥六

一沓ヶ所

富山少介

一沓ヶ所

吉井加兵衛尉

一沓ヶ所

益山千介

一沓ヶ所

入佐五右衛門尉

一沓ヶ所

久保大学左衛門尉

寛永十二年

三月十四日

平田甚左衛門 (花押)

東郷長左衛門尉 (花押)